

野田遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書



2002.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

野田遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書

2002.3

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

土佐市で本格的な発掘調査が開始され本年度で6年が経過しました。この間県内では高知空港の再拡張，高知自動車道の延伸工事，中村宿毛道路等の大規模開発に伴う発掘調査が実施され，数多くの貴重な発見があり，高知県の歴史に新たな事実を書き加えることができました。これら発掘調査も土佐市バイパスと中村宿毛道路を除いて終了し，それぞれ整理作業に入っており，報告書の刊行が待たれます。

本書は，平成11年度に工事計画され，平成12年度に発掘調査が実施された野田遺跡第 調査地区の報告書です。土佐市バイパス関係では，平成7年度に工事計画されていた都市計画道路1号線以西については本年度すでに刊行した『林口遺跡・蓮池城跡北面遺跡』- 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - をもって完了しており，本書は都市計画道路1号線以東の新たな調査地区に当たります。この調査地区には仁淀川の自然堤防上に立地する野田遺跡と京間遺跡が確認されており，野田遺跡では古代以降，京間遺跡では中世以降の遺構が検出されています。本書で報告する野田遺跡第 調査地区では中世の屋敷跡が確認され，当時の様相が伺えるようになっております。また，発掘調査では初めての出土となる和鏡(山水双鳥鏡)など貴重な資料も発見され，土佐市の中世を考えるうえで貴重な資料を新たに蓄積することができました。

これらの資料は土佐市のみならず高知県の歴史解明に重要であると共に埋蔵文化財の重要性をご理解いただく資料になると思われ，ぜひ多くの方々に活用して頂きたいと願っております。

最後に，調査にあたり多大な御理解と御協力を頂いた国土交通省高知工事事務所，土佐市都市計画課，地元関係者の方々，発掘調査に従事して下さった作業員の皆様には心よりお礼申し上げます。

平成14年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例言

1. 本書は土佐市バイパス建設に伴い平成12年度に発掘調査を実施した野田遺跡第 調査地区の発掘調査報告書である。なお、土佐市バイパス建設に伴う調査の経緯と経過、確認調査、調査の方法及び遺跡の地理的・歴史的環境については平成12年度に刊行した『光永・岡ノ下遺跡』- 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - に記している。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 野田遺跡は高知県土佐市高岡町に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。今回報告する調査区からは中世の屋敷跡に関連するとみられる溝跡や掘立柱建物跡などが確認された。発掘調査は廃土処理の関係上東西2カ所に分けて行い、発掘調査延べ面積は、2,831㎡であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

平成12年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦・岩本繁樹，同主任調査員 伊藤 強・江戸秀輝，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：原真由美，福留美穂

平成13年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 門田伍朗

総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 中城英人

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同主任調査員 中山真司・籠尾泰輔，同調査員 田中涼子・下村 裕，技術補助員 大原直美

臨時職員：福留美穂，阪本由美，馬場洋子

5. 本書の執筆は調査を担当した岩本が調査日誌抄，それ以外を廣田が分担し，編集等は廣田が行った。現場写真は2名(発掘調査を担当した江戸・岩本)が行い，遺物写真は廣田が撮影した。
6. 遺構については，SB(掘立柱建物跡)，SA(塀・柵列跡)，SK(土坑・土坑墓)，SD(溝跡)，P(ピット)等の略号も併用している。遺構番号は通し番号とした。また，掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Nは公共座標におけるGNであり，遺跡付近(国土基本図 - ID18)の真北はGNに対し東に $0^{\circ}16'$ ，磁北はGNに対し西に $5^{\circ}48'35''$ 振っている。なお，野田遺跡のほぼ中心B16(X=55,400,Y=-6,400)は北緯 $33^{\circ}29'59''$ ，東経 $133^{\circ}25'52''$ である。
7. 遺物については，原則として縮尺1/3で掲載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は前述のとおり通し番号とし挿図と図版の遺物番号は一致している。

なお，報告書中で土師質土器としているものはロクロないし回転台を使用しない土師器に対しロクロないし回転台を使用した素焼き土器(粘土紐巻き上げロクロ成形またはロクロ水挽成形されたも

の)の総称として使用している。所謂「回転台土師器」、「ロクロ土師器」などと云われるものに当たる。

8. SK - 1出土の和鏡については、久保智康氏(京都国立博物館)にご教示、ご助言を頂いた。また、掘立柱建物と塀・柵列跡の復元に当たっては現場を担当した技術補助員大原直美の多大な協力を得た。

9. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また、同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。

整理作業員

島村加奈, 岸本洋子, 元木恵利子, 坂本エリ, 竹村小百合, 森田直美, 松田美香, 岩井凉子, 吉野絵里, 森川 歩, 森沢美紀, 横山めぐみ, 原真由美, 西村美喜

10. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)高知工事事務所, 土佐市バイパス監督官詰所, 土佐市都市計画課のご協力を頂いた。また地元住民の方々に、遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き、厚く感謝の意を表したい。

11. 出土遺物は、「00 - 5TN」と注記し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 章 序章

1. はじめに.....	1
2. 調査の契機と経過.....	2
(1) 契機と経過.....	2
(2) 確認調査.....	3

第 章 調査の経過

1. 調査の経過.....	5
2. 調査日誌抄(岩本).....	5

第 章 調査の概要

1. 調査の概要.....	9
(1) 調査の概要.....	9
(2) 層序.....	9
(3) 堆積層出土遺物.....	10
2. 遺構と遺物.....	17
(1) 中世.....	17
掘立柱建物跡.....	17
塀・柵列跡.....	31
土坑.....	33
溝跡.....	39
ピット.....	47
(2) 近世.....	49
掘立柱建物跡.....	49
土坑.....	50
溝跡.....	55

第 章 自然科学分析

はじめに.....	57
1. 試料.....	57
2. 分析方法.....	57
3. 結果.....	57
4. 考察.....	57

第 章 考察

1. 中世について.....	61
----------------	----

2. 和鏡について.....	63
3. 近世について.....	63
4. まとめ.....	64

挿 図 目 次

Fig. 1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図.....	1
Fig. 2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S=1/100,000).....	2
Fig. 3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図(S=1/10,000).....	2
Fig. 4 試掘トレンチ配置図及び調査範囲位置図(S=1/2,500).....	3
Fig. 5 発掘調査風景.....	6
Fig. 6 発掘調査見学会1.....	7
Fig. 7 発掘調査見学会2.....	8
Fig. 8 南壁中央部セクション図.....	10
Fig. 9 第 層出土遺物実測図(東播系須恵器・肥前系陶器・瀬戸・美濃系陶器).....	11
Fig. 10 第 層出土遺物実測図(須恵器).....	12
Fig. 11 第 層出土遺物実測図(土師質土器).....	14
Fig. 12 第 層出土遺物実測図(瓦器).....	15
Fig. 13 第 層出土遺物実測図(東播系須恵器).....	15
Fig. 14 第 層出土遺物実測図(瓦質土器・備前焼).....	16
Fig. 15 第 層出土遺物実測図(青磁・肥前系陶器・土製品ほか).....	17
Fig. 16 SB - 1.....	18
Fig. 17 SB - 2.....	18
Fig. 18 SB - 3.....	18
Fig. 19 SB - 4.....	19
Fig. 20 SB - 5.....	19
Fig. 21 SB - 6.....	19
Fig. 22 SB - 7.....	19
Fig. 23 SB - 8.....	19
Fig. 24 SB - 9.....	20
Fig. 25 SB - 10.....	20
Fig. 26 SB - 11.....	20
Fig. 27 SB - 12.....	20
Fig. 28 SB - 13.....	21
Fig. 29 SB - 14.....	21

Fig. 30	SB - 15.....	21
Fig. 31	SB - 16.....	22
Fig. 32	SB - 17.....	22
Fig. 33	SB - 18.....	22
Fig. 34	SB - 19.....	22
Fig. 35	SB - 20.....	23
Fig. 36	SB - 21.....	23
Fig. 37	SB - 22.....	23
Fig. 38	SB - 23.....	23
Fig. 39	SB - 24.....	23
Fig. 40	SB - 25.....	23
Fig. 41	SB - 26.....	24
Fig. 42	SB - 27.....	24
Fig. 43	SB - 28.....	24
Fig. 44	SB - 29.....	24
Fig. 45	SB - 30.....	24
Fig. 46	SB - 31.....	25
Fig. 47	SB - 32.....	25
Fig. 48	SB - 33.....	26
Fig. 49	SB - 34.....	26
Fig. 50	SB - 35.....	26
Fig. 51	SB - 36.....	26
Fig. 52	SB - 37.....	26
Fig. 53	SB - 38.....	26
Fig. 54	SB - 39.....	27
Fig. 55	SB - 40.....	27
Fig. 56	SB - 41.....	27
Fig. 57	SB - 42.....	27
Fig. 58	SB - 43.....	27
Fig. 59	SB - 44.....	28
Fig. 60	SB - 45.....	28
Fig. 61	SB - 46.....	28
Fig. 62	SB - 47.....	28
Fig. 63	SB - 48.....	28
Fig. 64	SB - 49.....	29
Fig. 65	SB - 50.....	29

Fig. 66	SB - 51.....	29
Fig. 67	SB - 52.....	29
Fig. 68	SB - 53.....	29
Fig. 69	SB - 54.....	30
Fig. 70	SB - 2・9・11・16・22・45・50・53出土遺物実測図.....	31
Fig. 71	SK - 1.....	33
Fig. 72	SK - 1出土遺物実測図.....	34
Fig. 73	SK - 13.....	36
Fig. 74	SK - 4・8・10・13・14出土遺物実測図.....	38
Fig. 75	SK - 15・16出土遺物実測図.....	39
Fig. 76	SD - 2.....	39
Fig. 77	SD - 1・2出土遺物実測図.....	40
Fig. 78	SD - 3・5・9.....	41
Fig. 79	SD - 9.....	41
Fig. 80	SD - 9出土遺物実測図.....	43
Fig. 81	SD - 10～12・16出土遺物実測図.....	46
Fig. 82	ピット出土遺物実測図.....	48
Fig. 83	SB - 55.....	49
Fig. 84	SB - 56.....	49
Fig. 85	SK - 27・30・32・33出土遺物実測図.....	53
Fig. 86	SK - 34.....	54
Fig. 87	SK - 36.....	55
Fig. 88	試料採取位置とリン酸含有量.....	59

表目次

Tab. 1	第 層出土土師質土器杯法量表.....	12
Tab. 2	第 層出土土師質土器小皿法量表.....	13
Tab. 3	西ブロック掘立柱建物跡計測表.....	21
Tab. 4	北東ブロック掘立柱建物跡計測表.....	25
Tab. 5	南東ブロック掘立柱建物跡計測表.....	30
Tab. 6	その他掘立柱建物跡計測表.....	31
Tab. 7	西ブロック塀・柵列跡計測表.....	32
Tab. 8	北東ブロック塀・柵列跡計測表.....	33
Tab. 9	その他の塀・柵列跡計測表.....	33

Tab.10	西ブロック土坑計測表.....	35
Tab.11	SK - 14出土土師質土器法量表.....	37
Tab.12	北東ブロック土坑計測表.....	37
Tab.13	南東ブロック土坑計測表.....	38
Tab.14	SD - 9出土土師質土器法量表.....	42
Tab.15	SD - 11出土土師質土器法量表.....	44
Tab.16	ピット出土土師質土器法量表.....	47
Tab.17	近世掘立柱建物跡計測表.....	50
Tab.18	近世土坑計測表.....	55
Tab.19	SK - 1のリン分析結果.....	58

図版目次

PL. 1	調査前風景(西より) 調査前風景(東より)	PL.12	SK - 31(南より) SK - 36集石検出状態(北より)
PL. 2	調査区西部遺構検出状態(西より) 調査区西部遺構検出状態(東より)	PL.13	SD - 2(南より) SD - 2(南より)
PL. 3	調査区西部遺構完掘状態(西より) 調査区西部遺構完掘状態(東より)	PL.14	SD - 3~5(南より) SD - 8(南より)
PL. 4	調査区東部遺構検出状態(西より) 調査区東部遺構検出状態(東より)	PL.15	SD - 9(西より) SD - 9鉄製刀子(104)出土状態(西より)
PL. 5	調査区東部遺構完掘状態(西より) 調査区東部遺構完掘状態(東より)	PL.16	SD - 11(北より) SD - 12(南より)
PL. 6	調査区西部遺構完掘状態(北上空より) 調査区東部遺構完掘状態(北上空より)	PL.17	第 層瓦器(43)出土状態(南より), SB - 2の柱穴礎板検出状態1(北より), SB - 2の柱穴礎板検出状態2(北西より), SB - 2の柱穴礎板検出状態3(南より), SB - 7の柱穴礎板検出状態(東より), SB - 36の柱穴礎板検出状態(南より), SB - 55の柱穴礎板検出状態(南より), SA - 10の柱穴礎板検出状態(東より)
PL. 7	画像平面図(S = 1/600)	PL.18	SK - 8須恵器(75)出土状態(東より), SK - 14土師質土器(80・81)出土状態 (東より),SD - 9瓦質土器(98)出土状態 (北より),SD - 11土師質土器(112)出土
PL. 8	調査区南壁セクション1(北より) 調査区南壁セクション2(北より)		
PL. 9	SK - 1(東より) SK - 1和鏡出土状態(北東より)		
PL.10	SK - 10・11(南より) SK - 14土師質土器(78・79)出土状態 (西より)		
PL.11	SK - 17(北より) SK - 26(東より)		

- 状態(東より),SD - 11土師質土器(114)
出土状態(北より),P - 7土師質土器
(127)出土状態(南より),P - 8土師質土
器(128)出土状態(東より),P - 12土師
質土器(132)出土状態(北より)
- PL.19 東播系須恵器(片口鉢),肥前系陶器
(碗・皿),瀬戸・美濃系陶器(碗)
須恵器(杯身・高杯・長頸壺・広口壺)
- PL.20 須恵器(甕)
須恵器(甕)
- PL.21 土師質土器(羽釜・鍋)
東播系須恵器(片口鉢),備前焼(擂鉢),
瓦質土器(擂鉢・鍋)
- PL.22 和鏡(保存処理前)
和鏡(保存処理後)
- PL.23 土師器(甕),土師質土器(羽釜),瓦質土
器(羽釜)
須恵器(杯蓋),東播系須恵器(片口鉢),
土師質土器(鍋),常滑焼(甕),備前焼
(擂鉢)
- PL.24 備前焼(擂鉢)内面
備前焼(擂鉢)外面
- PL.25 土師質土器(羽釜),備前焼(擂鉢),青磁
(碗)
瓦器(椀),東播系須恵器(片口鉢),土師
質土器(羽釜),瓦質土器(鍋),白磁(皿),
青磁(杯)
- PL.26 瓦器(椀),土師質土器(小杯・小皿・羽
釜),備前焼(甕・擂鉢),瓦質土器(鍋),
肥前系陶器(鉢・皿),瀬戸・美濃系陶
器(菊皿),土製品(土錘),鉄製品(毛拔
き),石製品(紡錘車・磨製石斧),古銭
- PL.27 土師質土器(杯),瀬戸・美濃系陶器(輪
花皿)
- PL.28 土師質土器(杯・小皿)
- PL.29 瓦器(椀),東播系須恵器(片口鉢),土師
質土器(杯・小皿),土製品(土錘)
- PL.30 土師質土器(杯・小皿),備前焼(小壺),
古銭
- PL.31 緑釉陶器(椀),土師質土器(杯・小皿),
鉄製品(刀子)
- PL.32 瓦器(小皿),土師質土器(小皿),肥前系
陶器(皿),鉄製品(刀子),古銭

付図目次

- 付図1 野田遺跡第 調査地区遺構平面図 (S=1/200)

第 章 序章

1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局から業務委託を受けた土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成12年度に実施した野田遺跡(野田遺跡第 調査地区)の発掘調査の結果をまとめたものである。この一連の調査は国土交通省四国整備局高知工事事務所が実施している土佐市バイパス建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡(埋蔵文化財)の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

野田遺跡は昭和49年道路工事の際発見された縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、仁淀川の右岸の自然堤防上に立地する。平成11年度に市道都市計画道路1号線(以下「都計道路」という)から県道39号土佐伊野線間(以下「県道39号」という)の試掘調査を行い中近世の遺構を確認したことを受け、平成12年度に本発掘調査を実施した。その結果中世から近世にかけての遺構と遺物を検出することができた。遺構の多くは掘立柱建物の柱穴と考えられるピットで2,300個以上を確認し、和鏡などを副葬する屋敷墓とみられる土坑墓も検出した。これらは溝によって区画され、屋敷を構成していたものとみられ、ホノギ(小字)の「土居」(屋敷を意味する地名)とも一致する。さらに、平成12年度に行った県道39号以東の試掘調査によって県道39号から約100m東まで当該期や古代の遺構・遺物が確認されており、東西約200m、南北約700mの範囲に集落が形成されていたものとみられる。

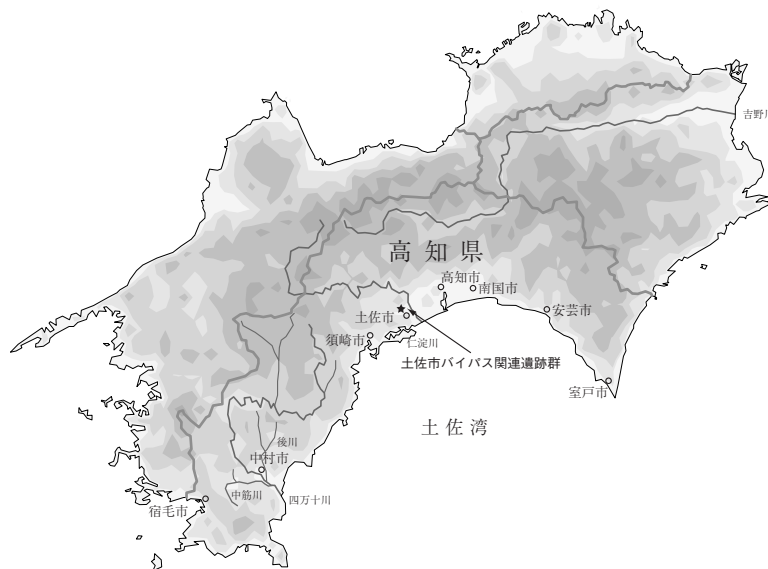


Fig.1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図

2. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

平成7年度当時、土佐市バイパス建設は当面都計道路以西^①について行われる予定であったが、平成11年度になって都計道路以東についても引き続き工事が実施されることとなり、当該箇所の確認調査を行う必要が生じた。確認調査は平成11年度に都計道路と県道39号間を行い、平成12年度に県道39号以東から国道56号線までの間の確認調査を行った。その結果、野田遺跡については前述のとおり範囲が東に拡大すると共に新たに京間

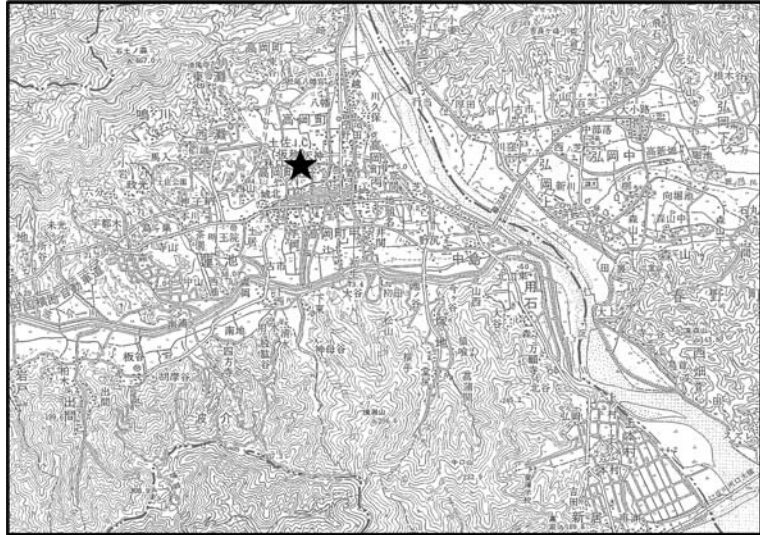


Fig.2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図(S=1/100,000)



Fig.3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図(S=1/10,000)

遺跡を確認することとなった。両遺跡とも仁淀川右岸の自然堤防上に立地する遺跡で、自然堤防が南北にのびていることから遺跡もそれに沿った形となっている。丁度この自然堤防頂部には江戸時代に造られた水路が走っている。

調査は、平成12年度に野田遺跡(西半分に当たり第 調査地区と呼称する)と京間遺跡南部の工事用道路部分(幅約12m,延長約90m)を行い、平成13年度に京間遺跡と野田遺跡(東半分の第 調査地区)を実施している。但し、京間遺跡と野田遺跡とも未買収等で未調査部分が残っており、それらについては平成14年度に本調査を行う予定である。また、幅員改良が計画されている南京間から仁淀川大橋までの国道56号線については平成14年度以降に確認調査が計画されている。なお、本年度調査を行っている京間遺跡と野田遺跡については、平成14年度に残りの部分の調査を行った上で平成15年度に報告書『野田遺跡・京間遺跡』-土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書-)を作成する予定であり、平成12年度に実施した確認調査についてもそこで報告することとし、本書では平成11年度に行った確認調査について報告する。

(2) 確認調査

確認調査は都計道路から県道39号の間を対象に平成11年10月19日から10月21日まで行った。調査対象地の西側については平成7年度の確認調査²⁾の結果から自然堤防間の河川の氾濫原である可

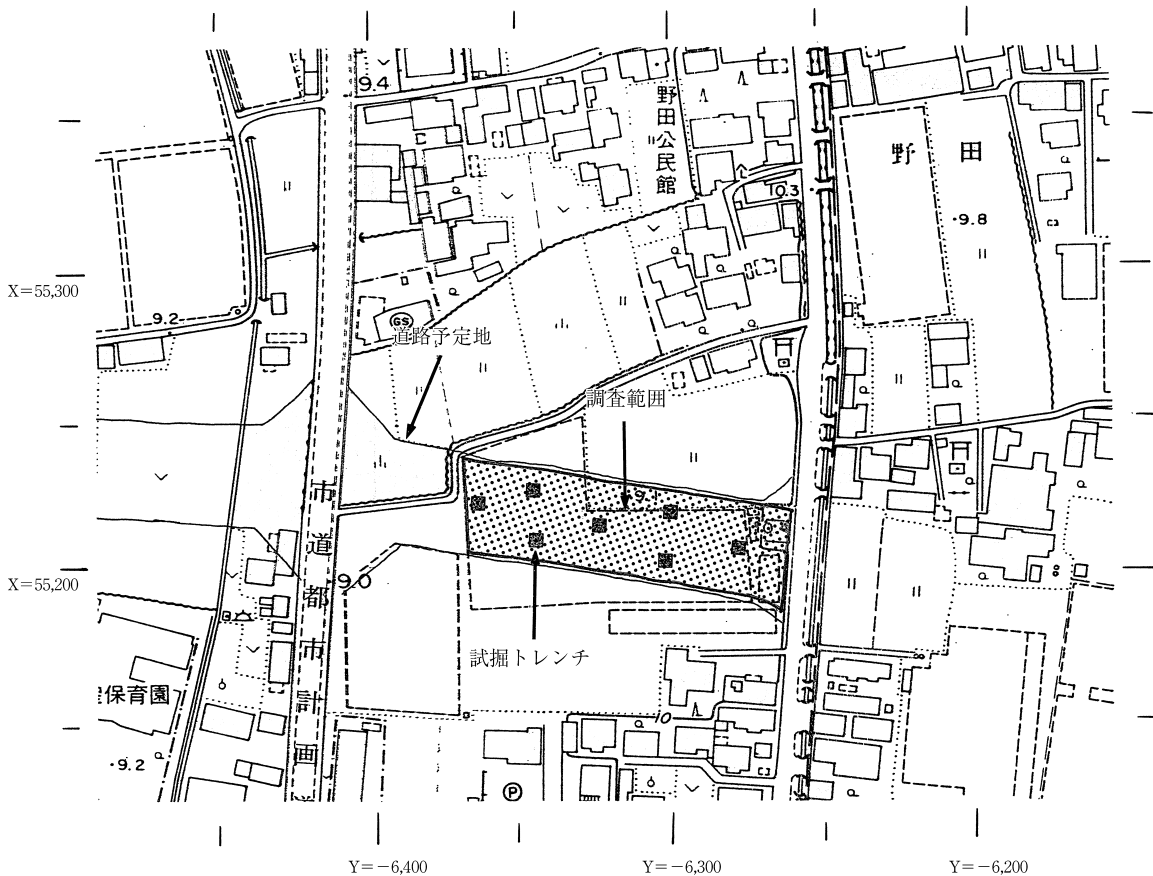


Fig.4 試掘トレンチ配置図及び調査範囲位置図(S=1/2,500)

能性も考えられたが、設定した7カ所のトレンチ(5×5m)のうち6カ所から遺物包含層並びに遺構が検出された。最も西に設定したTR - 7のみ流れ込みと考えられる遺物はみられたものの遺構は検出されず、土層には砂質土の堆積が顕著で、氾濫原に近づく様相を呈していた。

また、天神遺跡以西の遺跡でみられたような粘土層の堆積はなく、地表下1.5～2.0mで基盤の砂礫層に当たり、遺跡の立地の違いを明瞭に表している。さらに、遺構は東にのびており、県道39号以東についても遺構の存在が十分推察された。

以上の結果から県道39号から西約100m間の本調査が必要であると判断された。

註

- (1) 『光永・岡ノ下遺跡』 - 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 平成12年11月の中で「契機と経過」として記している。
- (2) 『光永・岡ノ下遺跡』 - 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 平成12年11月の中で「確認調査」として記している。

第 章 調査の経過

1. 調査の経過

野田遺跡は、昭和49年の都計道路建設中に土器がまとまって発見されたことからその存在が明らかになり、当初は都計道路に沿って遺跡が広がるものと推測されたが、土佐市バイパス関係の発掘調査や周辺の試掘調査によって実際の遺跡の範囲は中井筋用水に沿って広がるものと考えられるようになった。換言すれば、丁度中井筋用水が自然堤防頂部に設置されているため、遺跡は自然堤防上に拡がり、その範囲は、東西が約200mとみられ、南北は約700mと推定するものの明確ではなく、さらに広がる可能性も考えられる。かつて発見された土器は、光永・岡ノ下遺跡の祭祀関連遺構(SF-1)¹⁾にみられるような自然堤防縁辺部における散発的な祭祀関連遺構に伴う遺物ではなかったと考えられる。調査によって検出された遺構は中世以降のものであるが、出土した遺物には古墳時代後期のものや古代の布目瓦もみられることから当該期の遺構の存在も十分考えられる。実際、平成12年度の野田遺跡の確認調査や平成13年度の本調査では多量の古代の瓦が出土しており、古代の寺跡の存在が明らかになろうとしている。

調査は廃土置き場の関係から調査対象地を東西二つに分け、西側をA区、東側をB区と呼称し、A区から行った。調査期間は、A区(西側)が平成12年5月15日から7月14日、B区が平成12年7月24日から11月13日の実働104日で、調査面積は2,831m²であった。

2. 調査日誌抄

A区(西側) 2000.5.15~7.17

5・15 本日から発掘調査を開始する。まず、南側壁面沿いに排水溝を兼ねたトレンチを掘り、層位の確認を行いながら重機による掘削作業を進める。
5・16 重機による掘削作業と併行して遺構の検出作業を行う。調査区周辺の排水溝を造設する。
5・17 雨天のために現場作業を中止する。
5・18 茶色シルト層の面で暗灰褐色粘土を含む土を埋土とした遺構(溝状遺構・ピット・土坑)を検出する。
5・19 トイレ、ユニットハウス、倉庫の移動を行う。降雨のため作業は午前中で終了する。
5・22 北西隅から完形の土師質土器小皿が出土し、写真撮影後、測量して取り上げる。
5・23 遺構検出作業を進めながらグリッドの杭打ち作業を始める。
5・24 遺構検出作業を完了し、遺構配置図を作成する。

5・25 精査を行い、遺構検出状態の写真撮影に備える。
5・26 遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構調査の準備を行う。
5・29 遺構の調査を行う。
5・30 引き続き遺構の調査を行う。
5・31 雨天のために作業を中止する。
6・1 遺構の調査を行う。
6・2 引き続き遺構の調査を行う。雨対策のためポンプを設置する。
6・5 引き続き遺構の調査を行う。土坑から銅銭と和鏡が出土する。
6・6 引き続き遺構の調査を行う。銅銭と和鏡が出土した土坑のリン分析を行うため土壌のサンプリングを行う。
6・7 引き続き遺構の調査を行う。
6・8 引き続き遺構の調査を行う。

6・9 降雨のため現場作業を中止する。

6・12 引き続き遺構の調査を行う。

6・13 引き続き遺構の調査を行う。

6・14 引き続き遺構の調査を行う。

6・15 引き続き遺構の調査を行う。

6・16 引き続き遺構の調査を行う。

6・19 引き続き遺構の調査を行う。

6・20 遺構の調査と併行して南壁のセクションを実測する。

6・21 遺構の調査と併行してレベル測量と北壁セクションを実測する。

6・22 遺構の調査と併行して北壁と西壁のセクションを実測する。

6・23 遺構の調査と併行してセクションの写真撮影を行う。

6・26 調査区全体の清掃後、完掘状態の写真撮影を行う。

6・27 雨天のために現場作業を中止する。

6・28 産業用ヘリコプターによる空中写真測量のため調査区の清掃を行う。

6・29 産業用ヘリコプターによる空中写真撮影を行う。

6・30 遺構平面の補足測量を行う。

7・3 下層確認のためのトレンチを設定する。下層から新たに須恵器、土師器等を含む遺物包含層を確認する。

7・4 トレンチを拡張し、遺構検出を行い、ピットB区（東側）2000.7.24～11.13

7・24 本日から東側の発掘調査を開始する。まず、廃材等の移動を重機で行う。

7・25 引き続き、廃材等の移動を重機で行う。

7・26 重機による東端から土層掘削を開始する。併行して遺構検出作業も行う。

7・27 雨天のために作業を中止する。

7・31 雨天のために作業を中止する。

8・1 雨天のために作業を中止する。

8・2 雨天のために作業を中止する。

トや土坑を検出する。

7・5 遺物包含層の拡がりを追って、トレンチを拡張し、遺構検出を行う。

7・6 引き続き遺構検出を行う。

7・7 遺構の検出作業に併行して、北壁に設けたトレンチの土層の写真撮影を行う。

7・10 2次検出面の遺構検出状態写真の撮影を行う。遺構配置図を作成し、遺構の調査に移る。

7・11 引き続き2次検出面の遺構の調査を行う。

7・12 引き続き2次検出面の遺構の調査を行う。

7・13 2次検出面の遺構完掘状態の写真撮影を行う。

7・14 南壁トレンチの土層セクションの写真撮影と実測を行う。以上で、A区(西側)の発掘調査を終了する。明日から埋め戻し作業を行う。

7・17 7月21日まで西側調査区の重機による埋め戻し作業を行う。



Fig.5 発掘調査風景

8・3 水汲み作業を行う。

8・4 重機による土層掘削を再開する。併行して遺構検出作業も行う。

8・7 引き続き重機による土層掘削と遺構検出作業を行う。

8・8 引き続き重機による土層掘削と遺構検出作業を行う。併行してグリッド杭を設置する。

8・9 引き続き重機による土層掘削と遺構検出作業を行う。

8・10 引き続き重機による土層掘削と遺構検出作業を行う。

8・11 引き続き重機による土層掘削と遺構検出作業を行う。併行して遺構配置図を作成する。

8・14 8月15日まで作業を中止する。

8・17 重機による土層掘削と遺構検出作業を再開する。溝状遺構等を検出する。

8・18 引き続き重機による土層掘削と遺構検出作業を行う。併行して遺構配置図を作成する。

8・21 遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構の調査を開始する。

8・22 遺構の調査を行う。

8・23 引き続き遺構の調査を行う。集石を伴う土坑を確認する。

8・24 引き続き遺構の調査を行う。

8・25 引き続き遺構の調査を行う。

8・28 引き続き遺構の調査を行う。柱穴から石の礎板を検出する。

8・29 引き続き遺構の調査を行う。

8・30 引き続き遺構の調査を行う。底面に板を敷き詰めた円形土坑を確認する。

8・31 引き続き遺構の調査を行う。

9・1 雨天のために作業を中止する。

9・4 引き続き遺構の調査を行う。礎板を設置した柱穴が比較的多く確認される。

9・5 引き続き遺構の調査を行う。

9・6 引き続き遺構の調査を行う。

9・7 引き続き遺構の調査を行う。

9・8 引き続き遺構の調査を行う。

9・11 雨天のために作業を中止する。

9・12 雨天のために作業を中止する。

9・13 雨天のために作業を中止する。

9・14 引き続き遺構の調査を行う。土坑から土師質土器がまとまって出土する。午後は降雨のために作業を中止する。

9・18 引き続き遺構の調査を行う。

9・19 引き続き遺構の調査を行う。

9・20 引き続き遺構の調査を行う。

9・21 引き続き遺構の調査を行う。

9・22 雨天のために作業を中止する。

9・25 水汲み後、遺構の調査に移る。

9・26 引き続き遺構の調査を行う。

9・27 引き続き遺構の調査を行う。

9・28 引き続き遺構の調査を行い、併行して平面測量を開始する。

9・29 引き続き遺構の調査を行う。

10・2 雨天のために作業を中止する。

10・3 引き続き遺構の調査を行う。

10・4 引き続き遺構の調査を行う。

10・5 引き続き遺構の調査を行う。

10・6 引き続き遺構の調査を行う。土坑から鉄器(刀子)が出土する。

10・10 引き続き遺構の調査を行う。礎板を伴う柱穴を調査する。

10・11 引き続き遺構の調査を行う。

10・12 引き続き遺構の調査を行う。

10・13 引き続き遺構の調査を行う。

10・16 引き続き遺構の調査を行う。

10・17 引き続き遺構の調査を行う。

10・18 遺構の精査および調査区の清掃を行う。

10・19 遺構完掘状態の空中測量撮影を産業用ヘリコプターで行う。また、溝状遺構とピット群の写真撮影も行う。

10・20 遺構平面の補足測量を行う。

10・23 引き続き遺構平面の補足測量を行う。

10・24 遺構平面の補足測量を行った後、下層確認トレンチを設定し調査する。



Fig.6 発掘調査見学会1

10・25 下層の調査と平面の補足測量を行う。
10・26 下層の調査と南壁セクションの分層を行う。
10・27 下層の調査と南壁の土層セクションの測量を行う。
10・30 下層の調査と南壁を中心に土層セクションの測量を行う。
10・31 下層の調査を行う。
11・1 雨天のために作業を中止する。
11・2 雨天のために作業を中止する。
11・4 雨天のために作業を中止する。
11・6 下層の調査を行う。
11・7 引き続き下層の調査を行う。
11・8 引き続き下層の調査と土層セクションの測量を行う。

11・9 引き続き下層の調査と土層セクションの測量を行う。

11・10 引き続き下層の調査と土層セクションの測量および写真撮影を行う。



Fig.7 発掘調査見学会2

11・13 残りの調査を行い発掘調査を終了する。

(岩本)

註

- (1) 『光永・岡ノ下遺跡』- 土佐市パイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 平成12年11月

第 章 調査の概要

1. 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査では、中世と近世以降の遺構を検出した。特に、柱穴とみられるピットが多く、56棟の掘立柱建物跡と14列の塀・柵列跡を復元した。これ以外の主だった遺構には36基の土坑、19条の溝跡がある。これらのうち中世^①の遺構は溝跡によって大きく3ブロックに分かれ、それぞれが屋敷跡であったものと推測される。近世以降の遺構は土坑が中心で、廃棄土坑とみられ調査区各所に点在する。概して調査区東部にその密度が高く、時期的には18世紀以降が中心である。

一方、遺物では6世紀末から7世紀初めの須恵器から19世紀の陶磁器類がみられ、その大半は12世紀から15世紀にかけての土師質土器であり、須恵器、瓦、瓦器、瓦質土器、東播系須恵器、貿易陶磁器、備前焼、常滑焼、肥前系陶器などが数パーセント出土している。

(2) 層序

今回の調査区で認められた層序は、基本的に現在の耕作土層とそれに伴う床土、その下層に近世以降の遺物包含層、中世の遺物包含層^②、基盤の自然堆積層の順となっており、遺構は基盤の自然堆積層上面で検出した。

なお、調査区南壁中央部(Fig.8)では下記の土層が認められた。

第 層 灰黄褐色(10YR6/2)粘土質シルト層で黄色砂粒を含む。

第 層 灰褐色(7.5YR6/2)シルト層でマンガン粒・炭を含み、鉄分の沈殿が認められる。

第 層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト層でマンガン粒を含む。

第 層 褐色(10YR4/4)粘土質シルト層

第 層 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト層

第 層 灰黄褐色(10YR5/2)粘土質シルト層

第 層 にぶい黄褐色(10YR6/4)粘土質シルト層

第 層 暗褐色(10YR3/4)シルト砂層

第 層 オリーブ褐色(2.5Y5/3)砂質シルト層

第 層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト砂層

第 層は現在の耕作土で、調査前はビニールハウスになっており、第 層が水田耕作を行っていた際に生じた床土である。第 層が近世以降の遺物包含層、第 層が中世を中心として近世初頭までの遺物を含む層である。第 層中では部分的に分層できる箇所もみられたが、出土遺物の時期幅が大きいことを考慮すれば、人為的擾乱が度々行われたであろうことは十分に考えられることから一つの遺物包含層として捉えた。

第 層から第 層には部分的に炭化物や粘土質シルトの土粒を含む箇所が認められ、人の手が一定加わったことも考えられるが、遺物が全く出土しなかったため今回その時期や性格について

言及することはできず、自然堆積の範疇で捉えた。

第層以下は砂が少なからず含まれることから考えれば、河川の氾濫による堆積と判断される。

(3) 堆積層出土遺物

第層と第層から一定量の遺物が出土しており、その状況から前述のように第層が近世以降、第層が中世の所産と考えられ、さらに第層については2層に分層されるところもあり、下層部分は中世でも比較的古い時期に属するのではないかとみられる。なお、両層とも擾乱が看取されることから下層の遺物が一定量出土している。

また、堆積層から出土した遺物には古代の須恵器が比較的多くみられ、明確な遺構は検出できていないが、第章に記したように平成13年度の野田遺跡第調査地区^⑨の調査において、古代の寺跡とみられる遺構や瓦が検出されており、周辺部にも当該期の遺構の存在が十分考えられる。

第層出土遺物

東播系須恵器 (Fig.9 - 1)

1は片口鉢の口縁部の破片で、口径23.6cmを測る。体部は外上方へのび、口縁部は肥厚され、上端を摘み上げる。口縁部から内面は回転ナデ調整、体部外面にはナデ調整を施す。胎土には細砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で、色調は内外面とも青灰色を呈する。

肥前系陶器 (Fig.9 - 2~4)

唐津焼で、いずれも見込には目痕が残る。2は碗の底部で、約1/2が残存し、底径4.9cmを測る。また、底部は小さな削り出し高台となる。施釉された見込には2カ所に胎土目残り、外面体部下半から底部にかけては露胎となる。釉調は灰黄褐色を呈する。3も碗の底部で、底径4.4cmを測る。底部は削り出し高台で、外面体部下半から底部にかけては露胎となる。それ以外に施釉され、見込に

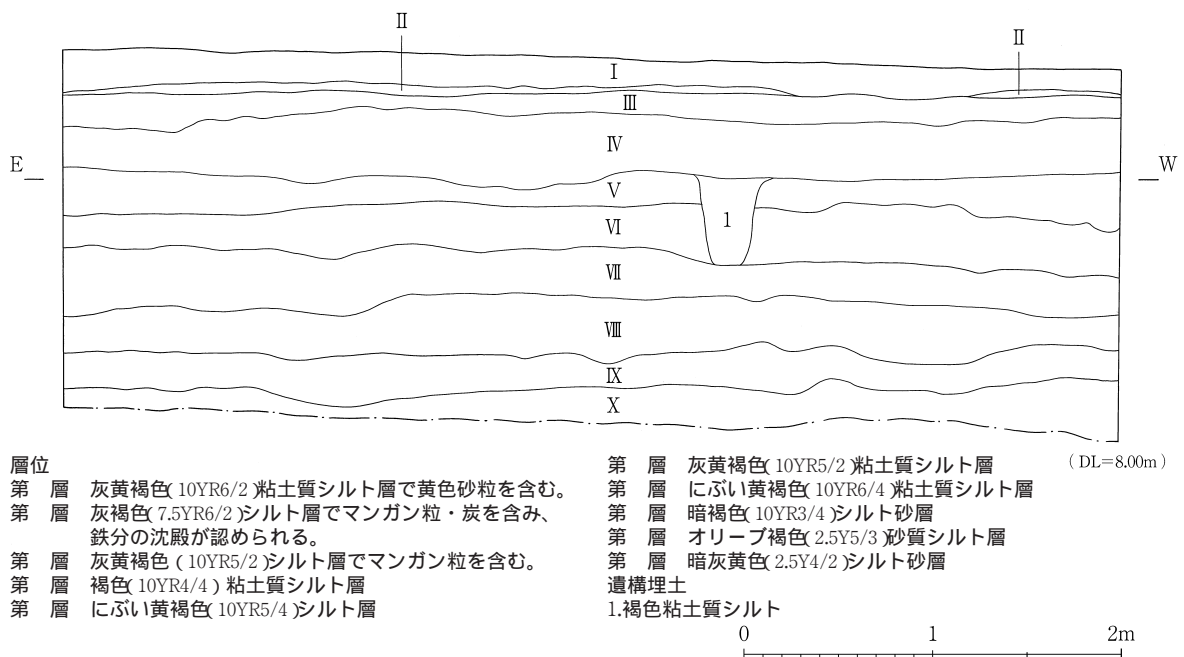


Fig.8 南壁中央部セクション図

は砂止目が4ヵ所に残る。釉調は灰オリーブ色を呈する。4は皿で、約1/3が残存し、口径20.8cm、器高4.0cm、底径9.3cmを測る。底部は比較的高い削り出し高台となる。外面体部下半から底部にかけては鉄釉、体部上半から内面にかけて乳白色の釉を施し、見込には2ヵ所に砂止目が残る。

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.9 - 5・6)

5は碗で、底部から体部の約2/3が残存し、底径5.4cmを測る。底部は削り出し高台となり、体部は内湾して上がる。全面に黄色釉を施釉し、畳付は釉ハギする。また、器面には細かな貫入が見られる。6は輪花皿で、約2/3が残存し、口径10.3cm、器高2.0cm、底径6.1cmを測る。底面の切り離しは回転系切りによる。全面に鉄釉を施し、見込を釉ハギする。釉調は黒褐色を呈する。

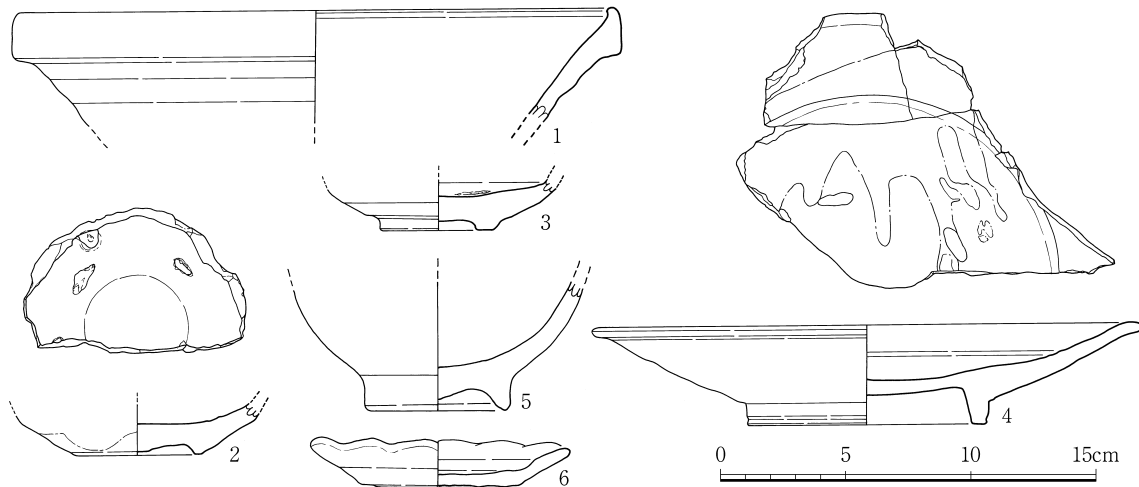


Fig.9 第 層出土遺物実測図 (東播系須恵器・肥前系陶器・瀬戸・美濃系陶器)

第 層出土遺物

須恵器 (Fig.10 - 7~11)

7は杯身で、約1/5が残存し、口径10.0cm、器高3.5cm、受部径12.4cm、立ち上がり高0.9cmを測る。今回の調査では最も古い焼き物である。成形は粘土紐巻き上げ水挽成形で、底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整を施し、他は回転ナデ調整である。胎土には白色砂粒を比較的多く含み、焼成は不良で、色調は内外面とも灰色を呈する。8は高杯の脚台部とみられるもので、底径10.4cmを測る。脚台部は裾部で大きく屈曲し、端部は下方を向く。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は精良で、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。9・10は壺の胴部上半の破片で、9が長頸壺、10が広口壺である。9は胴径15.5cm、頸部径4.6cmを測る。胎土には白色細砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色ないし青灰色を呈する。10は胴径19.6cm、頸部径10.5cmを測る。胴部は途中で大きく屈曲し、明瞭な肩部を作る。器面は回転ナデ調整で、肩部には自然釉が付着する。胎土は精良で白色砂粒を若干含み、焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。11は甕で、中胴部から上約1/3が残り、口径12.7cm、胴径27.0cmを測る。胴部は球形をなし、口頸部は屈曲して短く直立する。口縁端部は外傾する浅い凹面をなす。口縁部は回転ナデ調整で、胴部内面には同心円文のタタキ、外面には平行のタタキの後に回転カキ目調整を施す。胎土には白色砂粒をわずかに含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも淡青灰色を呈する。

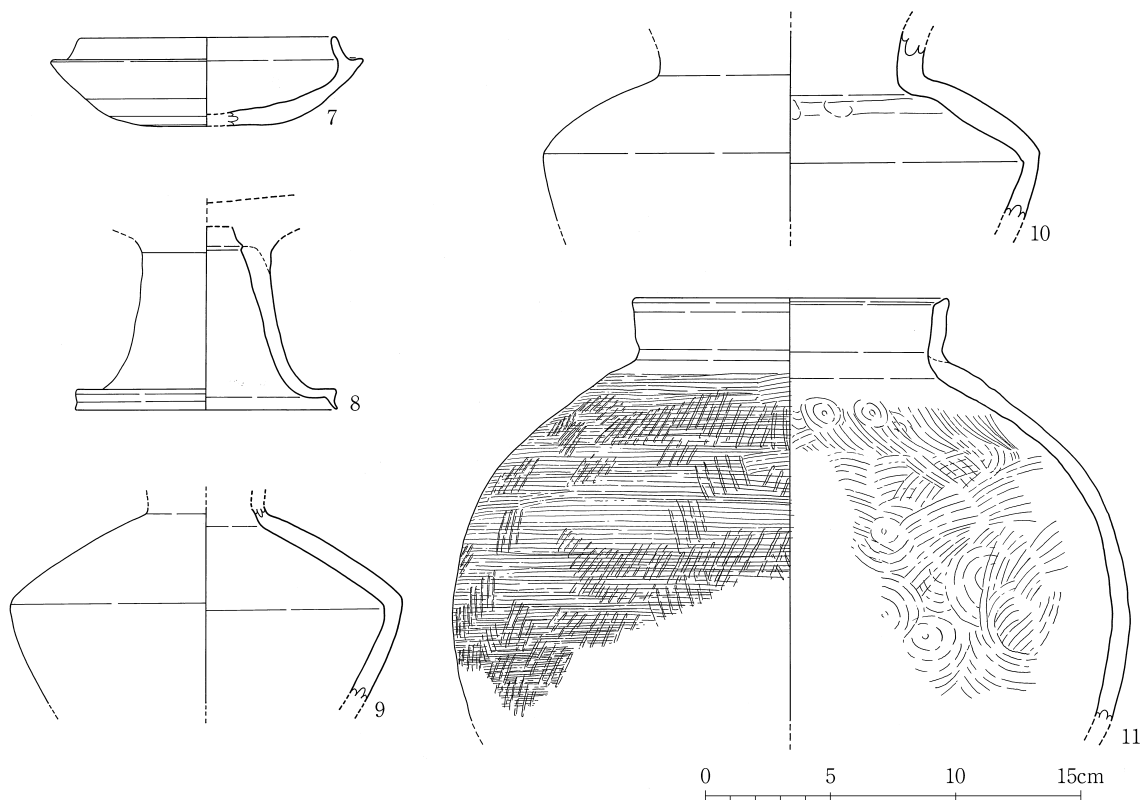


Fig.10 第 層出土遺物実測図(須恵器)

土師質土器 (Fig.11 - 12~41 , Tab.1・2)

土師質土器のうち杯と小皿については、成形技法には粘土紐巻き上げ水挽成形のものと粘土塊からそのまま水挽したものが見られ、本書では前者をA技法、後者をB技法と呼称する。調整は基本的に回転ナデ調整で、内底面にナデ調整を加えた個体もみられる。

12~22は杯で、成形技法は12~16がA技法、17~22がB技法とみられる。底部の切り離しは、摩耗し、不明瞭なもの以外すべて回転糸切りであり、回転ヘラ切りの個体はみられなかった。12は小型で、体部から口縁部にかけて内湾気味に上がる。胎土は精良で、砂粒をわずかに含み、焼成は良いが軟質な感じを受ける個体である。色調は内外面とも橙色を呈する。13は約2/3が残存する。体部と口縁部は境に綾をなし、それぞれ内湾して上がる。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。14~16は器高に差異がみられるものの12と同じ形態をなすものである。いずれも胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良く、色調は内外面ともいぶい橙色ないし橙色を呈する。17~22はいずれも内底面にロクロ目が明瞭に残る個体で、18は内底面にナデ調整を加え、ロクロ目を消している。体部から口縁部の立ち上がり角度がA技法の個体に比べ概して

Tab.1 第IV層出土土師質土器杯法量表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
12	10.0	2.8	4.8
13	12.0	3.8	6.3
14	12.2	4.5	6.0
15	12.5	4.6	5.8
16	12.6	4.5	6.0
17	12.1	4.0	6.4
18	12.0	4.6	7.2
19	12.0	4.8	6.8
20	12.0	4.2	7.4
21	11.8	4.2	7.0
22	12.6	4.0	7.6

きつい。底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土はいずれも砂粒を比較的多く含み、焼成は良く、色調は浅黄橙色からにぶい黄橙色を呈する。

23～37は小皿で、成形技法は23～27がA技法、28～37がB技法とみられる。底部の切り離しはすべて回転糸切りで、後に板状工具による圧痕を加えたもの(23・24・29・35)と八ヶ調整を加えたもの(33)がある。焼成では軟質な感じを受けるもの(23・24・34)と器壁が火膨れ状態になるほど高温で焼成されたもの(33)に代表されるように極めて良好なもの(27・28・32・33・36)がみられ、後者については煙管窯等の還元炎焼成の所産ではないかと考えられる。また、1点であるが37のような高台を有する個体もある。23～26は器高に比べ底径が比較的大きい扁平な個体で、内底面には粘土紐の痕跡が残る。23・24は胎土が精良で砂粒をわずかに含むのに対し、25・26は砂粒を比較的多く含む。27は内湾する口縁部を有するもので、内底面にはナデ調整を加える。胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良好で、色調は内外面ともににぶい黄橙色であるが、断面は灰色を呈する。28～31は口縁部が極めて短く、端部が細いもので、32～34には口縁部の立ち上がりが一定みられる。これらは概して調整が丁寧とみられ、内底面にはロクロ目は残っていない。また、29・33の内底面にはナデ調整が加えられる。いずれも胎土は精良で、わずかに砂粒を含む。35・36は内底面にロクロ目が残るものである。いずれも胎土には砂粒を比較的多く含む。37は高さ1.7cmの高台を有するもので、外底面以外には回転ナデ調整が施される。胎土は精良で、器壁が薄い。

Tab.2 第IV層出土土師質土器小皿流量表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
23	7.7	1.4	5.1
24	8.0	1.0	4.8
25	8.0	1.4	5.6
26	8.0	1.8	5.2
27	6.9	1.6	5.0
28	6.0	1.0	4.4
29	6.6	1.5	4.8
30	6.4	1.5	5.5
31	6.8	1.5	4.8
32	7.1	2.0	5.7
33	6.2	2.0	4.7
34	6.6	2.0	5.4
35	6.8	1.8	4.7
36	6.6	2.2	4.7
37	8.0	4.0	5.0

38～40は羽釜で、いずれも上胴部から口縁部の破片である。38は口径15.0cmを測り、口縁部外面には断面三角形の鏝が巡る。鏝から内面にかけてヨコナデ調整、胴部外面には平行のタタキを施す。また、鏝下半以下には煤が付着する。39は口径17.2cmを測り、口縁部はほぼ直立する胴部から短く内傾する。口縁部外面には断面三角形の鏝が巡り、下端以下に煤が付着する。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整で部分的に細かな八ヶ目が残る。胴部外面には平行のタタキを施す。40は胴部から内傾する口縁部が残るもので、外面には断面三角形の鏝が巡る。口縁部にはヨコナデ調整、内面にはナデ調整を施し、胴部外面には平行のタタキ目が残る。

41は鍋の口縁部破片で、口径31.4cmを測る。口縁部は胴部から屈曲し、内湾してほぼ直立する。口縁端部は受部状をなす。外面にはナデ調整、内面にはヨコナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

瓦器 (Fig.12 - 42～45)

すべて和泉型の椀で、口縁部にはヨコナデ調整を施し、体部外面には指押えの痕が残り、底部には小さな高台が付く。42は約1/2が残存し、口径15.4cm、器高4.8cm、底径3.6cmを測り、内面には平

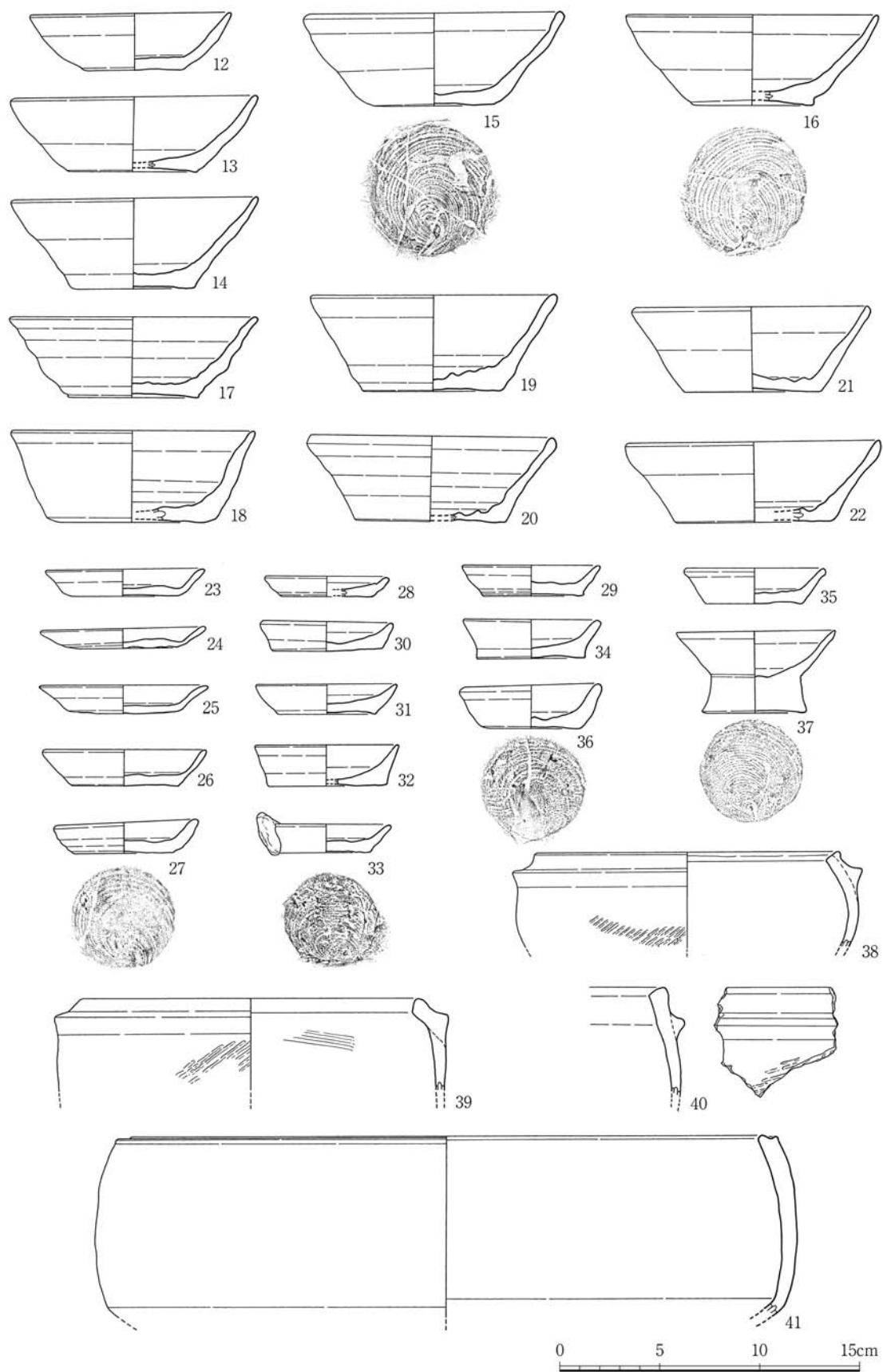


Fig.11 第 層出土遺物実測図(土師質土器)

行線状と連結輪状のヘラ磨きが施される。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも暗灰色を呈する。43は約2/3が残存し、口径15.2cm、器高3.9cm、底径3.7cmを測り、内面には平行線状と連結輪状のヘラ磨きが施される。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は不良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。44は底部1/2と体部から口縁部の一部が残存するもので、口径13.6cm、器高3.9cm、底径3.4cmを測る。内面は摩耗が著しくヘラ磨きの有無は不明である。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は不良で、色調は、内面が灰色と褐色、外面が灰色と橙色、断面がにぶい黄橙色を呈し、炭素の吸着が悪い。45

は約1/5が残存し、口径14.0cm、器高4.3cm、底径3.0cmを測る。内面には部分的にヘラ磨きがみられる。胎土には細砂粒を比較的多く含み、焼成は不良で、内外面とも橙色ないし浅黄色を呈し、炭素の吸着が全くみられない。

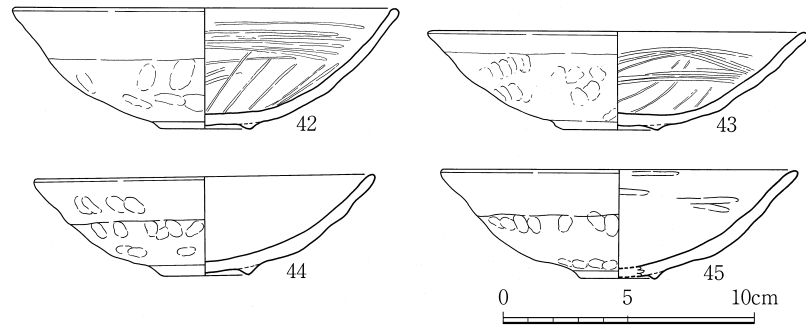


Fig.12 第 層出土遺物実測図(瓦器)

東播系須恵器 (Fig.13 - 46・47)

いずれも片口鉢で、46は約1/2が残存し、口径24.0cm、器高7.9cm、底径9.0cmを測り、1カ所に注口が残る。底部は回転系切りで、体部は斜め上方に上がり、口縁部を上下に肥厚する。口縁部と外面には回転ナデ調整、内面にはナデ調整を施す。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。47は体部から口縁部の一部が残存し、口径23.6cmを測る。体部は斜め外方に上がり、口縁部を上下に肥厚し、器面には回転ナデ調整を施す。胎土には細砂粒を多く含み、焼成は不良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

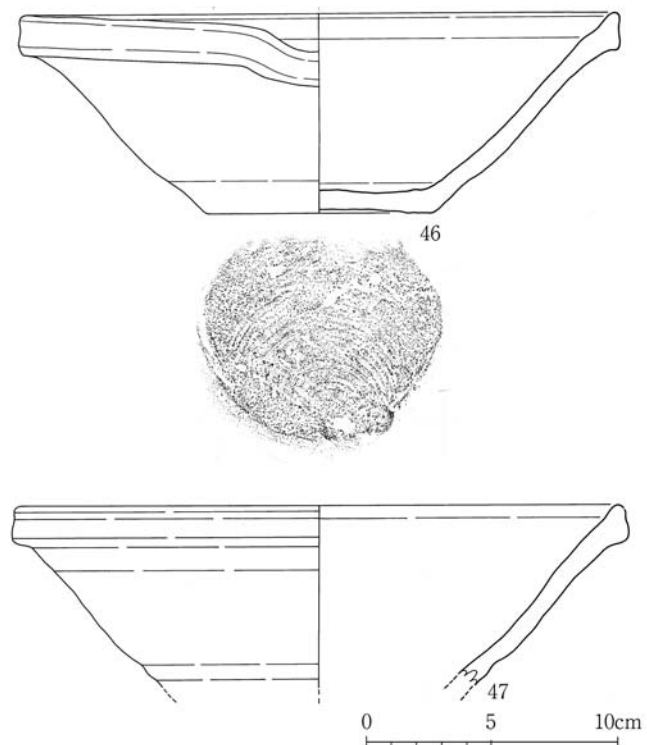


Fig.13 第 層出土遺物実測図(東播系須恵器)

瓦質土器 (Fig.14 - 48~50)

48は播鉢の口縁部の破片で、注口の部分が残る。内面には5本の条線がみられる。口縁部にはヨコナデ調整、他はナデ調整を施す。胎土は精良で、焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色ないし灰色を呈する。49は三足鍋の足で、残存

長16.2cm,厚さ2.5cmを測る。表面はヘラナデ調整の後にナデ調整を加える。50は鍋の口縁部で,口径27.0cmを測る。口縁部は胴部から屈曲し,短く内湾して上がり,端部は水平な平面をなす。口縁部はヨコナデ調整,内面はヨコ方向のハケ調整,外面は未調整で指頭圧痕が残る。胎土には砂粒を比較的多く含み,焼成は良好で,色調は内外面とも灰色ないし暗灰色を呈する。

備前焼 (Fig.14 - 51~53)

いずれも擂鉢で,51は体部から口縁部の一部が残り,口径20.0cmを測る。口縁部は上下に肥厚し,内面には8条単位の条線が部分的に残る。胎土には細砂粒を多く含み,焼成は良好で,色調は内外面とも灰赤色ないし赤褐色を呈する。52は注口を含む口縁部の一部が残存する。口縁部は短く内上方にのび,器面には回転ナデ調整を施す。胎土は精良で,砂粒をほとんど含まず,焼成は良好で,色調は内外面とも灰色ないし

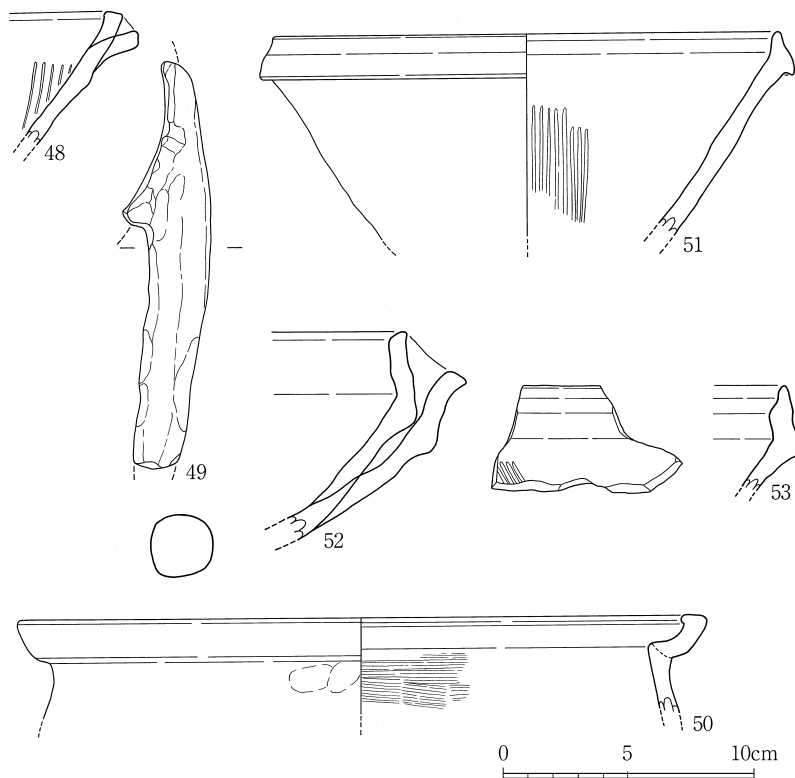


Fig.14 第 層出土遺物実測図(瓦質土器・備前焼)

にぶい褐色を呈する。53も口縁部の破片で,内傾する口縁部は若干肥厚される。内面には条線が一部に残る。胎土は精良で,焼成は良く,色調は内外面とも灰色を呈する。

青磁 (Fig.15 - 54~56)

いずれも龍泉窯系の青磁とみられるものである。54は碗で,削り出し高台の底部が残存し,底径4.3cmを測る。見込には型押し草花文が施され,全面に薄く青磁釉が施され,高台内は釉ハギが行われる。胎土は精良で,黒色粒をわずかに含み,焼成は良好である。55・56は皿で,55は外反する口縁部の一部が残存し,口径12.8cmを測る。器面には厚さ0.5mmの青磁釉を施す。胎土は精良で,焼成は良好である。56は体部から口縁部の一部が残存するもので,口径20.0cmを測る。口縁部は内湾する体部から外傾し,口縁端部は水平を向く。器面には厚さ約0.2mmの青磁釉を施す。胎土には黒色粒を比較的多く含み,焼成は良好である。

肥前系陶器 (Fig.15 - 57)

57は皿で,約1/3が残存し,口径10.4cm,器高3.3cm,底径3.4cmを測る。底部は削り出し高台で,体部から口縁部は内湾して上がり,端部を細く仕上げる。見込には2カ所に胎土目が残る。口縁部から内面にかけてオリーブ灰色の釉を施し,外面体部以下は露胎となる。胎土は精良で,焼成は良好

である。

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.15 - 58)

58は菊皿で、約1/3が残存し、口径11.9cm、器高2.0cm、底径5.8cmを測る。見込には掘り込みの花弁が施され、器面にはにぶい黄色の釉を施すが、ハダ荒れが著しい。胎土は精良で、焼成はやや不良である。

土製品 (Fig.15 - 59・60)

いずれも土錘で、紡錘形を呈する。59は長さ4.0cm、全幅1.2cm、孔径0.5cm、60は残存長3.3cm、全幅1.5cm、孔径0.5cmを測る。

石製品 (Fig.15 - 61・62)

61は滑石製の紡錘車で、約1/2が残存し、径3.9cm、全厚0.7cm、孔径0.6cmを測る。上下両面は剥離し、側面にのみ研磨痕が残る。62は両刃の磨製石斧で、刃部が残存し、残存長9.5cm、全幅8.1cm、全厚3.3cmを測る。全面に研磨痕が残る。石材は粘板岩である。

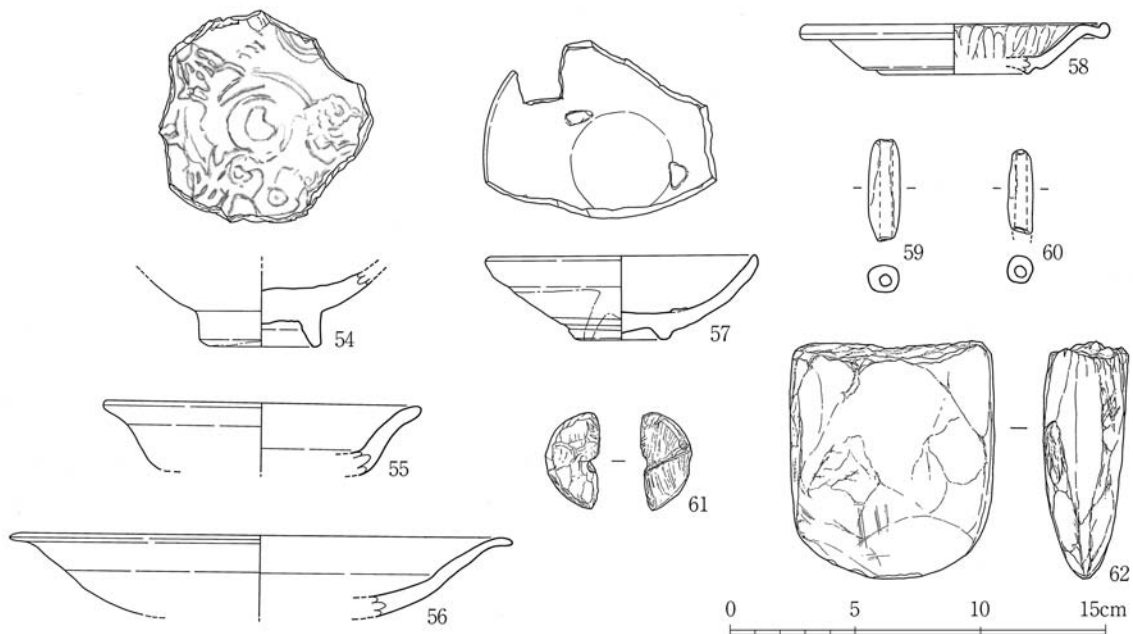


Fig.15 第 層出土遺物実測図(青磁・肥前系陶器・土製品ほか)

2. 遺構と遺物

(1) 中世

検出された遺構は屋敷を構成したものとみられ、溝によって大きく西・北東・南東の3ブロックに分けることができる。特に、後述する掘立柱建物跡や塀・柵列跡にその状況が如実に現れている。

掘立柱建物跡

今回の調査区では総数54棟の掘立柱建物跡を復元した。このうちの53棟は大きく3ブロックに分かれており、それぞれが屋敷を構成していたものとみられ、棟方向は屋敷を区画するとみられる溝(SD-2・9など)に沿うものとなっている。内訳は、西ブロックが14棟(SB-1~14)、北東ブロックが

18棟(SB - 15 ~ 32), 南東ブロックが21棟(SB - 33 ~ 53)で, 特に, 南東部のブロックでは切り合いが著しく, 何度も建て替えが行われたものとみられ, かつ建物を復元できなかった多くの柱穴がまだ残っており, 実際はさらに多くの建物が存在したものと考えられる。また, 東部の南北二つのブロックはそれぞれ屋敷の半分以上が調査区外にあり, 実数は倍になることも予想される。

なお, 建物を構成する柱穴の埋土は第 層の褐色粘土質シルトを主体とし, 検出面となっている第 層のにびい黄褐色シルトのブロックや土粒を含むものであった。

SB - 1 (Fig.16)

西ブロックの南西側で確認した梁間2間(3.70~3.80m), 桁行3間(5.70m)の身舎に北庇付きの東西3間(5.70m), 南北3間(4.70~4.80m)の東西棟建物で, 身舎西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB - 2と重なっている。棟方向はN - 81° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.40~2.20m, 桁行(東西)が1.80~2.10mで, 北庇幅が1.05mである。柱穴は径30~40cmの円形で, 柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片9点, 瓦器片1点, 瓦質土器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

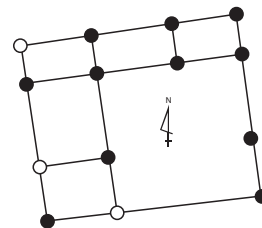


Fig.16 SB - 1

SB - 2 (Fig.17)

西ブロックの南西側で確認した梁間2間(4.60m), 桁行3間(5.40m)の身舎に西庇付きの東西3間(5.80m), 南北3間(5.40m)の南北棟建物で, 身舎北から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB - 1と重なっている。棟方向はN - 3° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が2.10mと2.50m, 桁行(東西)が1.80mで, 西庇幅が1.20mである。柱穴は径30~72cmの円形で, 柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片44点, 瓦器片3点, 常滑焼片1点, 青磁片1点, 石製品1点がみられ, 石製品1点(63)が図示できた。

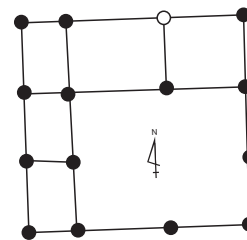


Fig.17 SB - 2

出土遺物

石製品 (Fig.70 - 63)

63は砥石で, 上下面と側面の3カ所に使用痕が残る。石材は粗粒砂岩である。

SB - 3 (Fig.18)

西ブロックの南西側で確認した梁間2間(3.20~3.30m), 桁行2間(4.00~4.20m)の東西棟建物である。SB - 6と重なっている。棟方向はN - 75° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50~1.70m, 桁行(東西)が2.00~2.10mである。柱穴は径30~50cmの円形で, 柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片4点, 瓦器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

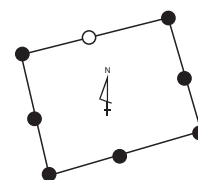


Fig.18 SB - 3

SB - 4 (Fig.19)

西ブロックの中央で確認した梁間2間(3.80~4.00m), 桁行3間(5.25~5.30m)の東西棟建物で, 身舎

西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN - 78° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.80 ~ 2.10m, 桁行(東西)が1.70mと1.80mである。柱穴は径20 ~ 30cmの円形で, 柱径は約15cmとみられる。出土遺物は須恵器片1点のみで, 復元図示できなかった。

SB - 5 (Fig.20)

西ブロックの中央で確認した梁間4間(6.20m), 桁行4間(7.30m)の南北棟建物で, 身舎真中の柱通りに間仕切柱2本が立つ。棟方向はN - 13° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.80 ~ 2.30m, 桁行(南北)が1.40 ~ 1.80mである。柱穴は径20 ~ 50cmの円形で, 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には須恵器片2点, 土師質土器片26点, 瓦質土器片3点, 釘片2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SB - 6 (Fig.21)

西ブロックの南東寄りで確認した梁間2間(4.20 ~ 4.40m), 桁行4間(7.60 ~ 7.70m)の身舎に西庇付きの東西5間(8.70 ~ 8.80m), 南北2間(4.20 ~ 4.40m)の南北棟建物で, 身舎真中の柱通りに間仕切柱が立つ。SB - 3・7 ~ 9と重なっている。棟方向はN - 86° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.80 ~ 2.20m, 桁行(東西)が1.65 ~ 2.05mで, 西庇幅が1.00mである。柱穴は径30 ~ 70cmの円形で, 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片43点, 瓦器片9点, 東播系須恵器片1点, 白磁片1点, 青磁片3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SB - 7 (Fig.22)

西ブロックの南東寄りで確認した梁間2間(3.80m), 桁行3間(5.60m)の東西棟建物である。SB - 6・8・9と重なっている。棟方向はN - 84° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.80mと2.00m, 桁行(東西)が1.80mと1.90mである。柱穴は径30 ~ 45cmの円形で, 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片16点, 瓦器片2点, 釘片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SB - 8 (Fig.23)

西ブロックの南東寄りで確認した梁間2間(3.60 ~ 3.80m), 桁行2間(4.20m)の南北棟建物である。SB - 6・7・9と重なっている。棟方向はN - 9° - Wである。柱間寸法は梁間(東西)が1.65mと2.05m, 桁行(南北)が2.00mと2.10mである。柱穴は径20 ~ 30cmの円形で, 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片11点, 瓦器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

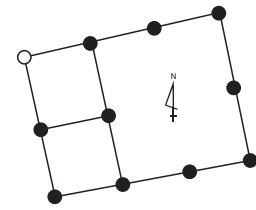


Fig.19 SB - 4

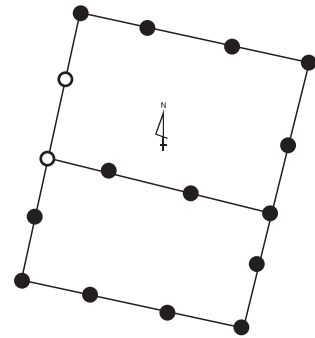


Fig.20 SB - 5

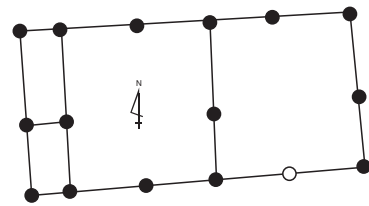


Fig.21 SB - 6

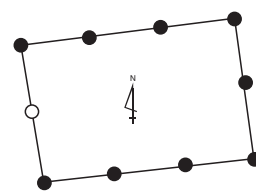


Fig.22 SB - 7

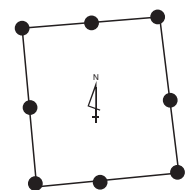


Fig.23 SB - 8

SB - 9 (Fig.24)

西ブロックの南東寄りで確認した梁間2間(3.80m) , 桁行2間(4.20m)の南北棟建物である。SB - 6 ~ 8と重なっている。棟方向はN - 1° - Wである。柱間寸法は梁間(東西)が1.80 ~ 2.00m , 桁行(南北)が2.00 ~ 2.20mである。柱穴は径30 ~ 55cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片11点 , 瓦器片2点がみられ , 土師質土器1点(64)が図示できた。

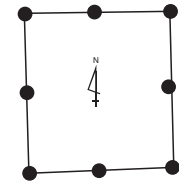


Fig.24 SB - 9

出土遺物

土師質土器 (Fig.70 - 64)

64は小皿で完存し , 口径7.8cm , 器高2.2cm , 底径5.4cmを測る。成形はA技法である。口縁部は外上方を向き , 端部は丸い。器面は摩耗し調整は不明であるが , 底部の切り離しは回転系切りである。胎土には細砂粒を多く含み , 焼成はやや不良で , 色調は内外面とも橙色ないし黄橙色を呈する。

SB - 10 (Fig.25)

西ブロックの南東側で確認した梁間2間(4.20 ~ 4.30m) , 桁行3間(4.80m)の東西棟建物で , 身舎西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB - 11と重なっている。棟方向はN - 89° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.80 ~ 2.40m , 桁行(東西)が1.80 ~ 2.00mである。柱穴は径20 ~ 45cmの円形で , 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片12点 , 瓦器片2点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

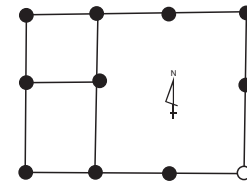


Fig.25 SB - 10

SB - 11 (Fig.26)

西ブロックの南東側で確認した梁間2間(3.70m) , 桁行2間(3.90m)の南北棟建物である。SB - 10と重なっている。棟方向はN - 3° - Wである。柱間寸法は梁間(東西)が1.80mと1.90m , 桁行(南北)が1.90mと2.00mである。柱穴は径20 ~ 30cmの円形で , 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点 , 土師質土器片5点 , 瓦器片3点がみられ , 瓦器1点(65)が図示できた。

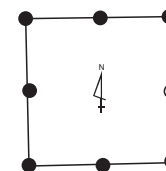


Fig.26 SB - 11

出土遺物

瓦器 (Fig.70 - 65)

65は和泉型の椀で , 約1/3が残存し , 口径16.0cm , 器高4.5cm , 底径4.0cmを測る。口縁部は体部から内湾して上がり , 端部は丸い。底部外面には断面三角形の高台が付く。口縁部から内面はヨコナデ調整で , 内面には平行線状と連結輪状のヘラ磨きを施す。体部外面には指押えの痕が残る。胎土には砂粒を比較的多く含み , 焼成はやや不良で , 色調は内外面とも灰色ないし灰黄色を呈し , 炭素の吸着が十分でない部分がみられる。

SB - 12 (Fig.27)

西ブロックの北側で確認した梁間2間(3.50m) , 桁行3間(4.70m)の東西棟建物で , 身舎東から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SA - 8・9が付随するものとみられる。棟方向はN - 89° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50mと2.00m , 桁行(東西)が1.50 ~ 1.70mである。柱穴は径20 ~ 40cmの円

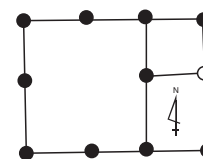


Fig.27 SB - 12

形で、柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できなかった。

SB - 13 (Fig.28)

西ブロックの北東側で確認した梁間2間(3.90 ~ 4.20m) , 桁行2間(4.40m) の総柱南北棟建物である。棟方向はN - 12 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西) が2.00 ~ 2.10m , 桁行(南北) が2.10 ~ 2.30mである。柱穴は径30 ~ 55cmの円形で、柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できなかった。

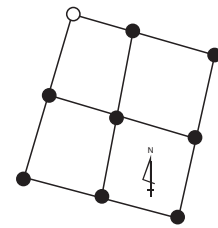


Fig.28 SB - 13

SB - 14 (Fig.29)

西ブロックの南東側で確認した梁間2間(3.50m) , 桁行2間(3.60m) の東西棟建物である。棟方向はN - 88 ° - Eである。柱間寸法は梁間(南北) が1.40 ~ 2.10m , 桁行(東西) が1.60 ~ 2.00mである。柱穴は径30 ~ 70cmの円形で、柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片24点、瓦器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

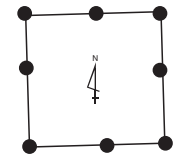


Fig.29 SB - 14

SB - 15 (Fig.30)

北東ブロックの東端で確認した梁間2間(4.00 ~ 4.20m) , 桁行3間(5.20 ~ 5.40m) の南北棟建物で、身舎南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN - 22 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西) が1.60 ~ 2.40m , 桁行(南北) が1.80 ~ 2.10mである。柱穴は径20 ~ 50cmの円形で、柱径は15 ~ 20cmと

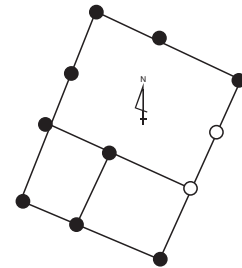


Fig.30 SB - 15

Tab.3 西ブロック掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m ²)	棟方向 (NはGN)	備 考	
	梁間 × 桁行	梁間(m) × 桁行(m)		柱間寸法				
		梁間(m)	桁行(m)	梁間(m)				桁行(m)
SB-1	3×3	4.70 ~ 4.80	× 5.70	1.40 ~ 2.20	1.80 ~ 2.10	27.08	N - 81° - E	北庇・間仕切柱
SB-2	3×3	5.80	× 5.40	2.10 · 2.50	1.80	31.32	N - 3° - W	西庇・間仕切柱
SB-3	2×2	3.20 ~ 3.30	× 4.00 ~ 4.20	1.50 ~ 1.70	2.00 ~ 2.10	13.33	N - 75° - E	
SB-4	2×3	3.80 ~ 4.00	× 5.25 ~ 5.30	1.80 ~ 2.10	1.70 · 1.80	20.57	N - 78° - E	間仕切柱
SB-5	4×4	6.20	× 7.30	1.80 ~ 2.30	1.40 ~ 1.80	45.26	N - 13° - E	間仕切柱
SB-6	2×5	4.20 ~ 4.40	× 8.70 ~ 8.80	1.80 ~ 2.20	1.65 ~ 2.05	37.63	N - 86° - E	西庇・間仕切柱
SB-7	2×3	3.80	× 5.60	1.80 · 2.00	1.80 · 1.90	21.28	N - 84° - E	
SB-8	2×2	3.60 ~ 3.80	× 4.20	1.65 · 2.05	2.00 · 2.10	15.54	N - 9° - W	
SB-9	2×2	3.80	× 4.20	1.80 ~ 2.00	2.00 ~ 2.20	15.96	N - 1° - W	
SB-10	2×3	4.20 ~ 4.30	× 4.80	1.80 ~ 2.40	1.80 ~ 2.00	20.40	N - 89° - E	間仕切柱
SB-11	2×2	3.70	× 3.90	1.80 · 1.90	1.90 · 2.00	14.43	N - 3° - W	
SB-12	2×3	3.50	× 4.70	1.50 · 2.00	1.50 ~ 1.70	16.45	N - 89° - E	間仕切柱
SB-13	2×2	3.90 ~ 4.20	× 4.40	2.00 ~ 2.10	2.10 ~ 2.30	17.82	N - 12° - E	総柱
SB-14	2×2	3.50	× 3.60	1.40 ~ 2.10	1.60 ~ 2.00	12.60	N - 88° - E	

みられる。出土遺物は皆無であった。

SB - 16 (Fig.31)

北東ブロックの西側で確認した梁間2間(3.30m) , 桁行3間(5.00m)の南北棟建物で , 身舎南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN - 4 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.30 ~ 2.00m , 桁行(南北)が1.50 ~ 2.00mである。柱穴は径20 ~ 40cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器2点 , 瓦器片1点がみられ , 土師質土器1点(66)が図示できた。

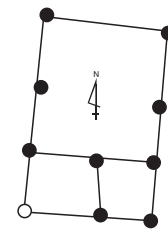


Fig.31 SB - 16

出土遺物

土師質土器 (Fig.70 - 66)

66は小皿で , 約1/3が残存し , 口径6.8cm , 器高1.6cm , 底径4.9cmを測る。成形はB技法で , 口縁部は短く外上方へのびる。器面は摩耗が著しく調整は不明である。胎土は精良で , 焼成は良いが軟質な感じを受ける。

SB - 17 (Fig.32)

北東ブロックの北西側で確認した梁間2間(3.20m) , 桁行2間(4.00m)の東西棟建物である。棟方向はN - 87 ° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.40mと1.80m , 桁行(東西)が1.80mと2.20mである。柱穴は径30 ~ 80cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片5点 , 瓦器片1点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

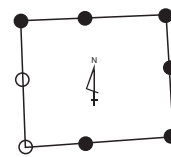


Fig.32 SB - 17

SB - 18 (Fig.33)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.40 ~ 3.60m) , 桁行3間(6.00m)の総柱南北棟建物で , SB - 19 ~ 21と重なっている。棟方向はN - 1 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.60 ~ 2.00m , 桁行(南北)が1.80 ~ 2.10mである。柱穴は径20 ~ 45cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片12点 , 瓦器片2点 , 東播系須恵器片1点がみられたが , 復元図示できなかった。

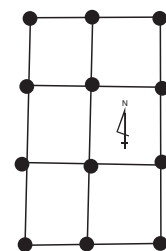


Fig.33 SB - 18

SB - 19 (Fig.34)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.70 ~ 3.90m) , 桁行3間(6.00 ~ 6.20m)の総柱南北棟建物で , SB - 18 ・ 20 ・ 21と重なっている。棟方向はN - 2 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.80 ~ 2.00m , 桁行(南北)が1.80 ~ 2.10mである。柱穴は径20 ~ 50cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には須恵器片2点 , 土師質土器片9点 , 瓦器片2点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

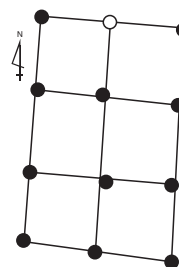


Fig.34 SB - 19

SB - 20 (Fig.35)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.90 ~ 4.00m) , 桁行2間(4.80 ~ 4.90m)の総柱南北棟建物で , SB - 18 ・ 19 ・ 21と重なっている。棟方向はN - 5 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.90 ~ 2.00m , 桁行(南北)が2.30 ~ 2.60mである。柱穴は径20 ~ 70cmの円形で , 柱径は

15～20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片15点,瓦器片2点,鉄滓片1点のみみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 21 (Fig.36)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(4.00m),桁行2間(4.60m)の総柱東西棟建物で,SB - 18～20と重なっている。棟方向はN - 87° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が2.00m等間隔,桁行(東西)が2.30m等間隔である。柱穴は径30～50cmの円形で,柱径は15～20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片13点,瓦器片1点,同安窯系青磁片1点のみみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 22 (Fig.37)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.40m),桁行4間(7.40m)の南北棟建物で,身舎南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB - 23～26と重なり,棟方向はN - 1° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.50mと1.90m,桁行(南北)が1.60～2.20mである。柱穴は径25～60cmの円形で,柱径は15～20cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点,土師質土器片42点,瓦器片6点,青磁片1点のみみられ,土師質土器1点(67)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.70 - 67)

67は杯で,底部と体部の一部が残り,底径6.4cmを測る。成形はB技法で,内面には細かな口目目が残る。底部の切り離しは回転系切りである。胎土は精良で,焼成は不良で,色調は内外面とも橙色を呈する。

SB - 23 (Fig.38)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.80m),桁行2間(4.20m)の総柱南北棟建物で,SB - 22・24・25と重なっている。棟方向はN - 1° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.70mと2.10m,桁行(南北)が1.70mと2.50mである。柱穴は径25～40cmの円形で,柱径は15～20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片31点のみみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 24 (Fig.39)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.60m),桁行2間(3.80m)の総柱東西棟建物で,SB - 22・23・25・26と重なっている。棟方向はN - 88° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50mと2.10m,桁行(東西)が1.70～2.10mである。柱穴は径20～50cmの円形で,柱径は15～20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片58点のみみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 25 (Fig.40)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.10m),桁行3間(4.30m)の南北棟建物で,SB - 22～24・27と重なっている。棟方向はほぼ方眼北を向く。柱間寸法

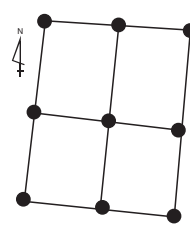


Fig.35 SB - 20

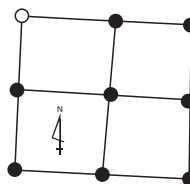


Fig.36 SB - 21

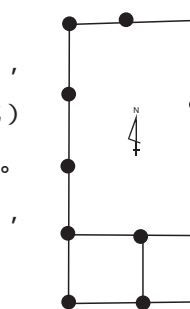


Fig.37 SB - 22

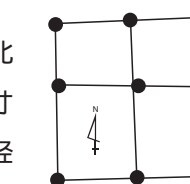


Fig.38 SB - 23

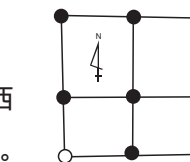


Fig.39 SB - 24

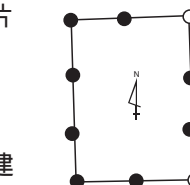


Fig.40 SB - 25

は梁間(東西)が1.40~1.70m,桁行(南北)が1.30mと1.50mである。柱穴は径20~40cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点,土師質土器片37点,常滑焼片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 26 (Fig.41)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.30m),桁行2間(4.30m)の総柱東西棟建物で,SB - 22・24・27・28と重なっている。棟方向はN - 88° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50mと1.80m,桁行(東西)が2.00mと2.30mである。柱穴は径25~45cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片23点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

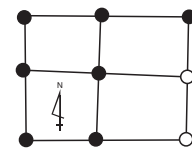


Fig.41 SB - 26

SB - 27 (Fig.42)

北東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.30m),桁行3間(6.00m)の南北棟建物で,SB - 25・26・28・29と重なっている。棟方向はN - 4° - Wである。柱間寸法は梁間(東西)が1.40~1.90m,桁行(南北)が1.60~2.60mである。柱穴は径20~50cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片49点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

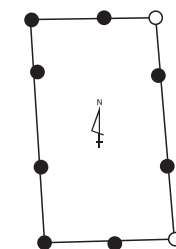


Fig.42 SB - 27

SB - 28 (Fig.43)

北東ブロックの東側で確認した梁間2間(4.00m),桁行4間(7.20~7.50m)の南北棟建物で,身舎真中の柱通りに間仕切柱が立ち,SB - 26・27・29・30・32と重なっている。棟方向はN - 7° - Wである。柱間寸法は梁間(東西)が1.90mと2.10m,桁行(南北)が1.60~2.10mである。柱穴は他の建物に比べ大きく径50~100cmの円形で,柱径は25~30cmとみられる。出土遺物には土師質土器片110点,瓦器片8点,青磁片2点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

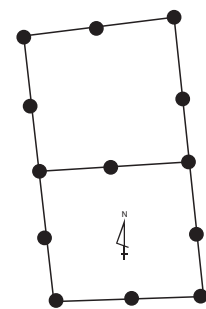


Fig.43 SB - 28

SB - 29 (Fig.44)

北東ブロックの東側で確認した梁間2間(4.10m),桁行3間(5.60m)の総柱南北棟建物で,SB - 27・28・30・31と重なっている。棟方向はN - 9° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.90~2.20m,桁行(南北)が1.70~1.90mである。柱穴は径20~60cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片16点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

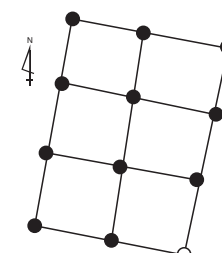


Fig.44 SB - 29

SB - 30 (Fig.45)

北東ブロックの東側で確認した梁間2間(3.40m),桁行3間(5.10m)の総柱南北棟建物で,SB - 28・29と重なっている。棟方向はN - 3° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.60~1.80m,桁行(南北)が1.60~1.80mである。柱穴は径40~70cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片28点,瓦器片2点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

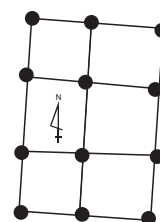


Fig.45 SB - 30

SB - 31 (Fig.46)

北東ブロックの北東側で確認した梁間2間(3.10m) , 桁行2間(3.40 ~ 3.60m)の総柱南北棟建物で , SB - 29・32と重なっている。棟方向はN - 3° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.50mと1.60m , 桁行(南北)が1.50 ~ 2.00mである。柱穴は径20 ~ 40cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物は皆無であった。

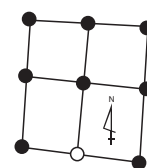


Fig.46 SB - 31

SB - 32 (Fig.47)

北東ブロックの北東側で確認した梁間2間以上(1.90m以上) , 桁行3間(5.20m)の総柱東西棟建物で , SB - 28・31と重なっている。棟方向はN - 88° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.90m , 桁行(東西)が1.60 ~ 1.90mである。柱穴は径30 ~ 60cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片23点 , 瓦器片1点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

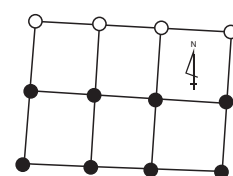


Fig.47 SB - 32

SB - 33 (Fig.48)

南東ブロックの西側で確認した梁間2間(3.60m) , 桁行3間(5.60m)の南北棟建物で , 身舎南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。SB - 34と重なり , 棟方向はN - 5° - Eである。柱間寸法は梁間(東

Tab.4 北東ブロック掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m ²)	棟方向 (NはGN)	備 考
	梁間 × 桁行	梁間(m) × 桁行(m)	柱間寸法				
			梁間(m)	桁行(m)			
SB-15	2×3	4.00~4.20×5.20~5.40	1.60~2.40	1.80~2.10	21.73	N- 22° - E	間仕切柱
SB-16	2×3	3.30 × 5.00	1.30~2.00	1.50~2.00	16.50	N- 4° - E	間仕切柱
SB-17	2×2	3.20 × 4.00	1.40・1.80	1.80・2.20	12.80	N- 87° - E	
SB-18	2×3	3.40~3.60× 6.00	1.60~2.00	1.80~2.10	21.00	N- 1° - E	総柱
SB-19	2×3	3.70~3.90×6.00~6.20	1.80~2.00	1.80~2.10	23.18	N- 2° - E	総柱
SB-20	2×2	3.90~4.00×4.80~4.90	1.90~2.00	2.30~2.60	19.16	N- 5° - E	総柱
SB-21	2×2	4.00 × 4.60	2.00	2.30	18.40	N- 87° - W	総柱
SB-22	2×4	3.40 × 7.40	1.50・1.90	1.60~2.20	25.16	N- 1° - E	間仕切柱
SB-23	2×2	3.80 × 4.20	1.70・2.10	1.70・2.50	15.96	N- 1° - E	総柱
SB-24	2×2	3.60 × 3.80	1.50・2.10	1.70~2.20	13.68	N- 88° - W	総柱
SB-25	2×3	3.10 × 4.30	1.40~1.70	1.30・1.50	13.33	N- 0° - E	
SB-26	2×2	3.30 × 4.30	1.50・1.80	2.00・2.30	14.19	N- 88° - W	総柱
SB-27	2×3	3.30 × 6.00	1.40~1.90	1.60~2.60	19.80	N- 4° - W	
SB-28	2×4	4.00 ×7.20~7.50	1.90・2.10	1.60~2.10	29.40	N- 7° - W	間仕切柱
SB-29	2×3	4.10 × 5.60	1.90~2.20	1.70~1.90	22.96	N- 9° - E	総柱
SB-30	2×3	3.40 × 5.10	1.60~1.80	1.60~1.80	17.34	N- 3° - E	総柱
SB-31	2×2	3.10 ×3.40~3.60	1.50・1.60	1.50~2.00	10.85	N- 3° - E	総柱
SB-32	(2)×3	(1.90) × 5.20	1.90	1.60~1.90	9.88	N- 88° - W	総柱

西)が1.80m等間隔,桁行(南北)が1.60mと2.00mである。柱穴は径30~60cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片18点,瓦器片3点,瓦質土器片1点,山茶碗片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 34 (Fig.49)

南東ブロックの西側で確認した梁間2間(3.80m),桁行2間(4.30m)の東西棟建物で,SB - 33・35~37と重なる。棟方向はN - 86° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.70mと1.90mで,桁行(東西)が2.10mと2.20mである。柱穴は径20~40cmの円形で,柱径は10~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片9点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 35 (Fig.50)

南東ブロックの西寄りで確認した梁間2間(3.00m),桁行2間(3.80m)の総柱東西棟建物で,SB - 34・36・37と重なる。棟方向はN - 89° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50mと1.60mで,桁行(東西)が1.55mと2.25mである。柱穴は径20~40cmの円形で,柱径は10~20cmとみられる。出土遺物は皆無であった。

SB - 36 (Fig.51)

南東ブロックの西寄りで確認した梁間2間(3.80m),桁行4間(7.90~8.10m)の東西棟建物で,身舎東と西から1間目の柱通りに間仕切柱が立ち,SB - 34・35・37~43と重なる。棟方向はN - 89° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.90m等間隔,桁行(東西)が1.80~2.40mである。柱穴は他の建物と比べ大きく

径30~105cmの円形で,柱径は20~30cmとみられる。出土遺物は比較的多く,土師質土器片104点,瓦器片4点,白磁片1点,青磁片4点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SB - 37 (Fig.52)

南東ブロックの西寄りで確認した梁間2間(3.10m),桁行2間(4.10m)の総柱東西棟建物で,SB - 34~36・38~41と重なる。棟方向はN - 88° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50mと1.60mで,桁行(東西)が1.90mと2.20mである。柱穴は径20~30cmの円形で,柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが,復元図示できなかった。

SB - 38 (Fig.53)

南東ブロックの西寄りで確認した梁間2間(3.20m),桁行3間(3.90m)の東西棟建物で,身舎東から1間目の柱通りに間仕切柱が立ち,SB - 36・37・39~43と重なる。棟方向はN - 88° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50mと1.70mで,桁行(東西)が1.00~1.70mである。柱穴は径30~105cmの円形で,柱径は25~50cmとみられる。出土遺物には土師質土器片12点がみられたが,

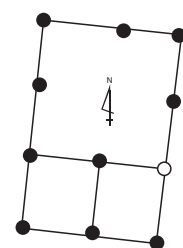


Fig.48 SB - 33

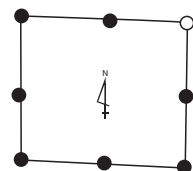


Fig.49 SB - 34

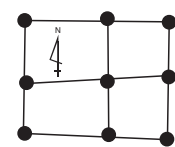


Fig.50 SB - 35

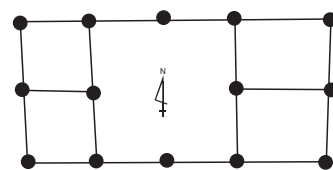


Fig.51 SB - 36

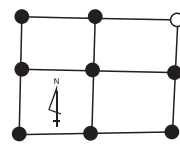


Fig.52 SB - 37

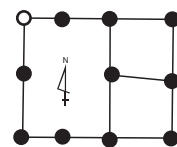


Fig.53 SB - 38

復元図示できるものはなかった。

SB - 39 (Fig.54)

南東ブロックのほぼ中央で確認した梁間2間(3.70m) , 桁行3間(6.00m)の総柱南北棟建物で , SB - 36 ~ 38 ・ 40 ~ 43 ・ 45と重なり , 棟方向はN - 2 ° - Wである。柱間寸法は梁間(東西)が1.70mと2.00mで , 桁行(南北)が1.50 ~ 2.30mである。柱穴は径25 ~ 40cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点 , 土師質土器片6点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

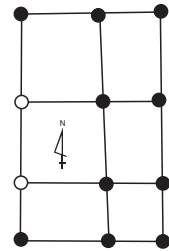


Fig.54 SB - 39

SB - 40 (Fig.55)

南東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.30 ~ 3.50m) , 桁行2間(3.60m)の総柱南北棟建物で , SB - 36 ~ 39 ・ 41 ~ 43と重なり , 棟方向はN - 2 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.60 ~ 1.80mで , 桁行(南北)が1.60mと2.00mである。柱穴は径30 ~ 40cmの円形で , 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが , 復元図示できなかった。

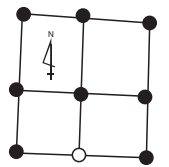


Fig.55 SB - 40

SB - 41 (Fig.56)

南東ブロックの中央で確認した梁間2間(2.80m) , 桁行3間(4.80m)の身舎に東庇が付く東西3間(4.50m) , 南北3間(4.80m)の南北棟建物で , SB - 36 ~ 40 ・ 42 ~ 45と重なる。棟方向はN - 6 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.20 ~ 1.60m , 桁行(南北)が1.20 ~ 2.20mで , 東庇幅は1.70mである。柱穴は径20 ~ 45cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片39点 , 瓦器片5点 , 瓦質土器片1点 , 白磁片1点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

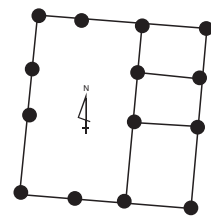


Fig.56 SB - 41

SB - 42 (Fig.57)

南東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.80m) , 桁行3間(4.00m)の総柱南北棟建物で , SB - 36 ・ 38 ~ 41 ・ 43 ~ 47 ・ 49と重なり , 棟方向はN - 1 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.80mと2.00mで , 桁行(南北)が1.00 ~ 1.70mである。柱穴は径30 ~ 40cmの円形で , 柱径は約15cmとみられる。出土遺物は皆無であった。

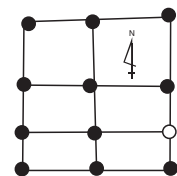


Fig.57 SB - 42

SB - 43 (Fig.58)

南東ブロックの中央で確認した梁間2間(4.10m) , 桁行3間(5.50m)の東西棟建物で , 身舎東から1間目の柱通りに間仕切柱が立ち , SB - 36 ・ 38 ~ 42 ・ 44 ~ 46 ・ 49と重なる。棟方向はN - 89 ° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が2.00mと2.10mで , 桁行(東西)が1.70mと1.90mである。柱穴は径25 ~ 30cmの円形で , 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点 , 土師質土器片7点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

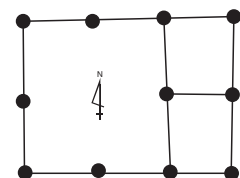


Fig.58 SB - 43

SB - 44 (Fig.59)

南東ブロックの中央で確認した梁間2間(3.00m) , 桁行2間(4.20m)の総柱東西棟建物で , SB - 41

~43・45~50と重なる。棟方向はN - 87° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.50m等間隔,桁行(東西)が2.10m等間隔である。柱穴は径30~40cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片11点,瓦器片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

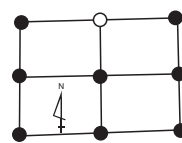


Fig.59 SB - 44

SB - 45 (Fig.60)

南東ブロックの東寄りで確認した梁間2間(4.40m),桁行5間(9.60m)の東西棟建物で,最も大きくSB - 39・41~44・46~53と重なる。棟方向はN - 89° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が2.25m等間隔とみられ,桁行(東西)が1.80~2.00mである。柱穴は径30~50cmの円形で,柱径は15~20cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点,土師質土器片17点,青磁片1点がみられ,土師質土器1点(68)が図示できた。

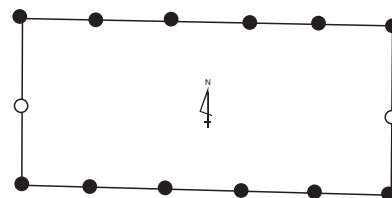


Fig.60 SB - 45

出土遺物

土師質土器 (Fig.70 - 68)

68は小皿で,約1/3が残存し,口径6.1cm,器高2.0cm,底径5.0cmを測る。成形はA技法とみられる。底部の切り離しは回転系切りである。胎土は精良で,焼成は不良で,色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

SB - 46 (Fig.61)

南東ブロックの東寄りで確認した梁間2間(3.30m),桁行3間(4.50m)の南北棟建物で,身舎北から1間目の柱通りに間仕切柱が立ち,SB - 42~45・47~50と重なる。棟方向はN - 1° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.60mと1.70mで,桁行(南北)が1.40mと1.70mである。柱穴は径30~40cmの円形で,柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片16点,瓦器片4点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

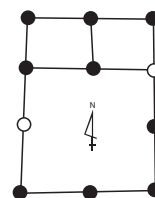


Fig.61 SB - 46

SB - 47 (Fig.62)

南東ブロックの東寄りで確認した梁間2間(3.10m),桁行3間(4.50m)の総柱南北棟建物で,SB - 42・44~46・48~50と重なる。棟方向はN - 1° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.40mと1.70mで,桁行(南北)が1.00~2.00mである。柱穴は径30~40cmの円形で,柱径は約15cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点,土師質土器片27点,瓦器片2点,青磁片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

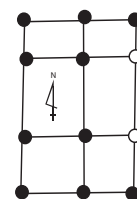


Fig.62 SB - 47

SB - 48 (Fig.63)

南東ブロックの東側で確認した梁間2間(3.50m),桁行2間(4.20m)の南北棟建物で,SB - 44~47・49~51と重なる。棟方向はN - 3° - Wである。柱間寸法は梁間(東西)が1.50mと2.00mで,桁行(南北)が1.90~2.20mである。柱穴は径30~50cmの円形で,柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片4点がみら

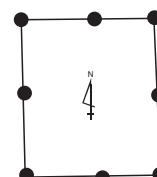


Fig.63 SB - 48

れたが、復元図示できなかった。

SB - 49 (Fig.64)

南東ブロックの東側で確認した梁間2間(3.40m) , 桁行3間(5.70m)の総柱東西棟建物で , SB - 42 ~ 48 ・ 50と重なる。棟方向はN - 89 ° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.60mと1.80mで , 桁行(東西)が1.60 ~ 2.10 mである。柱穴は径30 ~ 40cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片16点 , 瓦器片1点 , 東播系須恵器片1点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

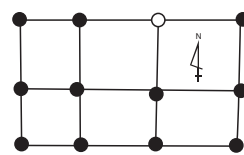


Fig.64 SB - 49

SB - 50 (Fig.65)

南東ブロックの東側で確認した梁間2間(3.40m) , 桁行3間(4.90m)の東西棟建物で , SB - 44 ~ 49 ・ 51 ・ 52と重なる。棟方向はN - 88 ° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.60mと1.80mで , 桁行(東西)が1.30 ~ 2.00mである。柱穴は径20 ~ 50cmの円形で , 柱径は15 ~ 20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片13点 , 瓦器片5点 , 土製品1点がみられ , 土製品1点(69)が図示できた。

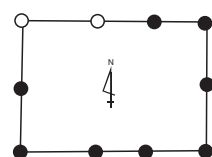


Fig.65 SB - 50

出土遺物

土製品 (Fig.70 - 69)

69は紡錘形の土錘で , 長さ3.8cm , 全幅1.0cm , 孔径0.4cmを測る。胎土は精良で , 焼成は良く , 色調は内外面とも灰白色を呈する。

SB - 51 (Fig.66)

南東ブロックの東側で確認した梁間2間(3.60m) , 桁行3間(4.90m)の総柱東西棟建物で , SB - 45 ・ 48 ・ 50 ・ 52と重なる。棟方向はN - 88 ° - Wである。柱間寸法は梁間(南北)が1.40mと2.20mで , 桁行(東西)が1.50mと1.70mである。柱穴は径20 ~ 40cmの円形で , 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

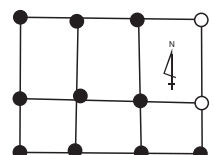


Fig.66 SB - 51

SB - 52 (Fig.67)

南東ブロックの東側で確認した梁間2間(3.10m) , 桁行2間(3.70m)の総柱南北棟建物で , SB - 45 ・ 50 ・ 51 ・ 53と重なる。棟方向はN - 1 ° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が1.50mと1.60mで , 桁行(南北)が1.80mと1.90mである。柱穴は径30 ~ 40cmの円形で , 柱径は約15cmとみられる。出土遺物には土師質土器片20点がみられたが , 復元図示できるものはなかった。

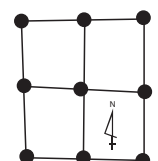


Fig.67 SB - 52

SB - 53 (Fig.68)

南東ブロックの東側で確認した梁間2間(3.40m) , 桁行2間(3.60m)の東西棟建物で , SB - 45 ・ 52と重なる。棟方向はN - 88 ° - Eである。柱間寸法は梁間(南北)が1.60 ~ 1.90mで , 桁行(東西)が1.40 ~ 2.20mである。柱穴は径40 ~ 60cmの円形で , 柱径は約20cmとみられる。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが , 復

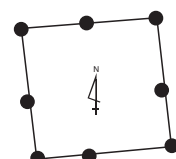


Fig.68 SB - 53

元図示できるものはなかった。

出土遺物

土師質土器 (Fig.70 - 70)

70は小皿で、約1/4が残存し、口径7.1cm、器高2.4cm、底径4.9cmを測る。内面にはロクロ目が残り、成形はB技法で、軟質な感じを受ける個体である。器面は摩耗し、底部の切り離しも不明である。焼成はやや不良で、色調は内外面とも橙色を呈する。

Tab.5 南東ブロック掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m^2)	棟方向 (NはGN)	備考
	梁間 × 桁行	梁間(m) × 桁行(m)	柱間寸法				
			梁間(m)	桁行(m)			
SB-33	2×3	3.60 × 5.60	1.80	1.60・2.00	20.16	N- 5°- E	間仕切柱
SB-34	2×2	3.80 × 4.30	1.70・1.90	2.10・2.20	16.34	N- 86°- W	
SB-35	2×2	3.00 × 3.80	1.50・1.60	1.55・2.25	11.40	N- 89°- E	総柱
SB-36	2×4	3.80 × 7.90~8.10	1.90	1.80~2.40	30.40	N- 89°- E	間仕切柱
SB-37	2×2	3.10 × 4.10	1.50・1.60	1.90・2.20	12.71	N- 88°- E	
SB-38	2×3	3.20 × 3.90	1.50・1.70	1.00~1.70	12.48	N- 88°- W	間仕切柱
SB-39	2×3	3.70 × 6.00	1.70・2.00	1.50~2.30	22.20	N- 2°- W	総柱
SB-40	2×2	3.30~3.50× 3.60	1.60~1.80	1.60・2.00	12.24	N- 2°- E	総柱
SB-41	3×3	4.50 × 4.80	1.20~1.60	1.20~2.20	21.60	N- 6°- E	東庇
SB-42	2×3	3.80 × 4.00	1.80・2.00	1.00~1.70	15.20	N- 1°- E	総柱
SB-43	2×3	4.10 × 5.50	2.00・2.10	1.70・1.90	22.55	N- 89°- W	間仕切柱
SB-44	2×2	3.00 × 4.20	1.50	2.10	12.60	N- 87°- W	総柱
SB-45	2×5	4.40 × 9.60	2.25	1.80~2.00	42.24	N- 89°- W	
SB-46	2×3	3.30 × 4.50	1.60・1.70	1.40・1.70	14.75	N- 1°- E	間仕切柱
SB-47	2×3	3.10 × 4.50	1.40・1.70	1.00~2.00	13.95	N- 1°- E	総柱
SB-48	2×2	3.50 × 4.20	1.50・2.00	1.90~2.20	14.70	N- 3°- W	
SB-49	2×3	3.40 × 5.70	1.60・1.80	1.60~2.10	19.38	N- 89°- W	総柱
SB-50	2×3	3.40 × 4.90	1.60・1.80	1.30~2.00	16.66	N- 88°- W	
SB-51	2×3	3.60 × 4.90	1.40・2.20	1.50・1.70	17.64	N- 88°- W	総柱
SB-52	2×2	3.10 × 3.70	1.50・1.60	1.80・1.90	11.47	N- 1°- E	総柱
SB-53	2×2	3.40 × 3.60	1.60~1.90	1.40~2.20	12.24	N- 88°- E	

SB - 54 (Fig.69)

南東ブロックの東隣で確認した梁間2間(4.30m)、桁行3間(4.60m)の南北棟建物で、身舎北から1間目の柱通りに間仕切柱が立つものとみられる。棟方向はN - 2° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が2.10mと2.20mで、桁行(南北)が1.60~1.80mである。柱穴は径40~55cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片10点、瓦器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

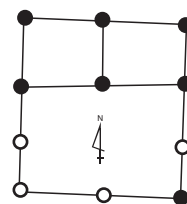


Fig.69 SB - 54

Tab.6 その他掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模					面積 (m ²)	棟方向 (NはGN)	備考	
	梁間 × 桁行	梁間(m) × 桁行(m)		柱間寸法					
				梁間(m)	桁行(m)				
SB-54	2×3	4.30	×	4.60	2.10・2.20	1.60~1.80	19.78	N-2°-E	間仕切柱

塀・柵列跡

今回の調査区では14列の塀・柵列跡を復元した。これらの内11列は掘立柱建物構成ブロックでみると西ブロックが10列(SA-1~10)、北東ブロックが1列(SA-11)となる。南東ブロックでは復元できなかったが、少なからず目隠し塀などが存在したことも考えられる。

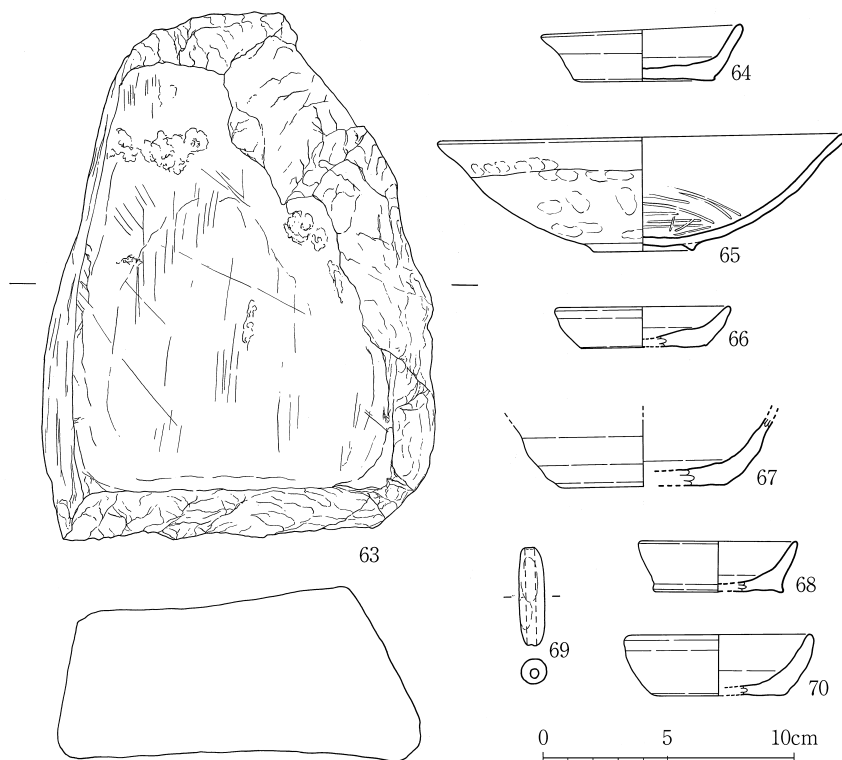


Fig.70 SB-2・9・11・16・22・45・50・53出土遺物実測図

なお、塀・柵列を構成する柱穴の埋土は第 層の褐色粘土質シルトを主体とし、検出面となっている第 層のにびい黄褐色シルトのブロックや土粒を含むものであった。また、出土遺物には土師質土器を中心に瓦器片等が少量みられるものの全般に少なく、復元図示できるものはなかった。

SA - 1

西ブロックの西端で確認したL字形の塀である。SA - 2の北隣に位置する。5間分(11.00m)を検出し、柱間は1.80~2.40mである。柱穴は径22~43cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 2

西ブロックの西端で確認した東西塀(N-88°-W)である。SA - 1の南隣に位置する。3間分(5.90m)を検出し、柱間は1.90mと2.10mである。柱穴は径25~30cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 3

西ブロックの南側で確認した東西塀(N-89°-E)である。SB - 1~3の北隣に位置する。2間分(4.70m)を検出し、柱間は2.10mと2.60mである。柱穴は径約30cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 4

西ブロックの南側で確認した南北塼(N - 5° - W)である。SB - 1~3の北隣に位置する。4間分(6.70 m)を検出し、柱間は1.30~1.95mである。柱穴は径30~40cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 5

西ブロックの南側で確認した南北塼(N - 2° - W)である。SA - 6の西隣に位置する。3間分(4.10m)を検出し、柱間は0.90~1.60mである。柱穴は径30~42cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 6

西ブロックの西端で確認したL字形の塼である。SB - 7~9の北側と西側を囲む形に配置される。8間分(13.00m)を検出し、柱間は1.60~2.10mである。柱穴は径20~38cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 7

西ブロックの北側で確認した東西塼(N - 83° - W)である。SB - 4の西隣に位置する。3間分(6.65m)を検出し、柱間は2.10~2.35mである。柱穴は径30~40cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 8

西ブロックの北側で確認した南北塼(N - 2° - W)である。SB - 12の西隣に位置する。3間分(4.80mで1間分はSK - 12に切られたものとみられる。)を検出し、柱間は1.50~1.80mとみられる。柱穴は径約30cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 9

西ブロックの北側で確認した東西塼(N - 88° - W)である。SB - 12の南隣に位置する。3間分(6.00 m)を検出し、柱間は1.30~2.60mである。柱穴は径25~30cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

SA - 10

西ブロックの北側で確認した東西塼(N - 82° - W)である。SB - 13の北西に位置する。3間分(5.50 m)を検出し、柱間は1.50~2.20mである。柱穴は径30~40cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

Tab.7 西ブロック塼・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA - 1	6	11.00	1.80~2.40	-	L字形
SA - 2	4	5.90	1.90・2.10	N - 88° - W	
SA - 3	3	4.70	2.10・2.60	N - 89° - E	
SA - 4	5	6.70	1.30~1.95	N - 5° - W	
SA - 5	4	4.10	0.90~1.60	N - 2° - W	
SA - 6	9	13.00	1.60~2.10	-	L字形
SA - 7	4	6.65	2.10~2.35	N - 83° - W	
SA - 8	4	4.80	1.50~1.80	N - 2° - W	
SA - 9	4	6.00	1.30~2.60	N - 88° - W	
SA - 10	4	5.50	1.50~2.20	N - 82° - W	

SA - 11

北東ブロックの西寄りで確認した東西堀(N - 88° - E)である。SB - 18~20の北側に位置する。4間分(5.50m)とみられるが、真中の柱穴は検出できなかった。柱間は1.50~2.20mである。柱穴は径30~40cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

Tab.8 北東ブロック堀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA-11	5	5.50	1.50~2.20	N-88°-E	

SA - 12

調査区東端部で確認した南北堀(N - 6° - E)である。4間分(7.40mで1間分はピットに切られたものとみられる。)を検出し、柱間は1.70mと1.90mとみられる。柱穴は径約30cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

Tab.9 その他の堀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA-12	5	7.40	1.70・1.90	N - 6° - E	
SA-13	4	6.20	1.70~2.30	N - 85° - W	
SA-14	5	5.30	1.10~1.50	N - 3° - E	

SA - 13

調査区東南端部で確認した東西堀(N - 85° - W)である。3間分(6.20m)を検出し、柱間は1.70~2.30mとみられる。柱穴は径約30cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

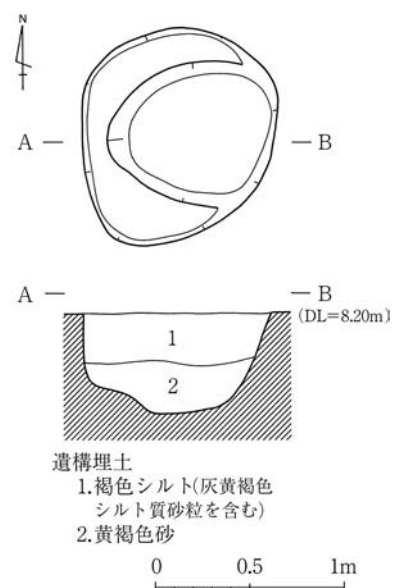
SA - 14

調査区東南端部で確認した南北堀(N - 3° - E)である。4間分(5.30m)を検出し、柱間は1.10~1.50mとみられる。柱穴は径25~33cmの円形で、柱径は約15cmとみられる。

土坑

SK - 1 (Fig.71)

西ブロックの北側で検出した不整形形の土坑で、出土遺物からみて土坑墓(屋敷墓)と考えられる。長径1.10m,短径1.00m,深さ1.01mを測り、断面は箱形を呈する。底面は、三日月状の平場と円形の基底面で構成される。埋土は上下2層に分層され、上層が褐色シルトに灰黄褐色シルト質砂粒を含み、下層が黄褐色砂となっていた。出土遺物には土師質土器片30点以外に、底面から



出土した和鏡とその鏡面に凝着していた毛抜き、古銭があり、和鏡1面(71)、古銭1点(72)、鉄製品1点(73)が図示できた。

出土遺物

和鏡 (Fig.72 - 71)

71は山水双鳥鏡とみられるもので、完存し、面径11.1cm、面厚0.2cm、周縁厚1.0cm、周縁幅0.4cmを測る。外区には珠文帯が巡り、内区には景觀図に双鳥を配している。鈕は亀形鈕となる。概して遺存状態は良い。

古銭 (Fig.72 - 72)

72は篆書の皇宗通寶で、北宋銭である。全体に錆化がみられるものの銭径2.3cm、内径1.9cmを測る。

鉄製品 (Fig.72 - 73)

73は毛抜きとみられるもので、一方の先端が欠損するもののほぼ全形を留める。全長9.1cm、全厚0.3cm、全幅0.6cmを測る。

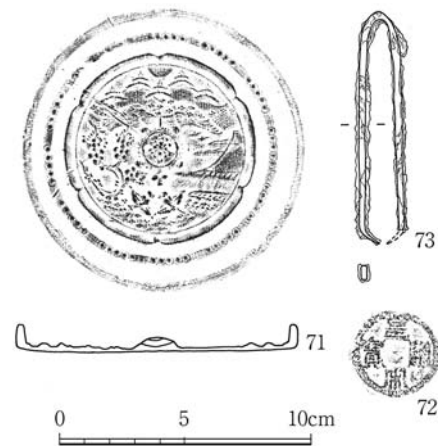


Fig.72 SK - 1出土遺物実測図(72は1/2)

SK - 2

西ブロックの北側で検出した不整形の土坑である。長辺2.45m、短辺1.72m、深さ0.27mを測り、長軸方向はN - 16° - Eで、断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 3

西ブロックの北側で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.28m、短径2.10m、深さ0.21mを測り、長軸方向はN - 21° - Eで、断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 4

西ブロックの北側で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.74m、短辺2.06m、深さ0.33mを測り、長軸方向はN - 1° - Eで、断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片6点がみられ、土師質土器1点(74)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.74 - 74)

74は羽釜の口縁部片で、口径18.0cmを測る。内傾する口縁部外面には断面三角形の鏝が巡る。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、胴部外面は未調整となり、鏝下半以下には煤が付着する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

SK - 5

西ブロックの北東側で検出した舟形の土坑である。長辺2.30m、短辺0.88m、深さ16cmを測り、長軸方向はN - 87° - Wで、断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片5点、瓦器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 6

西ブロックの中央で検出した不整形円形とみられる土坑である。長径3.36m,短径約2.60m,深さ16cmを測り,断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片30点,青磁片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 7

西ブロックの西側で検出した楕円形の土坑である。長径1.73m,短径0.76m,深さ4cmを測り,長軸方向N-7°-Eで,断面は舟底形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には須恵器片3点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 8

西ブロックの中央寄りで検出した円形の土坑である。径0.68m,深さ16cmを測り,断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には須恵器1点,土師質土器片5点がみられ,須恵器1点(75)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.74 - 75)

75は甕で,口縁部から肩部にかけての約1/2が欠損する以外残存し,口径18.0cm,器高26.0cm,胴径25.5cmを測る。底部は丸く,胴部は上部に最大径を有する。口縁部は短く外反し,端部は上下に若干肥厚する。口縁部はヨコナデ調整,胴部内面は同心円文のタタキ目,外面は平行のタタキ目が残る。胎土には白色砂粒を比較的多く含み,焼成は不良で,色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

SK - 9

西ブロックの中央で検出した不整形の土坑である。長辺2.12m,短辺1.13m,深さ0.28mを測り,長軸方向はN-3°-Eで,断面は逆台形を呈する。埋土は褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片10点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

Tab.10 西ブロック土坑計測表

遺構番号	平面形	規 模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK-1	不整形円形	1.10	1.00	1.01	—	中世	
SK-2	不整形	2.45	1.72	0.27	N-16°-E	〃	
SK-3	不整形楕円形	2.28	2.10	0.21	N-21°-E	〃	
SK-4	隅丸方形	2.74	2.06	0.33	N-1°-E	〃	
SK-5	舟形	2.30	0.88	0.16	N-87°-W	〃	
SK-6	不整形円形	3.36	2.60	0.16	—	〃	
SK-7	楕円形	1.73	0.76	0.04	N-7°-E	〃	
SK-8	円形	0.68	—	0.16	—	〃	
SK-9	不整形方形	2.12	1.13	0.28	N-3°-E	〃	

SK - 10

北東ブロックの西端で検出した不整形の土坑で、SK - 11に切られる。長辺2.88m、短辺1.49m、深さ19cmを測り、長軸方向はN - 2° - Wで、断面は舟底形を呈する。埋土は黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師器1点、須恵器片1点、土師質土器片8点がみられ、土師器1点(76)が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.74 - 76)

76は甕で、中胴部から上の約1/4が残存し、口径16.2cmを測る。胴部は上外方へ内湾気味に上がり、口縁部は短く外反する。口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整の後に外面と共にヨコナデ調整、胴部内面はヘラナデ調整とナデ調整、胴部外面にはタテ方向と斜め方向のハケ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。

SK - 11

北東ブロックの西端で検出した隅丸方形の土坑で、SK - 10を切っている。長辺1.68m、短辺1.10m、深さ0.24mを測り、長軸方向はN - 3° - Wで、断面は舟底形を呈する。埋土は淡黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片6点、瓦器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 12

北東ブロックの西端で検出した不整形の土坑で、SD - 7を切っている。長辺2.78m、短辺2.48m、深さ0.34mを測り、長軸方向はN - 20° - Wを示す。底面は東側に1段落ちた掘り込みがあり、断面は概ね逆台形を呈する。埋土は淡黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片30点、青磁片1点、鉄滓片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 13 (Fig.73)

北東ブロックの南側で検出した円形の土坑である。径2.47m、深さ0.93mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は4層に分層でき、1層がマンガン粒を含む褐色(10YR4/4)シルト、2層がマンガン粒を含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルト、3層がにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト、4層がにぶい黄褐色(10YR5/3)シルトであった。出土遺物には土師質土器片20点、瓦質土器1

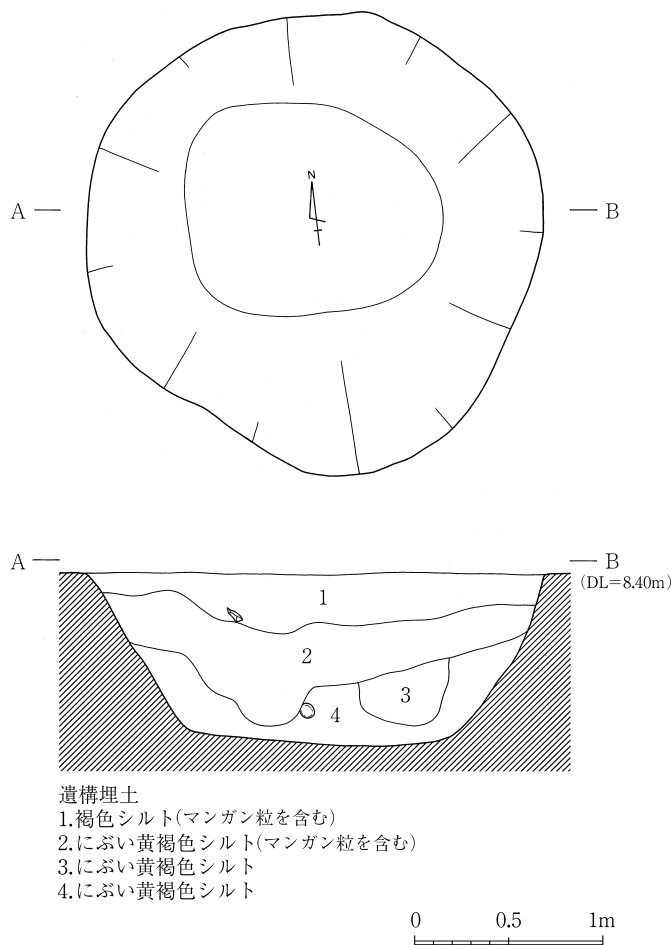


Fig.73 SK - 13

点,青磁片6点がみられ,瓦質土器1点(77)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.74 - 77)

77は羽釜で,口縁部の一部が残存し,口径24.8cmを測る。口縁部は内傾気味に直立し,外面には水平を向く幅2.0cmの鰐が巡る。口縁部内面はヨコ方向のハケ調整の後に,外面と共にヨコナデ調整,胴部内面はナデ調整,外面はヨコ方向のヘラ削りを施す。胎土には砂粒を多く含み,焼成は良く,色調は内外面とも灰色ないし暗灰色を呈する。

SK - 14

北東ブロックの東側で検出した不整形の土坑で,SD - 11を切っている。長辺3.38m,短辺約1.30m,深さ11cmを測り,長軸方向はN - 7° - Eを示す。断面は浅い逆台形を呈する。埋土は黄褐色シルト単一層で炭化物片とマンガン粒を含んでいた。出土遺物には土師質土器片70点がみられ,土師質土器6点(78~83)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.74 - 78~83, Tab.11)

78~80は杯,81~83は小皿で,成形はすべてA技法であり,底部の切り離しは80が不明瞭である以外すべて回転系切りで,79のみ後でハケ調整を加える。器面は回転ナデ調整で,79~82は内底面にナデ調整を加えている。また,他と比べ軟質な個体(80・82・83)がある。78は一部が残存し,口縁部は内湾気味に上がる。胎土は精良であるが,焼成は不良で,色調は内外面とも淡黄褐色を呈する。79はベタ高台風な感じを受ける個体で,口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がる。胎土は精良で,焼成はやや悪く,色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。80はベタ高台となる個体で,口縁部は屈曲して外上方にほぼ真直ぐ上がる。81は口縁部の一部が欠損するものである。口縁部は短く外上方を向く。82は約1/3が残存し,口縁部は斜め上方に短くのびる。83はほぼ完存し,口縁部は内湾気味に短く上がる。80~83の胎土・焼成・色調はほぼ同じであり,胎土は精良で,砂粒をわずかに含み,焼成は良く,色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

Tab.11 SK-14出土土師質土器法量表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
78	12.2	3.8	8.1
79	12.4	4.0	6.7
80	12.0	4.0	6.7
81	7.3	1.5	4.7
82	7.4	1.8	5.6
83	7.0	1.7	4.7

Tab.12 北東ブロック土坑計測表

遺構番号	平面形	規 模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺 (m)	短辺 (m)	深さ(m)			
SK-10	不整形	2.88	1.49	0.19	N-2°-W	中世	
SK-11	隅丸方形	1.68	1.10	0.24	N-3°-W	〃	
SK-12	不整形	2.78	2.48	0.34	N-20°-W	〃	
SK-13	円形	2.47	-	0.93	-	〃	
SK-14	不整形	3.38	1.30	0.11	N-7°-E	〃	

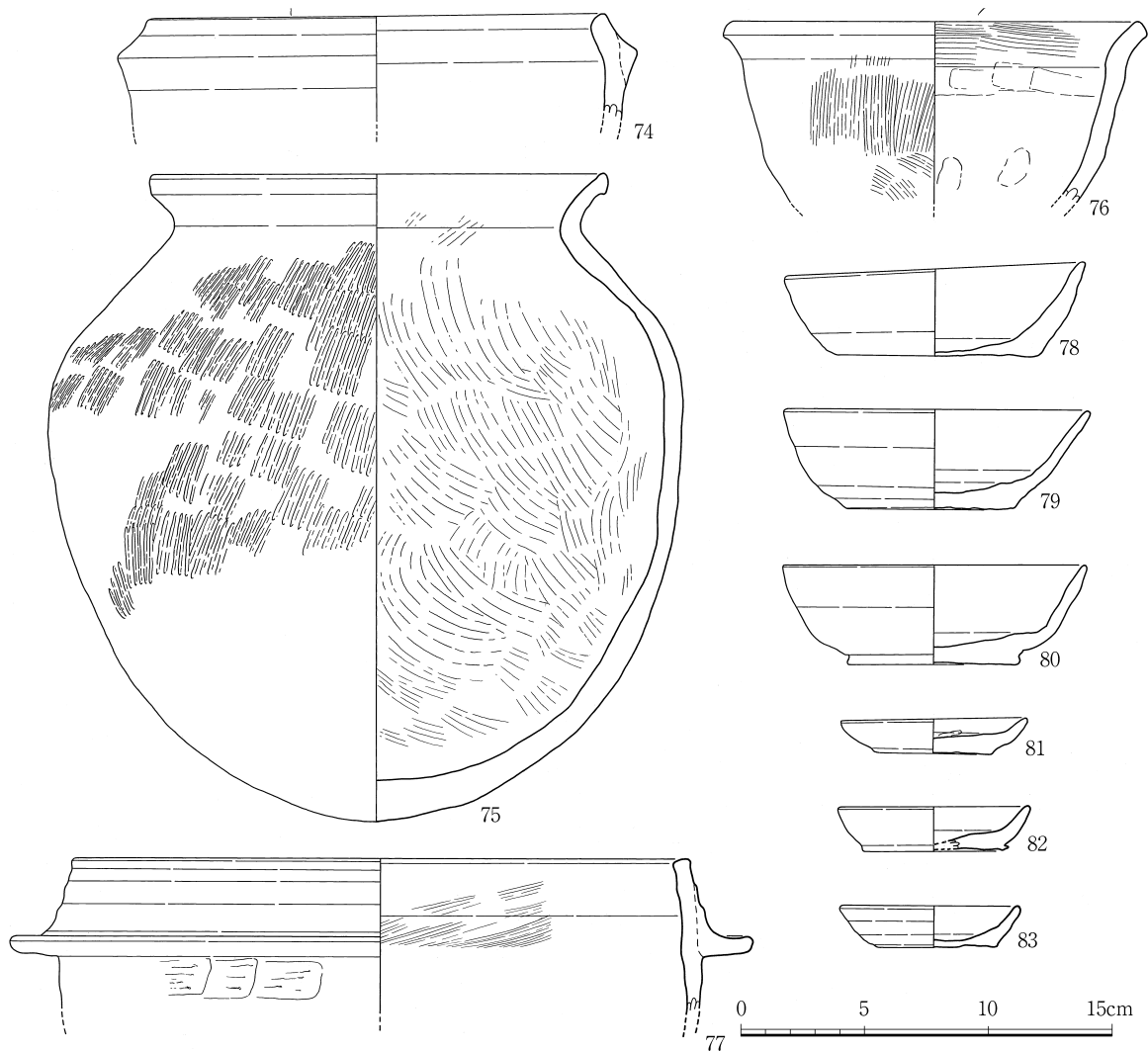


Fig.74 SK - 4・8・10・13・14出土遺物実測図

SK - 15

南東ブロックの東寄りで検出した不整形の土坑である。長辺1.95m,短辺約1.83m,深さ12cmを測り,長軸方向はN - 34° - Wを示す。断面は逆台形を呈する。埋土は暗褐色シルト単一層で炭化物片とマンガン粒を含んでいた。出土遺物には土師質土器片24点,瓦器片3点,東播系須恵器片1点,備前焼1点がみられ,備前焼1点(84)が図示できた。

出土遺物

備前焼 (Fig.75 - 84)

84は備前焼の小壺ではないかとみられる個体で,底部が残存し,底径3.9cmを測る。底部の切り離

Tab.13 南東ブロック土坑計測表

遺構番号	平面形	規模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK-15	不整形	1.95	1.83	0.12	N-34°-W	中世	
SK-16	舟形	(2.00)	0.45	0.25	N-83°-E	〃	

しは回転系切りで、胴部は内湾気味に上がる。調整は回転ナデ調整である。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で、色調は、内面が灰色、外面が赤灰色を呈する。

SK - 16

南東ブロックの南東端で検出した舟形の土坑で、調査区外にのびる。長辺2.00m以上、短辺約0.45m、深さ0.25mを測り、長軸方向はN - 83° - Eを示す。断面は舟底形を呈する。埋土は2層に分層でき、上層がにぶい黄褐色シルト、下層が褐色シルトとなっていた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片20点、瓦質土器片1点、古銭1点がみられ、古銭1点(85)が図示できた。

出土遺物

古銭 (Fig.75 - 85)

85は篆書の紹聖元寶で、北宋銭である。全体に錆化がみられるものの銭径2.4cm、内径1.9cmを測る。

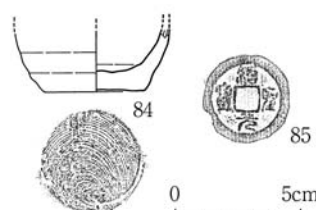


Fig.75 SK - 15・16

出土遺物実測図(85は1/2)

溝跡

SD - 1

西ブロックの南端で検出した東西溝跡(N - 86° - E)で、西ブロックの南の区画をなす溝と考えられる。溝はSD - 2とほぼ直交して接するが、基底面はSD - 2の方が深く、SD - 2に付随するものとみられる。幅1.00~1.90m、深さ0.16~0.26mで、基底面は西(8.018m)から東(7.899m)に向かって緩やかに傾斜し、14.30mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片約250点、瓦器片30点、瓦質土器片1点、東播系須恵器片3点、青磁片1点、鉄滓片1点などがみられ、東播系須恵器1点(86)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.77 - 86)

86は片口鉢で、体部から口縁部の一部が残存する。口縁部は体部からそのまま外上方へ真直ぐのび、端部を上方に若干拡張する。器面は回転ナデ調整で、内面にナデ調整を加える。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも青灰色を呈する。

SD - 2 (Fig.76)

調査区中央部で検出した西ブロックの東の境と北東・南東ブロックの西の境をなすと考えられる南北溝跡(N - 3° - W)で、調査区外にのびる。SD - 1・10が溝に直交して取り付いている。幅1.65~2.05m、深さ0.33~0.34mで、基底面は南(7.813m)から東(7.772m)に向かって緩やかに傾斜し、26.70mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には須恵器片5点、土師質土器片約200点、瓦器片20点、備前焼2点、常滑焼片6点、青磁片1点、鉄滓片1点などがみられ、須恵器1点(87)、土師質土器1点(88)、備前焼1点(89)、常滑

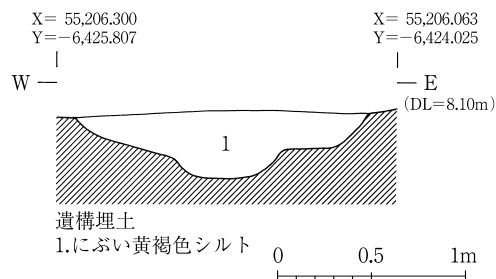


Fig.76 SD - 2

焼1点(90)が図示できた。

出土遺物

須恵器 (Fig.77 - 87)

87は杯蓋で、擬宝珠形つまみが付く天井部約1/4が残存し、つまみ径は1.4cmを測る。丸みのある天井部には回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整で、内面にはナデ調整を加える。胎土には白色砂粒を若干含み、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.77 - 88)

88は鍋で、口縁部の一部が残存し、口径25.7cmを測る。口縁部は内傾し、端部は受部状をなす。口縁部はヨコナデ調整、内面はナデ調整、外面は未調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

備前焼 (Fig.77 - 89)

89は播鉢で、口縁部の一部が残る。口縁部は上外方を向く体部から内傾する。器面は回転ナデ調整で、内面には6本単位の条線が残る。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内外面ともぶい赤褐色ないし褐灰色を呈する。

常滑焼 (Fig.77 - 90)

90は甕で、口縁部の一部が残る。口縁部はN字口縁をなし、器面には回転ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は、内面が灰黄褐色、外面が灰色を呈する。

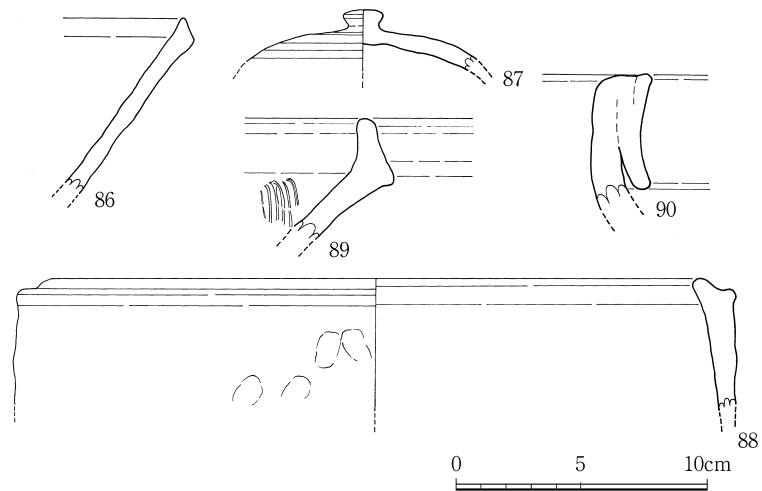


Fig.77 SD - 1・2出土遺物実測図

SD - 3 (Fig.78)

調査区中央部で検出した南北溝跡(N - 2° - E)とみられるもので、北側は調査区外にのびる。SD - 4 - 6・8とほぼ平行して走る。幅0.78 - 1.09m、深さ4 - 12cmで、基底面は北(7.968m)から南(7.834m)に向って緩やかに傾斜し、23.62mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は褐色シルト単一層であった。出土遺物には7世紀初めの須恵器片1点がみられたが、図示できなかった。

SD - 4

調査区中央部で検出した南北溝跡(N - 2° - W)とみられるものである。SD - 3・5・6・8とほぼ平行して走る。幅0.52 - 0.69m、深さ0.17 - 0.30mで、基底面は南(7.856m)から北(7.720m)に向って緩やかに傾斜し、15.70mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片20点、瓦器片2点、瓦質土器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD - 5 (Fig.78)

調査区中央部で検出した南北溝跡(N - 2° - E)とみられるものである。SD - 3・4・6・8とほぼ平行して走る。幅0.60~0.70m, 深さ0.16~0.48mで, 基底面は北端が7.905m, 南端が7.814mとほぼ平坦で, 27.05mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈

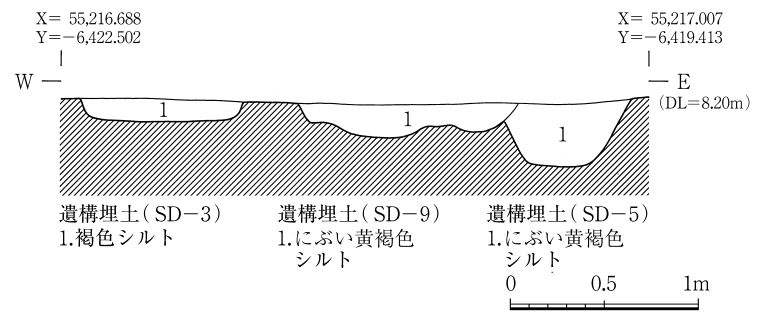


Fig.78 SD - 3・5・9

する。埋土はにぶい黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片50点, 瓦器片5点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD - 6

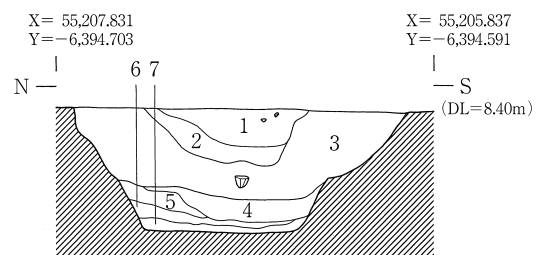
調査区中央部で検出した南北溝跡(N - 2° - W)とみられるもので, SD - 3~5・8とほぼ平行して走る。幅0.60~0.70m, 深さ10~13cmで, 基底面は北(8.017m)から南(7.905m)に向って緩やかに傾斜し, 19.35mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片10点, 瓦器片1点, 東播系須恵器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD - 7

調査区中央部東寄りで検出した南北溝跡(N - 15° - E)とみられるものである。幅0.50~0.72m, 深さ10~13cmで, 基底面は南(8.016m)から北(7.948m)に向って緩やかに傾斜し, 6.65mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片20点, 瓦器片2点, 青磁片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SD - 8

調査区中央部東寄りで検出した南北溝跡(N - 2° - W)とみられるもので, SD - 3~6とほぼ平行して走る。幅0.42~0.72m, 深さ10~13cmで, 基底面は北端が8.007m, 南端が8.043mとほぼ平坦で, 9.50mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土は暗褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片20点, 瓦器片2点, 常滑焼片1点, 青磁片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。



- 遺構埋土
1. 灰黄褐色シルト(マンガン粒を少量含む)
 2. にぶい黄褐色シルト(マンガン粒を含む)
 3. 黄褐色シルト(マンガン粒を含む)
 4. 灰黄褐色粘土質シルト(マンガン粒を少量含む)
 5. 褐色シルト(マンガン粒を含む)
 6. にぶい黄褐色粘土質シルト(マンガン粒を少量含む)
 7. にぶい黄褐色シルト(マンガン粒を含む)

Fig.79 SD - 9

SD - 9 (Fig.78・79)

調査区東部で検出した北東ブロックと北の境をなすと考えられる東西溝跡(N - 87~89° - W)で, 掘り返しの痕跡が残り, 東の調査区外に派生する。また, 西では鍵状, 東では北東方向に向きを変える。SD - 10と多くの部分で重複しており, SD - 10の付

け替えとも考えられる。幅0.72～1.70m、深さ0.23～0.61mで、基底面は東(7.967m)から西(7.801m)に向って緩やかに傾斜するものの深く掘られている箇所もある。検出長は55.70mを測る。断面は西側と東側では舟底形、中央部では概ね箱形を呈する。堆積状態は場所によって幾分異なるものに、ぶい黄褐色シルトを主体とし、褐色シルトやにぶい黄褐色粘土質シルトが混じり、上層には灰黄褐色シルトの堆積が認められた部分もある。出土遺物には土師質土器片約300点、瓦器片20点、常滑焼片5点、青磁片5点、白磁片1点、肥前系陶器片1点などがみられ、土師質土器7点(91～97)、瓦質土器1点(98)、備前焼4点(99～102)、肥前系陶器1点(103)、鉄製品1点(104)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.80 - 91～97, Tab.14)

91～96は杯で、97は小皿である。ただし、91～95については器高も低く、皿と呼称した方が良いのかもしれない。まず、成形は91～95がA技法で、ほぼ同じ形態をなし、口縁部は外上方へのび、端部を細く仕上げる。底部の切り離しも摩耗しているため不明な個体が多いが、91は回転系切りで、93はヘラ起しとなっている。外底面に回転系切り痕が認められない個体が多く、ヘラ起しであった可能性が強い。いずれも軟質となり、摩耗する個体が多く調整は不明瞭であるが、回転ナデ調整とみられる。

Tab.14 SD-9出土土師質土器法量表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
91	10.9	2.2	5.2
92	9.9	2.5	3.4
93	10.9	2.6	4.9
94	10.0	2.5	4.9
95	10.1	2.7	5.0
96	10.6	3.2	4.0
97	7.1	1.6	5.0

胎土はいずれも精良であるが、焼成は不良である。色調は内外面とも橙色ないしにぶい黄橙色を呈する。96は底部がやや深い個体で、これも軟質であるが、成形はB技法である。口縁部が外反し、端部は丸い。器面には回転ナデ調整を施し、内底面には口クロ目が残る。底部の切り離しは摩耗するが、回転系切りによるとみられる。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良く、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈する。

97は小皿で、約2/3が残存する。成形はB技法とみられ、杯と同様に軟質である。器面は摩耗が著しく、調整は不明である。胎土は精良で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

瓦質土器 (Fig.80 - 98)

98は鍋で、口縁部から胴部の約1/4が残存し、口径17.8cm、胴径19.5cmを測る。胴部は内湾して上がり、最大径が上胴部にあり、口縁部は短く内傾する。口縁部と内面はヨコナデ調整、肩部には指頭圧痕が残り、外面胴部にはナデ調整を施す。胎土は精良で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

備前焼 (Fig.80 - 99～102)

99～101は擂鉢である。99・100は口縁部と体部の一部が残り、いずれも口径30.0cmを測る。体部は外上方へのび、口縁部は内上方に若干肥厚する。口縁部と内面にはヨコナデ調整、体部外面にはナデ調整を施し、内面には、99が9本単位、100が7本単位の条線が残る。いずれも胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内面が灰褐色、外面がにぶい赤褐色ないし灰褐色を呈する。101は約1/4が残存し、口径27.4cm、器高11.8cm、底径13.4cmを測る。底部は平らで未調整となり、体部は外

上方へのび、口縁部は内上方へ拡張する。器面は回転ナデ調整で、内面には14本単位の条線が5カ所残り、実際は10カ所に施されていたものとみられる。胎土は精良で、砂粒は比較的少なく、焼成は良好であり、色調は内外面とも灰色を呈する。

102は甕で、口縁部の一部が残る。口縁部は玉縁口縁となり、ハダ荒れがみられる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内外面とも灰褐色ないし褐灰色を呈する。

肥前系陶器 (Fig.80 - 103)

103は鉢で、底部の一部が残存し、底径8.2cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾気味に上がる。内面には鉄釉を施した上に乳白色の釉で模様を描き、1カ所に胎土目の痕跡が残る。外面は無釉となる。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良く、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面が浅黄色ないし灰黄褐色を呈する。

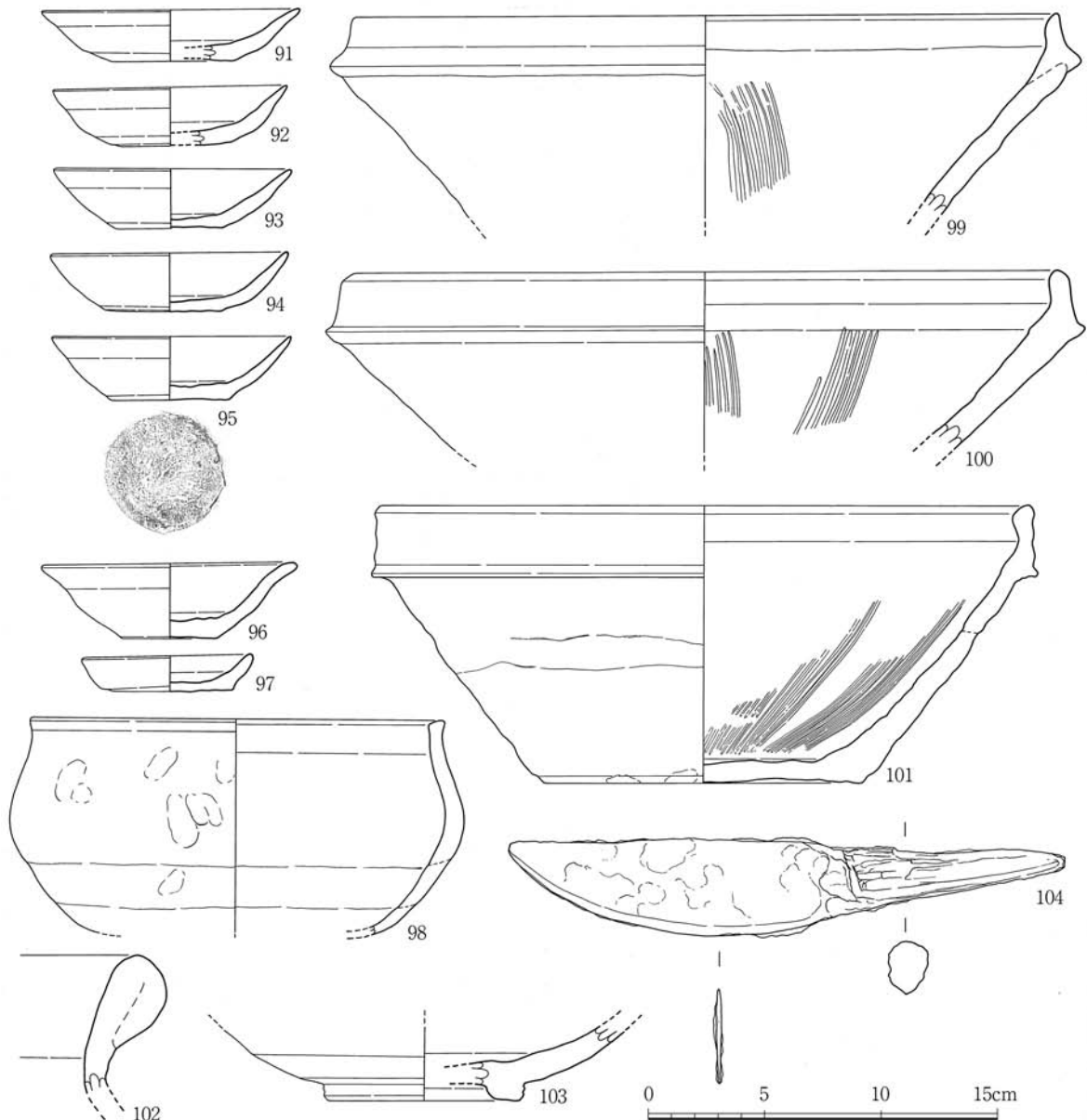


Fig.80 SD - 9出土遺物実測図

鉄製品 (Fig.80 - 104)

104は刀子とみられるもので、ほぼ完存し、全長23.0cm、刃部長14.0cm、厚さ0.2cmを測る。刃部は内湾して鋒に至り、棟は中央部がやや膨らむ。茎には柄の木質が遺存する。

SD - 10

調査区中央部東寄りで検出した東西溝跡(N - 88° - W)で、西ではSD - 2に直交して取り付け、東側ではSD - 9と重複している。幅0.40~0.65m、深さ0.18~0.34mで、基底面は東(7.859m)から西(7.797m)に向かって緩やかに傾斜する。検出長は25.20mを測る。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片約300点、瓦器片3点、東播系須恵器片2点、備前焼片2点、染付片1点がみられ、土師質土器1点(105)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.81 - 105)

105は羽釜で、口縁部と胴部の一部が残存する。胴部が内湾し、そのまま口縁部に至る。口縁部外面には鐳が巡る。口縁部にはヨコナデ調整、内面にはハケ調整、鐳下半にはナデ調整、胴部外面には平行のタタキを施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内面がにぶい赤褐色、外面が橙色を呈する。

SD - 11

調査区北東部で検出した南北溝跡(N - 1° - E)である。幅0.60~1.08m、深さ0.10~0.24mで、基底面は南(8.183m)から北(8.008m)に向かって緩やかに傾斜し、6.90mを検出した。断面は舟底形ないし逆台形を呈し、底面には掘り込まれた箇所がみられる。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片約100点、瓦器片5点、青磁片1点がみられ、土師質土器12点(106~117)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.81 - 106 ~ 117, Tab.15)

106~111は杯、112~117は小皿である。まず、杯は、成形がいずれもA技法になっており、底部の切り離しは107以外すべて回転系切りで、108にはハケ調整、111にはナデ調整を加える。口縁部はいずれも外上方にほぼ真直ぐ上がり、端部を106~108は丸く、109~111は細く仕上げる。調整は回転ナデ調整で、106・108・110の内底面にはナデ調整を加えている。107はSD - 9でまとまって出土した杯同様軟質で、胎土に砂粒をほとんど含まず精良であるのに対し他の個体は胎土に砂粒を比較的多く含み、焼成も良い。色調も107が明褐色であるのに対しにぶい橙色ないし橙色を呈する。

小皿は底部が116以外ベタ高台状をなし、成形はいずれもB技法とみられ、底部の切り離しは116以外すべて回転系切りで、112にはナデ調整、115にはハケ

Tab.15 SD-11出土土師質土器法量表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
106	11.4	3.2	5.8
107	12.0	3.2	6.8
108	13.4	3.2	8.4
109	11.8	3.4	5.4
110	12.1	3.9	7.6
111	12.5	4.3	8.0
112	6.9	1.9	4.8
113	7.3	1.7	5.0
114	7.3	1.6	4.5
115	7.5	1.7	4.6
116	7.2	1.8	4.8
117	7.0	1.7	4.6

調整を加える。調整は回転ナデ調整で、112・114・115の内底面にはナデ調整ないし指ナデ調整を加えている。胎土は113と117が砂粒をほとんど含まず精良であるのに対し他の個体は砂粒を比較的多く含む。焼成は、112・115が極めて良く還元焼成された可能性があるのに対し、113・116・117は軟質である。色調は焼成が良いものが橙色、軟質なものが明褐色を呈する。

SD - 12

調査区北東部で検出した南北溝跡(N - 9° - E)である。幅0.50～0.68m、深さ0.56～0.69mで、基底面は北端が7.680m、南端が7.535mとほぼ平坦で、5.65mを検出した。断面は箱形を呈する。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片50点、東播系須恵器片1点、瓦質土器片1点、青磁片3点がみられ、土師質土器1点(118)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.81 - 118)

118は杯で、約1/3が残存し、口径11.2cm、器高4.5cm、底径7.1cmを測る。成形はB技法で、内底面にはロクロ目が残る。底部が深く、体部は斜め上方に上がり、口縁部は外上方を向く。軟質で、器面は摩耗し、調整は不明である、胎土には砂粒をほとんど含まず精良で、焼成はやや不良となり、色調は内外面とも明褐色を呈する。

SD - 13

調査区北東部で検出した南北溝跡で、北(N - 6° - W)に向いた後、北西(N - 53° - W)に方向を変える。幅0.40～0.95m、深さ11～16cmで、基底面は北(8.132m)から南(8.034m)に向って緩やかに傾斜し、7.65mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片30点、青磁片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD - 14

調査区北東端部で検出した南北溝跡(N - 2° - W)である。幅0.45～0.55m、深さ7～12cmで、基底面は北端が8.181m、南端が8.128mとほぼ平坦で、7.05mを検出した。断面は舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片6点、瓦器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD - 15

調査区南東端部で検出した南北溝跡で、SD - 16と並走し、南東ブロックの東の区画溝の一つとみられる。溝は北(N - 21° - E)に向いた後、北東(N - 66° - E)に方向を変える。幅0.75～0.95m、深さ8～11cmで、基底面は北(8.178m)から南(7.998m)に向って緩やかに傾斜し、12.30mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土は褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片10点、瓦器片2点、青磁片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD - 16

調査区南東端部で検出した南北溝跡で、SD - 15と並走し、南東ブロックの東の区画溝の一つとみられる。溝は北(N - 22° - E)に向いた後、北東(N - 79° - E)に方向を変える。幅0.32～0.63m、深さ9～17cmで、基底面は北端が8.108m、南端が8.133mとほぼ平坦で、11.70mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土は褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片5点、瓦器片1点、備前

焼1点,青磁1点がみられ,備前焼1点(119)と青磁1点(120)が図示できた。

出土遺物

備前焼 (Fig.81 - 119)

119は擂鉢で,底部の一部が残存し,底径12.8cmを測る。内面は回転ナデ調整で,10本単位の条線が2ヵ所に残り,外面はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み,焼成は良好で,色調は,内面が灰色,外面が褐色を呈する。

青磁 (Fig.81 - 120)

120は龍泉窯系の碗で,底部と体部の約1/3が残存し,底径5.1cmを測る。底部は削り出し高台で,内面から高台外面にかけて灰オリーブ釉を施す。胎土には黒色砂粒をわずかに含み,露胎部分の焼成が不良で黄褐色を呈する以外焼成は良い。

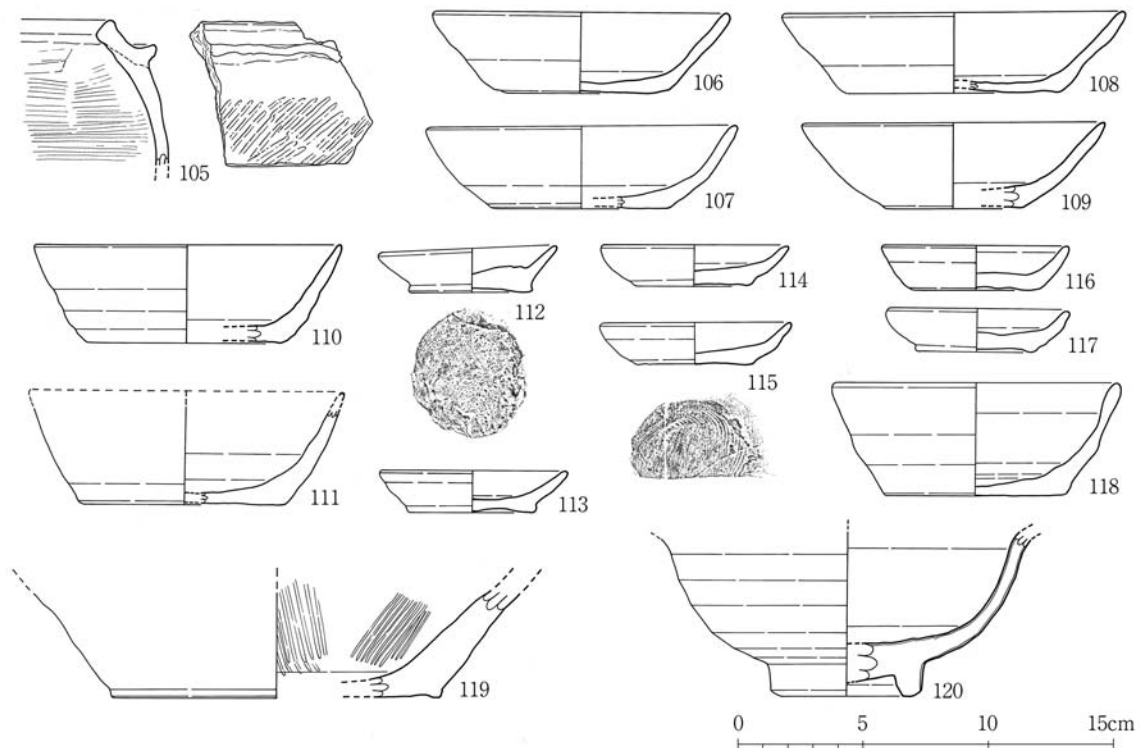


Fig.81 SD - 10 ~ 12・16出土遺物実測図

SD - 17

調査区東部中央で検出した東西溝跡(N - 88° - W)で,SD - 9の南側を並走し,SD - 9同様に南東ブロックの北側の区画をなすとみられる。幅0.55 ~ 1.05m,深さ0.21 ~ 0.24mで,基底面は東(8.048m)から西(7.988m)に向って緩やかに傾斜する。検出長は31.10mを測る。断面は舟底形ないし逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片約100点,瓦器片5点,東播系須恵器片1点,白磁片1点,青磁片1点がみられたが,図示できるものはなかった。

SD - 18

調査区東部南端で検出した東西溝跡(N - 83° - E)である。幅0.45 ~ 1.20m,深さ0.25 ~ 0.27mで,基底面は西端が8.038m,東端が8.037mとほぼ平坦で,検出長は6.15mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には須恵器片2点,土師質土器片35点,瓦

器片3点,青磁片2点がみられたが,図示できるものはなかった。

ピット

多くは建物跡等の復元には至らなかったが柱穴とみられるもので,柱痕が遺存していたものや石の礎板を検出したものもある。掘方は円形で,径20~50cm,深さ20~40cmを測る。埋土は第 層の褐色粘土質シルトを主体とし,検出面となっている第 層のにぶい黄褐色シルトのブロックや土粒を含むものであった。

出土遺物

緑釉陶器 (Fig.82 - 121)

121は椀で,底部の一部が残存し,底径7.3cmを測る。外底面には高さ0.8cmの高台が付く。器面には淡緑色釉を施し,高台下半を釉ハギする。胎土は精良で,焼成は良く,色調は内外面ともオリーブ灰色を呈する。(P - 1出土)

土師質土器 (Fig.82 - 122~137・Tab.16)

122~127は杯で,成形にはA技法(122~125)とB技法(126~127)がみられ,122・126・127は軟質となる。調整は基本的に回転ナデ調整で,125は内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは,124・126・127が摩耗するため不明である以外,回転糸切りで,後に125はハケ調整を加える。122は底部の浅い,皿に近いもので,口縁部は123と同じく外上方にほぼ真直ぐ上がる。124・125は口縁部が体部から内湾気味に上がるものである。126は口縁部が外上方にほぼ真直ぐ上がり,口縁部に強い回転ナデ調整を施すものである。127は底部が深いものである。

128~136は小皿で,成形にはA技法(128~134)とB技法(135~136)がみられ,焼成が還元焼成炎によるのではないかとみられるもの(131~133)と軟質なもの(135・136)があり,133は口縁部と体部に焼成時の歪みと火膨れがみられる。調整は基本的に回転ナデ調整で,128・132・135は内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで,132は後でハケ調整を加える。胎土は,軟質な135・136は精良で砂粒をほとんど含まないのに対し他の個体は砂粒を比較的多く含む。

137は羽釜で,口縁部の一部が残存し,口径17.0cmを測る。口縁部は内方へ内湾し,外面には断面台形の鐳が巡る。口縁部はヨコナデ調整で,鐳下半には煤が付着する。胎土には砂粒を多く含み,焼成は良好で,色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。(122はP - 2,123はP - 3,124はP - 4,125はP - 5,126はP - 6,127はP - 7,128はP - 8,129はP - 9,130はP - 10,131はP - 11,132はP - 12,133はP - 13,134はP - 14,135はP - 15,136はP - 16,137はP - 17から出土)

Tab.16 ピット出土土師質土器法量表

番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
122	12.0	2.6	6.4
123	12.2	3.3	6.1
124	12.0	3.7	7.3
125	11.6	3.6	7.4
126	10.1	3.2	6.6
127	11.1	4.4	7.0
128	8.4	1.8	5.4
129	7.6	1.6	4.2
130	7.4	1.5	4.4
131	7.6	1.3	6.2
132	6.4	1.8	4.7
133	7.7	1.8	5.0
134	8.4	1.8	5.0
135	7.2	1.5	6.1
136	7.2	1.8	5.2

瓦器 (Fig.82 - 138・139)

138は椀で、ほぼ完存し、口径13.4cm、器高4.3cm、底径4.1cmを測る。底部が平らで、外面には断面三角形の小さな高台が付き、体部から口縁部は内湾して上がる。口縁部と内面はヨコナデ調整で、内面には連結輪状と平行のヘラ磨きを施し、体部外面には指押えの痕が残る。胎土には砂粒をわずかに含み、焼成は良く、色調は全体的に灰白色を呈するものの口唇部は炭素の吸着が悪く黄橙色を呈する。(P - 14出土)

139は小皿で、約1/3が残存し、口径9.4cm、器高2.0cmを測る。底部はほぼ平らで、体部は内湾し、口縁部は外上方を向く。口縁部と内面にはヨコナデ調整、体部外面には指押え、外底面にはナデ調整を施す。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良いが、色調は灰白色以外に灰黄色を呈する部分がみられる。(P - 18出土)

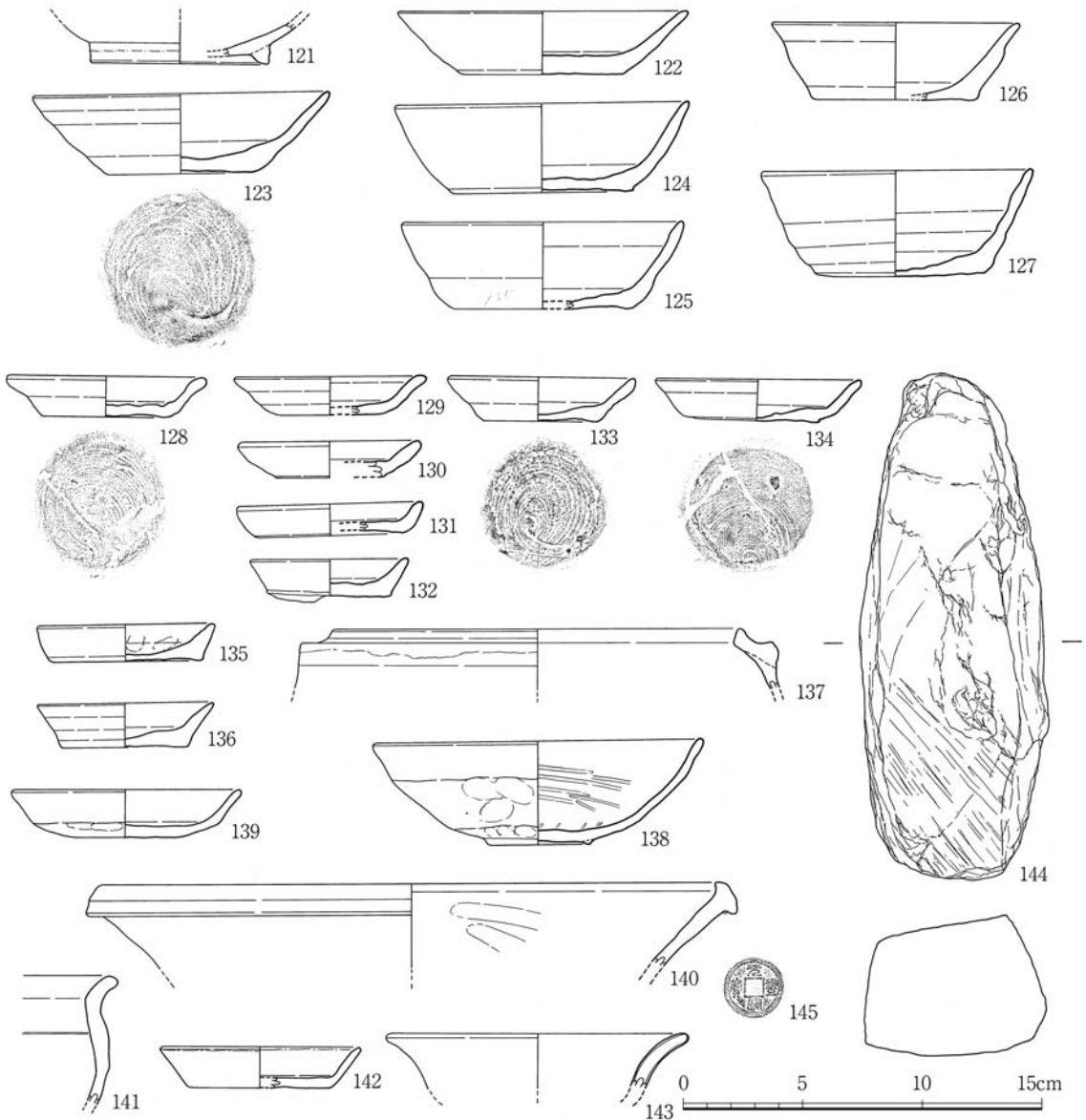


Fig.82 ピット出土遺物実測図

東播系須恵器 (Fig.82 - 140)

140は片口鉢で、口縁部の一部が残存し、口径25.8cmを測る。口縁部は斜め外上方にのび、端部を上下に肥厚する。口縁部は回転ナデ調整で、内面に2ヵ所指ナデ調整の痕が残る。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。(P - 5出土)

瓦質土器 (Fig.82 - 141)

141は鍋で、口縁部と胴部の一部が残存する。口縁部は内湾する胴部から外反し、端部は丸い。口縁部にはヨコナデ調整、内面にはナデ調整を施し、外面は未調整となる。胎土には砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で、色調は、内面が灰白色、外面が黄灰色を呈する。(P - 19出土)

白磁 (Fig.82 - 142)

142は皿で、約1/5が残存し、口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.8cmを測る。底部は平らで、体部は外上方を向き、口縁部は小さく外傾する。器面には白磁釉を施し、口唇部を釉ハギする。胎土は精良で、黒色粒を比較的多く含み、焼成は良好で、色調は内外面とも明オリーブ灰色を呈する。(P - 20出土)

青磁 (Fig.82 - 143)

143は杯で、口縁部の一部が残り、口径12.2cmを測る。口縁部は外反し、器面には厚さ約0.5mmの青磁釉を施す。胎土は精良で、黒色粒をわずかに含み、焼成は良好である。(P - 21出土)

石製品 (Fig.82 - 144)

144は砥石で、部分的に欠損するが、ほぼ完存し、全長21.0cm、全幅7.8cm、全厚5.8cm、重量1,380gを測る。石材は細粒砂岩で、4面に使用痕が残る。(P - 22出土)

古銭 (Fig.82 - 145)

145は篆書の元豊通寶で、北宋(1078年)銭である。全体に錆化がみられるものの銭径2.5cm、内径2.1cmを測る。(P - 19出土)

(2) 近世**掘立柱建物跡**

調査区東端部で2棟の建物跡を復元した。調査区東端部には特に近世の遺構が目立つ。なお、埋土は基本的に第 層の灰黄褐色シルトを主体とし、第 層の褐色粘土質シルトと第 層のにぶい黄褐色シルトの土粒やブロックを含むものであった。

SB - 55 (Fig.83)

調査区東端部で確認した梁間1間(2.30m)、桁行2間(3.30m)の南北棟建物で、SB - 56と重なっている。棟方向はN - 3° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が2.30mで、桁行(南北)が1.40mと1.90mである。柱穴は比較的大きく径60~100cmの円形で、柱径は20~30cmとみられる。出土遺物には土師質土器片3点、青磁片1点、肥前系磁器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SB - 56 (Fig.84)

調査区東端部で確認した梁間2間(3.70m)、桁行2間(4.00m)の南北棟建物で、SB - 55と重なっている。棟方向はN - 2° - Eである。柱間寸法は梁間(東西)が

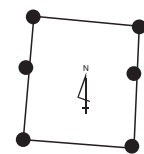


Fig.83 SB - 55

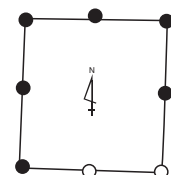


Fig.84 SB - 56

1.80mと1.90mで、桁行(南北)が1.90mと2.10mである。柱穴は径60～100cmの円形で、柱径は30～40cmとみられる。出土遺物には土師質土器片17点、瓦器片2点、瓦質土器片1点、肥前系磁器片4点、近世陶器片2点、土製品片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

Tab.17 近世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模					面積 (m^2)	棟方向 (NはGN)	備考	
	梁間 × 桁行	梁間(m) × 桁行(m)		柱間寸法					
				梁間(m)	桁行(m)				
SB-55	1×2	2.30	×	3.30	2.30	1.40・1.90	7.59	N-3°-E	
SB-56	2×2	3.70	×	4.00	1.80・1.90	1.90・2.10	14.80	N-2°-E	

土坑

SK - 17

調査区西端で検出した不整形の土坑で、一部調査区外へ続く。長辺4.32m、短辺2.50m以上、深さ0.59mを測り、長軸方向はN - 16° - Wで、断面は概ね逆台形を呈する。埋土は3層に分層でき、1層が褐色砂質シルト、2層がにぶい黄褐色シルト質砂が混じる黄褐色シルト質砂、3層がにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片20点、瓦器片1点、砥石1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 18

調査区西端で検出した不整形の土坑である。長辺2.15m、短辺1.95m、深さ0.64mを測り、長軸方向はN - 71° - Wで、断面は舟底形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK - 19

調査区西部で検出した不整形の土坑で、東側に一段深い落ち込みとなる。長辺2.46m、短辺2.00m、深さ1.04mを測り、長軸方向はN - 89° - Wで、断面は概ね逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト質砂を基調とし、オリーブ褐色砂や褐色シルト質砂が混じっていた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片3点、瓦器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 20

調査区西部で検出した不整形の土坑で、底面からSB - 2・3の柱穴を検出した。長辺2.60m、短辺1.62m、深さ13cmを測り、長軸方向はN - 2° - Wで、断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片20点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 21

調査区西部で検出した不整形の土坑で、SK - 6を切っている。長辺3.05m、短辺2.10m、深さ0.24mを測り、長軸方向はN - 74° - Eで、断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片30点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 22

調査区中央部西寄りで検出した不整形の土坑である。長辺4.90m,短辺4.05m,深さ0.87mを測り,長軸方向はN - 89° - Eで,断面は逆台形を呈する。埋土は4層に分層でき,1層が明赤褐色シルトが混じる灰黄褐色シルト,2層が灰黄褐色砂質シルト,3層が褐色シルト,4層がにぶい黄褐色シルトとなっていた。出土遺物には須恵器片5点,土師質土器片40点,瓦器片5点,近世陶磁器片20点,鉄片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 23

調査区中央部西寄りで検出した舟形状をなす土坑である。長辺3.45m,短辺1.58m,深さ13cmを測り,長軸方向はN - 86° - Wで,断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片40点,瓦器片5点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 24

調査区中央部南端で検出した円形の土坑で,SK - 25に切られる。径2.00m,深さ0.42mを測り,2段掘りとなり,断面は逆台形を呈する。埋土は3層に分層でき,上層から炭化物を含むにぶい黄褐色シルト,にぶい黄褐色シルト,鉄分を含むにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点,土師質土器片5点,青磁片1点,瀬戸・美濃系陶器片1点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 25

調査区東部北側で検出した円形の土坑で,SK - 24を切っている。径2.15m,深さ0.54mを測り,断面は逆台形を呈する。埋土は3層に分層でき,上層から炭化物を含むにぶい黄褐色シルト,にぶい黄褐色シルト,灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点,常滑焼片1点,近世陶磁器片6点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 26

調査区東部北側で検出した円形の土坑で,SD - 12を切っている。径2.30m,深さ12cmを測り,断面は逆台形を呈し,壁に沿って幅0.30m,深さ16cmの溝を設けている。埋土は2層に分層でき,上層から灰黄褐色シルト,にぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片20点がみられたが,復元図示できるものはなかった。

SK - 27

調査区東部北側で検出した不整形の土坑で,SD - 12を切っている。長径1.50m,短径1.30m,深さ1.12mを測り,長軸方向はN - 7° - Wで,断面は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルトのブロックを多量に含む灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片40点,瓦器片5点,近世陶磁器片5点がみられ,土師質土器2点(146・147)が図示できた。

出土遺物**土師質土器** (Fig.85 - 146・147)

146は杯で,約1/3が残存し,口径11.4cm,器高3.3cm,底径6.4cmを測る。成形はA技法で,体部は内湾気味に上がり,口縁部は上外方を向く。器面は回転ナデ調整で,底部の切り離しは回転糸切りによる。胎土は砂粒を比較的多く含み,焼成はやや不良で,内外面ともにぶい橙色を呈する。147は

小皿で、約1/3が残存し、口径7.4cm、器高1.5cm、底径4.4cmを測る。成形はA技法で、内底面に粘土紐巻き上げの痕跡が残る。底部はややベタ高台状をなし、切り離しは回転糸切りによる。

SK - 28

調査区東端部で検出した不整形の土坑で、SK - 29を切っている。長径2.31m、短径2.00m、深さ0.26mを測り、長軸方向はN - 15° - Eで、断面は舟底形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片2点、東播系須恵器片1点、青磁片1点、近世陶磁器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 29

調査区東端部で検出した不整形の土坑で、SK - 28に切られている。長径約2.20m、短径1.50m以上、深さ16cmを測り、長軸方向はN - 15° - Eで、断面は舟底形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK - 30

調査区南東端で検出した隅丸方形の土坑で、SK - 31に切られている。長辺6.05m、短辺3.00m、深さ0.21mを測り、長軸方向はN - 79° - Eで、断面は逆台形を呈する。埋土は炭化物を含む褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片15点、瓦器片2点、青磁片3点、染付片2点、肥前系陶器片1点、近世磁器片1点、砥石1点がみられ、土師質土器1点(148)、石製品1点(149)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.85 - 148)

148は小皿で、口径6.0cm、器高1.4cm、底径3.9cmを測る。成形はA技法で、軟質である。底部の切り離しは回転糸切りで、ナデ調整を加える。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まず、焼成はやや不良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

石製品 (Fig.85 - 149)

149は砥石で、両端が欠損し、残存長6.1cm、全幅1.7cm、全厚1.1cmを測る。石材は細粒砂岩で、4面に使用痕が残る。

SK - 31

調査区南東端で検出した方形の土坑で、SK - 30・32を切っている。長辺約3.20m、短辺2.00m、深さ0.58mを測り、北側に径0.93m、深さ0.66mを測る円形の掘り込みがある。長軸方向はN - 7° - Eで、断面は逆台形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片6点、瓦質土器片1点、近世陶磁器片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 32

調査区南東部で検出した不整形の土坑で、多数の遺構を切っている。長辺5.40m、短辺5.05m、深さ0.24mを測り、長軸方向はN - 86° - Eで、断面は逆台形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片42点、瓦器片5点、瓦質土器片1点、備前焼片1点、青磁片6点、染付片1点、肥前系磁器片3点、瀬戸・美濃系陶器1点、近世陶磁器片8点、

鉄製品1点,砥石1点などがみられ,土師質土器1点(150),備前焼1点(151),瀬戸・美濃系陶器(152),鉄製品(153),石製品1点(154)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.85 - 150)

150は羽釜で,口縁部と胴部の一部が残存し,口径20.6cmを測る。胴部は内湾し,口縁部はそのまま内上方を向く。口縁部外面には断面台形の鏝が巡る。口縁部にはヨコナデ調整,内面にはナデ調整,外面には平行のタタキを施す。胎土には砂粒を多く含み,焼成は良好で,色調は内外面とも橙色を呈する。

備前焼 (Fig.85 - 151)

151は播鉢で,口縁部と体部の一部が残存し,口径26.8cmを測る。体部は外上方に上がり,口縁部は上下に肥厚される。器面は回転ナデ調整で,内面には7本単位の条線が残る。胎土には白色砂粒を多く含み,焼成は良好で,色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.85 - 152)

152は天目茶碗で,口径10.0cm,器高7.7cm,底径4.0cmを測る。底部は削り出し高台で,体部は上外方へほぼ真直ぐ上がり,口縁部は真上に上がる。体部外面から内面にかけて鉄釉を施し,底部外面は無釉である。胎土には砂粒を比較的多く含み,焼成は良好で,釉調は黒褐色を呈し,生地は灰黄色を呈する。

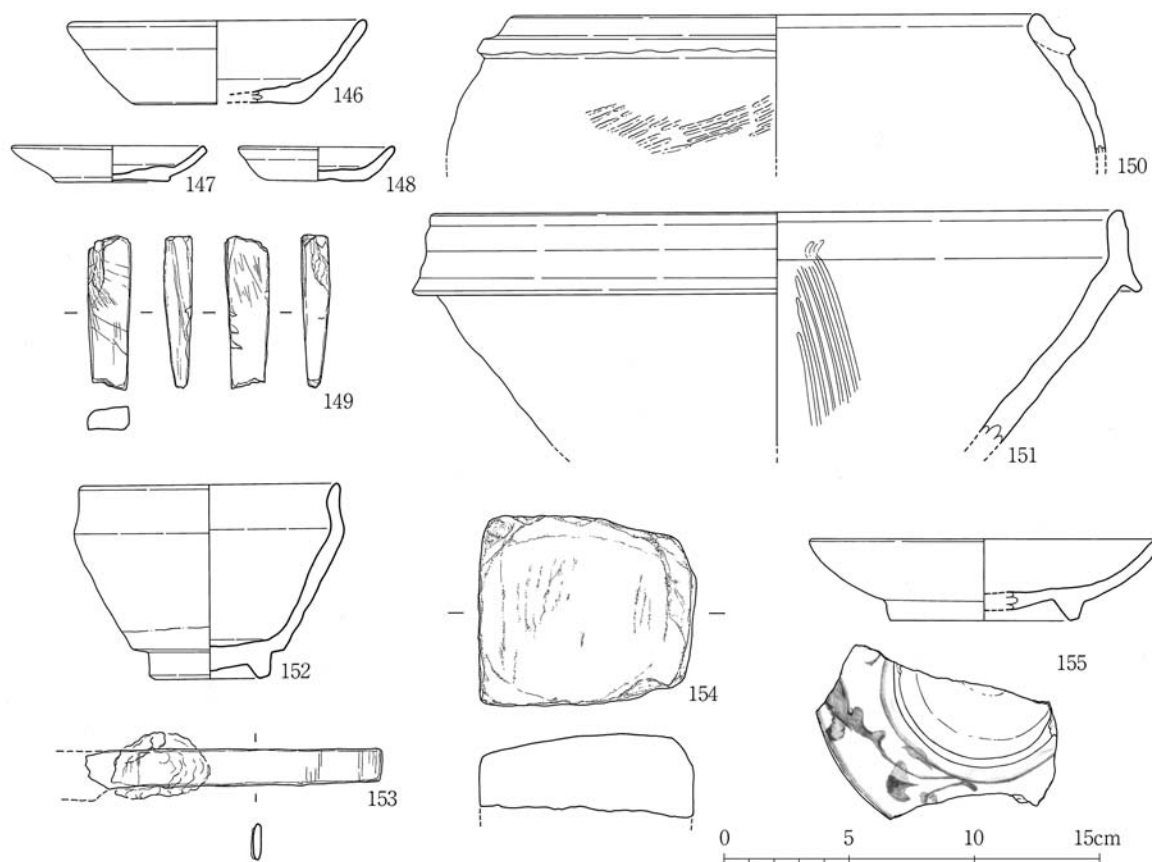


Fig.85 SK - 27・30・32・33出土遺物実測図

鉄製品 (Fig.85 - 153)

153は刀子で、関と茎が残存し、残存長11.8cm、茎長9.6cm、茎幅4.0cm、茎厚1.4cmを測る。茎は鉄で、薄い青銅板で覆い、さらにその上を布で巻いたものとみられる。

石製品 (Fig.85 - 154)

154は砥石で、一部が残存し、全幅8.5cmを測る。石材は中流砂岩で、2面に使用痕が残る。

SK - 33

調査区南東部で検出した不整形の土坑で、多数の遺構を切っており、SK - 32と関連することも考えられる。長辺3.50m以上、短辺2.00m、深さ11cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を示し、断面は逆台形を呈する。埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片20点、常滑焼片1点、染付片1点、肥前系陶器1点などがみられ、肥前系陶器1点(155)が図示できた。

出土遺物

肥前系陶器 (Fig.85 - 155)

155は皿で、約1/4が残存し、口径13.9cm、器高3.2cm、底径7.4cmを測る。底部は削り出し高台で、口縁部は、内湾する体部からそのままのびる。口縁部内外面に各2条の界線と体部外面に唐草文が施される。体部外面と内面に白色釉を施し、見込は釉ハギを行う。胎土はやや粗で、焼成は不良となり、釉調は灰色をなし、生地は浅黄橙色を呈する。

SK - 34 (Fig.86)

調査区南東部で検出した円形の土坑で、SD - 10の南端とSD - 17を切っている。径1.96m、深さ0.28mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は5層に分層され、1層が鉄分・マンガン粒を含むにぶい黄褐色シルト、2層が鉄分・マンガン粒を少量含むにぶい黄褐色シルト、3層がマンガン粒を含むにぶい黄褐色シルト、4層が褐色シルト、5層がオリーブ褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点、近世陶器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

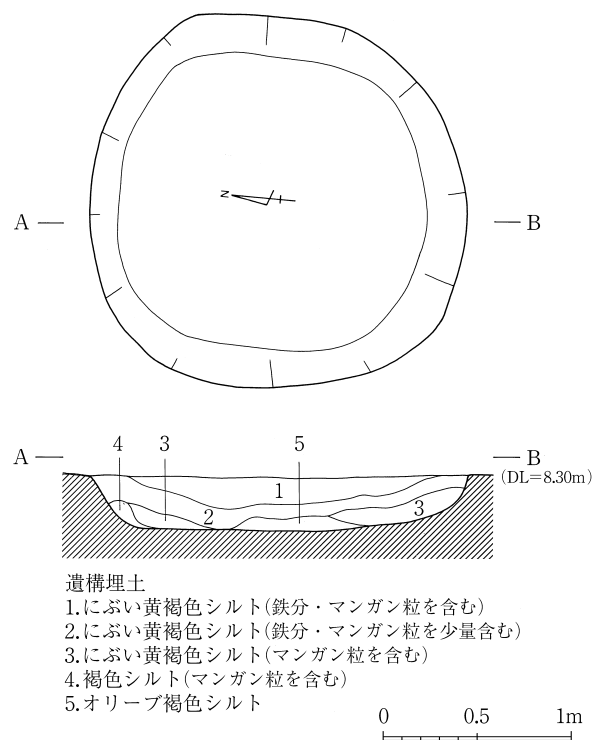


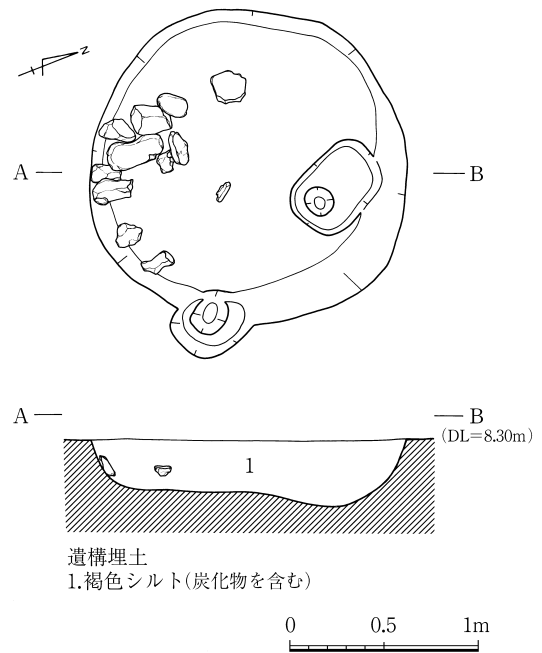
Fig.86 SK - 34

SK - 35

調査区南東部で検出した方形の土坑で、SD - 17を切っている。長辺1.86m、短辺1.45m、深さ0.45mを測り、長軸方向はN - 85° - Wで、断面は逆台形を呈する。埋土は2層に分層され、上層が灰黄褐色シルト、下層が灰黄褐色粘土であった。出土遺物には土師質土器片15点、瓦器片1点、近世陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK - 36 (Fig.87)

調査区南東部で検出した不整形の土坑である。径1.65m , 深さ0.33mを測り , 断面は逆台形を呈する。埋土は炭化物を含む褐色シルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片20点 , 近世陶器片2点 , 軽石1点 , 鉄滓片10点などがみられたが , 復元図示できるものはなかった。



溝跡

SD - 19

調査区北西部で検出した東西溝跡(N - 86° - E)である。幅0.44 ~ 0.64m , 深さ5cmで , 基底面は東が8.072m , 西が8.049mとほぼ平坦で , 検出長は7.88mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シ

Fig.87 SK - 36

Tab.18 近世土坑計測表

遺構番号	平面形	規 模			長軸方向 (NはGN)	時代	備考
		長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)			
SK-17	不整形	4.32	(2.50)	0.59	N-16°-W	近世	
SK-18	不整形	2.15	1.95	0.64	N-71°-W	〃	
SK-19	不整形	2.46	2.00	1.04	N-89°-W	〃	
SK-20	不整形	2.60	1.62	0.13	N-2°-W	〃	
SK-21	不整形	3.05	2.10	0.24	N-74°-E	〃	
SK-22	不整形	4.90	4.05	0.87	N-89°-E	〃	
SK-23	舟形状	3.45	1.58	0.13	N-86°-W	〃	
SK-24	円形	2.00	-	0.42	-	〃	
SK-25	円形	2.15	-	0.54	-	〃	
SK-26	円形	2.30	-	0.12	-	〃	
SK-27	不整形	1.50	1.30	1.12	N-7°-W	〃	
SK-28	不整形	2.31	2.00	0.26	N-15°-E	〃	
SK-29	不整形	2.20	(1.50)	0.16	N-15°-E	〃	
SK-30	隅丸方形	6.05	3.00	0.21	N-79°-E	〃	
SK-31	方形	3.20	2.00	0.58	N-7°-E	〃	
SK-32	不整形	5.40	5.05	0.24	N-86°-E	〃	
SK-33	不整形	(3.50)	2.00	0.11	N-0°-E	〃	
SK-34	円形	1.96	-	0.28	-	〃	
SK-35	方形	1.86	1.45	0.45	N-85°-W	〃	
SK-36	不整形	1.65	-	0.33	-	〃	

ルト単一層であった。出土遺物には土師質土器片20点、瓦器片3点、近世陶器片1点、釘片1点、鉄滓片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

註

- (1) 掘り返し等で機能した期間が比較的長いと考えられる溝跡などの埋没時期は16世紀後半から17世紀初頭となっているものもみられるが、遺構の存続時期は中世が中心であるため、ここでは中世の範疇に含め記述した。
- (2) 土層断面では上下2層に分層できる箇所もあったが、明確にそれを平面で捉えることができず、実際、調査では2回に分けて遺構検出を行ったが、明らかに上面の遺構の掘り残しであると判断される遺構が一定認められたことから本報告では一括して報告した。
- (3) 今回の調査地区とは県道39号土佐伊野線を挟んで東側の調査地区で、平成14年度も調査を行う予定になっている。

第 章 自然科学分析

- 野田遺跡の和鏡出土土坑に関する自然科学調査 -

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の野田遺跡の発掘調査では、和鏡が埋納された土坑が検出された。本土坑は土坑の性格や出土遺物の性格等から埋葬施設であった可能性が高いと考えられている。そこで今回の調査では、本土坑内にヒトを含む動物遺体が埋納されていたかを検証することを目的として、動物体に多く含有されるリン酸含量を測定するリン分析を実施した。

1. 試料

分析した試料は、土坑SK - 1周囲および土坑埋土から採取された土壌12点である。試料の詳細は結果とともにTab. 19に示す。

2. 分析方法

測定は土壤養分測定法委員会(1981)などを参考に、硝酸・過塩素酸分解 - バナドモリブデン酸比色法で行った。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させ、風乾細土試料とする。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃, 5時間)により測定する。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて、再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。

測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P_2O_5 mg/g)を求める。

3. 結果

結果をTab. 19に示す。対象とした埋土試料の土性は粘土分が多い重埴土である。土色は、いずれも黄褐色であり、黒色味が弱いことから、土壤腐植の混入が少ないことが窺える。

土坑埋土のリン酸含量は、下部(試料番号8・9・10)や掘り込み内部(試料番号11)で、周囲や上部の試料よりも概して高い。

4. 考察

今回の土坑埋土や土坑周囲の土壌の土性は、粘土分が多い重埴土に区分された。重埴土は、砂質な土壌に比較して潜在的な成分保持能力が高く、動物遺体が埋納されていた場合には遺体成分が残留し易い土壌といえる。今回の場合、全試料が重埴土と同じ土性であったことから、土性の面で

Tab.19 SK - 1のリン分析結果

試料番号・位置	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)
1 土坑の周囲	HC	2.5Y5/3 黄褐	1.36
2 土坑埋土の上部	HC	2.5Y5/3 黄褐	1.66
3 土坑の周囲	HC	2.5Y5/3 黄褐	1.43
4 土坑の周囲	HC	2.5Y5/3 黄褐	1.44
5 土坑埋土の上部	HC	2.5Y5/3 黄褐	1.91
6 土坑埋土の上部	HC	2.5Y5/3 黄褐	1.94
7 土坑埋土の上部	HC	2.5Y5/3 黄褐	1.92
8 土坑埋土の下部	HC	2.5Y5/3 黄褐	2.09
9 土坑埋土の下部	HC	2.5Y5/3 黄褐	2.51
10 土坑埋土の下部	HC	2.5Y5/3 黄褐	2.22
11 土坑底部の掘り込み内部	HC	2.5Y5/3 黄褐	3.20
12 土坑直下の地山	HC	2.5Y5/3 黄褐	2.42

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。

土性：土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。

HC：重埴土(粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~55%)

は試料間で成分保持能力に大きな違いがないことが窺えるが、土壌の構造、地下水位の影響などによる残留率の違いは充分考えられる。一方、現在の土壌に含まれるリン酸含量(いわゆる天然賦存量)については、Bowen(1983)・Bolt・Bruggenwert(1980)・川崎ほか(1991)・天野ほか(1991)によると、約3.0P₂O₅mg/g程度と推定される(各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP₂O₅mg/gで統一してある)。また、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5P₂O₅mg/gとの報告もある(川崎ほか,1991)。過去の堆積物では、当社の分析例で骨片などの痕跡が認められる土壌において6.0P₂O₅mg/gを超える場合が確認されている。ここでは、以上のことを考慮しながら、今回の結果について検討する。

今回の土坑埋土試料中のリン酸含量値は、現在の表層土壌中のリン酸含量値と比較して、ほぼ同等か低い値となっており、極端なリン酸の富化は確認されなかった。ただし、過去の土壌(古土壌)の場合、経年変化の過程で成分が溶脱し、当時の値より低くなることが推定されること、当時の表土に近い対象試料とした土壌試料の値が土坑覆土上部の値と比較して同等であったことから、残留成分の相対的傾向を捉えることが必要と考える。

土坑埋土中のリン酸含量は埋土下部で高く、上部で低くなる傾向を示した。特に土坑底部の掘り込み内部では埋土上部に比較して、2倍の含量値を示した。また、上記したように土坑埋土上部の測定値が土坑周囲の土壌のリン酸含量値とほぼ等しかった。これらのことは、土坑埋土下部にはリン酸が富化する何らかの要因が加わっていることを示唆している。また、埋土下部試料間でもリン酸含量値に多少のパラッキがあり、掘り込み部分で高くなる傾向がある。このことはリン酸の富化が掘り込み部で顕著であることを示唆している。このような土坑内におけるリン酸富化の原因の一つとして、土坑内に動・植物遺体を取り込まれていた可能性が考えられる。本遺構の性格として、考古

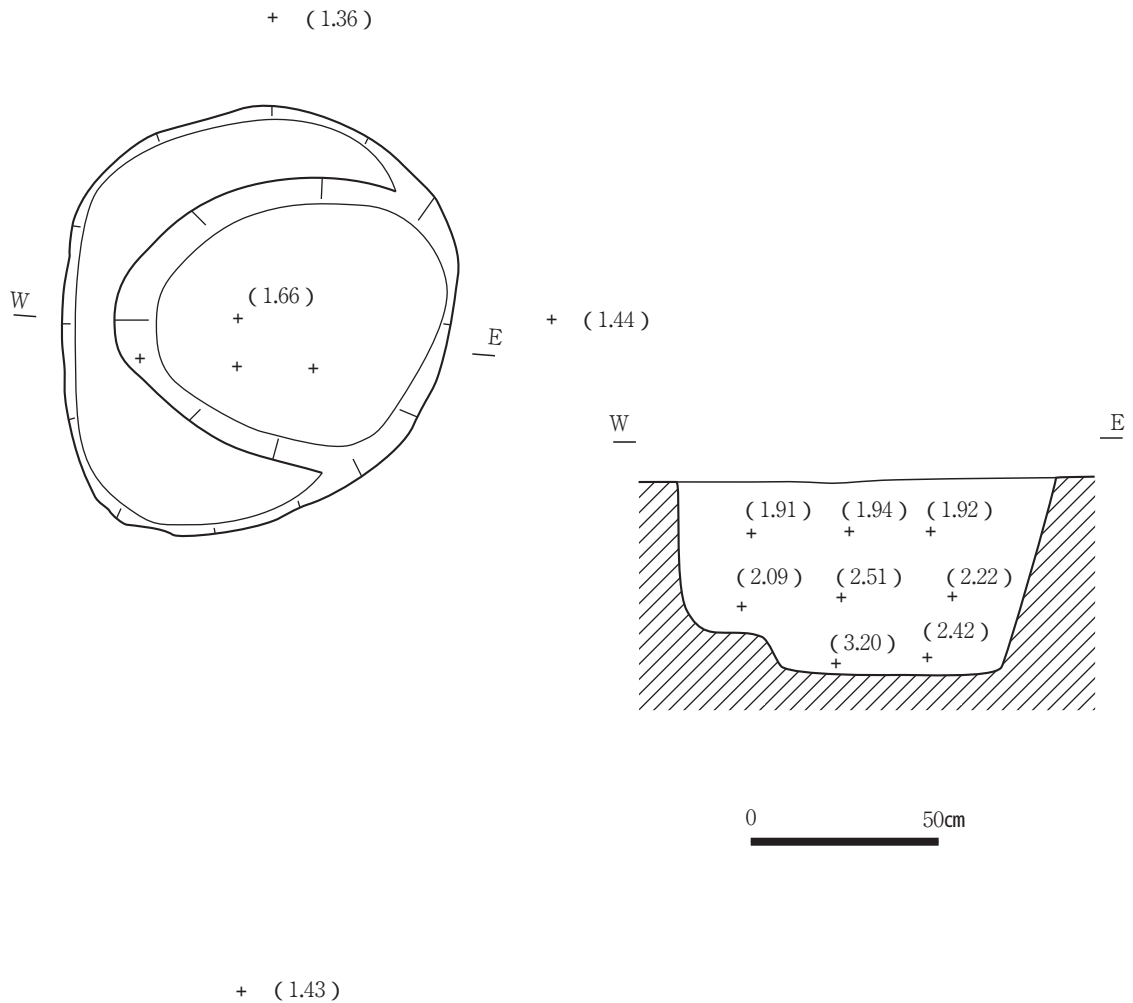


Fig.88 試料採取位置とリン酸含有量(カッコ内の数字は,単位:P₂O₅mg/g)

学調査成果から埋葬施設の可能性が考えられているが,今回の結果は積極的に指示することはできないが,矛盾する結果ではないといえる。

引用文献

天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」,p.28-36.

Bowen,H.J.M.(1983)環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -.浅見輝男・茅野充男訳,297p.,博友社 [Bowen,H.J.M.(1979)Environmental Chemistry of Elements].

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.(1980)土壌の化学.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳,学会出版センター[Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY], p.235-236.

土壌養分測定法委員会編(1981)土壌養分分析法.440p.,養賢堂.

川崎 弘・吉田 澁・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」,p.23-27.

京都大学農学部農芸化学教室編(1957)農芸化学実験書 第1巻.411p. ,産業図書.

農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会(1984)野外土性の判定.ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」,p.39-40.

第 章 考 察

今回の調査では、中世の屋敷に関連する遺構と近世の遺構を確認することができた。中世の屋敷跡は調査区全域に亘っており、屋敷を区画すると考えられる溝跡の配置から大きく3ブロックに分れる。すなわち第 章で記したとおり、西ブロック、北東ブロック、南東ブロックの3ブロックで、三つの屋敷が存在したものと考えられる。西ブロックの屋敷跡は北側と西側を区画する溝跡等の確認には至っていないが、ほぼ屋敷全体が検出できたのではないかとみられる。一方、東側の2ブロックの屋敷跡は調査区中央部で検出した東西溝によって区画されており、西ブロックの屋敷地とほぼ同規模のものであればそれぞれ屋敷の半分が隣接地に遺存していることになる。

近世も中世同様に調査区全域に分布するものの、掘立柱建物跡2棟を復元した東部に遺構の密度が高くなっている傾向がみられる。

以下、各時代ごとにその概要をまとめてみたい。

1. 中世について

最初に遺構についてみてみることにする。検出された遺構は、掘立柱建物跡54棟、塀・柵列跡14列、土坑16基、溝跡18条と建物跡を復元することはできなかった多数の柱穴とみられるピットなどである。この内、重要となってくる遺構は溝跡で、前述したように区画をなすとみられるものが数条みられた。まず、調査区中央部で東西を区画するかのように南北に走るSD - 2を挙げることができる。溝の方向は西に約3度振っており、野田遺跡が立地する自然堤防の長軸(西に4度前後振る)にほぼ沿う形となっている。この溝により東西に区画され、SD - 2に取り付く形で検出した東西溝SD - 1とSD - 10により南北に区画される。SD - 10についてはSD - 2から東へ約8mのところからSD - 9が重複し、断面観察によるとSD - 9が新たに設置されており、SD - 10の付け替えとみることができる。これら4条の溝によって、3ブロックの屋敷が復元可能である。すなわち、SD - 1とSD - 2によって区画された西ブロック、SD - 2とSD - 10及びSD - 9によって区画された北東ブロックと南東ブロックである。因みに調査区周辺の自然堤防の南北幅は約200m^①で、この内当該期の遺構の密度が高いのは西側約150mとみられることから第. 調査地区の東側、丁度県道39号線が走る部分にもう1条南北に走る区画溝が存在する可能性もあり、この付近では東西3区画の屋敷になっていたものと推察される。

西ブロックの屋敷では、西側は自然堤防西端が屋敷の境をなしたものとみられ、平成7年度の試掘調査では遺構は確認されず、地形が落ち込んでいることが判明している。北側は屋敷を区画する遺構が未確認で、まだ一定拡がることも想定されるが、今回の調査区は屋敷の大半が含まれているのではないかとみられる。これによって想定される敷地は東西約40m、南北30~40mで面積は1,200~1,600m²となる。屋敷を構成する建物では、庇を持つSB - 1・2・6と規模の大きなSB - 5が中心的な建物とみられ、中でも南東側にある建物面積の広いSB - 5・6が母屋であった可能性が高い。これら建物は南側に集中しており、屋敷は北に面していたものと考えられる。

北東ブロックの屋敷では、東側と北側を区画する遺構が検出されていないが、西ブロックの屋敷

跡から推測すると東の境は屋敷の東端に当たるものと考えられ、東西幅は約45mとみられる。一方、北側には前述のとおり屋敷の約半分は残っているものとみられることから南北幅は少なくとも30mはあったのではなかろうか。屋敷を構成する建物では、南東側にあるSB - 22・28が最も建物面積が広く母屋であった可能性が高い。また、その両側にはSB - 18・19やSB - 29・30などの総柱建物が検出されており、母屋に隣接して倉庫が建てられていたものとみられる。このように南側に主だった建物跡が配置されていることからみれば、西ブロックの屋敷同様に北に面していたものと考えられる。

南東ブロックの屋敷では、東部で並走するSD - 15・16が東側の区画をなしていたのではないかとみられ、東西幅は西ブロックの屋敷と同じく約40mで、南側はさらに広がっているものとみられるが、南北幅は二つの屋敷の規模から推測するとほぼ同じ30～40mではないかと考えられる。屋敷を構成する建物では、SB - 36・45が他の建物に比べ一回り大きく、中心的な建物とみられ、母屋であった可能性が高い。中でもSB - 45は今回復元した中では最も大きな建物である。調査箇所が屋敷の北側に限られているものの建物が集中しており、北側が屋敷の中心部であるとみられ他の二つの屋敷とは異なり南に面していたのではなかろうか。

これら三つの屋敷で復元した建物は、単独のものが少なく、少なくとも数棟が重なり合っており、多いものではSB - 45などのように13棟と重なった建物もあり、長期間存続したことが考えられる。特に、南東ブロックの屋敷はそれが顕著である。また、建物の復元には至らなかったが柱穴とみられるピットも数多く残っており、建て替えが何度も行われたことが伺える。

一方、SD - 9などの溝の掘方からも溝も何度か拡張されたものとみられ、長期間使用されたことが考えられる。また、区画溝以外に、SD - 3～6など道の側溝ではないかとみられるものもある。丁度、調査区中央部は建物跡や土坑などの遺構が少なく、並走する南北溝が検出されており、屋敷とは異なる遺構配置を示していることから屋敷間を繋ぐ部分、すなわち道として機能した部分であったものと判断される。中でも方向を同じくするSD - 2とSD - 4またはSD - 5が東の側溝で、その間が道(SD - 2とSD - 4では道幅2.50～3.00m、SD - 2とSD - 5では道幅2.50～4.00m)であったものと考えられる。その際、SD - 2は側溝も兼用していたと考え、SD - 5は道の拡張の際の所産とみることができよう。SD - 2・4・5とは方向を異にするSD - 5とSD - 6も同様の機能を果たしていたのではなかろうか。SD - 2に取り付くSD - 10にSD - 5とSD - 6が切られていることから考えて、SD - 2に先行して区画も兼ねた道(道幅約3.50m)として機能していたものと考えられる。北東ブロックの屋敷でもSD - 12以東では側溝ではないかと考えられる溝がみられるものの調査範囲が限られかつ近世の遺構によって掘削されている部分が多く、判然としない。一方、南東ブロックの東ではSD - 9が北東に向きを換え、前述のSD - 15・16がそれに沿うかのように南側を並走しており、この約3m間が道として機能していた可能性も考えられる。ただし、この屋敷が南に面しているとなれば、裏口へ繋がることになる。

次に、これら遺構の時期についてみてみたい。これら中世の遺構から出土量に違いがあるにせよほぼどれからも土師質土器と瓦器^①が出土している。瓦器は、どれも和泉型のもので、在地産^②の可能性のあるものもみられ、12世紀後半から13世紀にかけてのものである。一方、SD - 2からは86の

東播系須恵器(片口鉢)のように12世紀末から13世紀初めのものから89の備前焼第、期の播鉢や90の常滑焼のように15世紀前半の甕がみられる。また、SD - 9からは100や101のように備前焼第 期の播鉢と103の16世紀後半の肥前系陶器(唐津焼)が出土している。さらに、これらの時期を通して最も一般的に使用された土師質土器についても製作技法や形態的にもバラエティーにとみ、移り変わりをみることができる。すなわち、粘土紐巻き上げ水挽成形(A技法)から粘土塊から一気に仕上げるロク口水挽成形(B技法)へと漸次的に移行している。形態的には12~16の杯のように口縁部が内湾気味に上がる傾向があるのに対し、17~22の杯のように口縁部が直線的に上がる傾向がみられる。これは正しく粘土塊から一気に仕上げた結果と言えるもので、器面に回転ナデ調整を加えたものから内面にロクロ目が明瞭に残るものがあり、これらは15~16世紀にかけての山城から出土するものと同じく製作過程の省略、形骸化とみられ、B技法での変遷と捉えることができる。

これらのことから屋敷は長期間に亘って存続し、その成立は西の自然堤防上にある光永・岡ノ下遺跡やさらに西の天神遺跡、林口遺跡と同じく12世紀後半ないし13世紀初めで、終焉は16世紀末とみられ、中世を通じて繁栄した屋敷であったと言えるであろう。

2. 和鏡について

伝世品として神社に奉納されたものや偶然発見されたもの⁴⁾はあるが、発掘調査によって出土した和鏡⁵⁾はなく、今回出土の山水双鳥鏡が初めてである。概要については第 章に記したとおりで、ここではその時期についてみてみたい。まず、周縁厚が1.0cmと高く、かつ周縁幅も0.4cmと比較的厚い作りであると共に文様表現も肉高な表現になっている。さらに、亀形鈕が鎌倉時代にみられるような亀甲文ではなく、菊花とみられる花文(花亀甲文)となっている。これらのことからすると室町時代、中でも14世紀後半から15世紀のもの⁶⁾とみることができよう。正に、屋敷の盛行期でもあり、時期的には合致する。屋敷の主の細君が使用していたものを死後、屋敷内に遺骸と共に副葬したのではなかろうか。なお、時期は異なるが、西に隣接する光永・岡ノ下遺跡のSK - 52⁷⁾には湖州方鏡が副葬されていた。

また、和鏡が出土したSK - 1の埋土についてはリン分析を行い、その結果は第、章で報告したとおりである。報告では自然科学の面から土坑墓であると積極的に指示される結果とはなっていないが、周辺部の堆積層が砂質ないし砂であることを考慮し、かつ遺構下部でリン酸値が高くなっていることは遺体が埋葬されていたことを反映しているのではなかろうか。これらの副葬品が出土することは、考古学的には埋葬施設である以外考え難い。

3. 近世について

散発的ではあるが調査区ほぼ全域に亘って遺構が遺存していた。検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、土坑20基、溝跡1条などであった。このうち、掘立柱建物跡は東端部に限られ、土坑はほぼ全域に分布していた。丁度、調査区から約10m東には野中兼山(1615~1663)によって造られたとされる用水路(中井筋用水)が南流している。自然堤防頂部に設置することにより効率良く水を供給したものとみられるが、設置場所が自然堤防上の最も高い場所であったため当時住人には少なから

ず影響を及ぼしたものと考えられる。検出された遺構も集落を構成していたとは言い難いもので、集落周辺の遺構と考えられる。これら遺構は出土した肥前系陶磁器や瀬戸・美濃系陶器などから17～18世紀にかけてのものとみられる。なお、近代の廃棄土坑とみられるものも一部で確認されている。

4. まとめ

これまでに発掘調査され、確認された屋敷跡は南国市田村遺跡群⁸⁾や佐川町岩井口遺跡⁹⁾などがある。田村遺跡群では確認された31カ所の屋敷跡(14世紀～17世紀初頭)の内、1,000㎡を越す敷地面積を有するものは16カ所あり、名主層の屋敷跡と考えられている。一方、岩井口遺跡は敷地面積2,025㎡で、その規模、建物構成から国人の館跡(13世紀中頃～15世紀初頭)とみられ、ホノギに「土井」の名が残っている。これらからすると今回検出された屋敷跡は、前者に近いものとみられ、名主層の屋敷であったものと考えられる。また、建物配置からみても国人の館のように企画的な構成とはなっておらず、田村遺跡群の屋敷跡に近いものと言えよう。

最後に、中世以前について少し触れてみたい。今回の調査では、古墳時代の須恵器や古代の須恵器・緑釉陶器なども出土しており、この屋敷に先行する遺構が隣接地に存在したものと考えられる。丁度、本年度実施した第 調査地区の発掘調査¹⁰⁾によって古代寺院の存在が明らかになった。しかし、伽藍配置やその性格など明らかにしなければならない問題が残っており、それらについては平成14年度以降に行うことになっている隣接部分の発掘調査によって解明されるであろう。西の自然堤防上に立地する光永・岡ノ下遺跡からも暗文のある土師器や緑釉陶器など8世紀中葉から9世紀にかけての遺物が出土し、周辺部に官衙関係施設の存在が考えられている。光永・岡ノ下遺跡の南約300mにある古代の須恵器窯犬ノ場窯跡の存在も重要で、野田遺跡第 調査地区から出土した瓦を焼いた窯も必ず近くに存在したはずであり、今後不明である高岡郡の郡庁と郡寺をも視野に入れて追及していかなければならないであろう。

註

- (1) 平成13年度実施した野田遺跡第 調査地区の調査の結果、第 調査地区東端から東に約100mのところから地形が急激に落ち込んでおり、平成7年度に実施した第 調査地区の西側の試掘結果と総合すると調査区付近の遺跡の幅、換言すれば自然堤防幅は約200mとみられる。さらに、第 調査地区東側約50mは遺構の密度が低く、当該期の遺構が集中するのは西側約2/3(約150m)である。
- (2) 土師質土器と瓦器の出土比率は概ね10対1である。
- (3) このことについては、佐川町上美都岐遺跡に始まり土佐市バイパスの一連の報告書(『光永・岡ノ下遺跡 - 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』・『天神遺跡 - 林口遺跡 - 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』・『天神遺跡 - 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』・『林口遺跡 - 蓮池城跡北面遺跡 - 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』)の中で指摘したことで、炭素の吸着が悪く赤褐色を呈する部分が多くみられ、和泉型の の後半から にかけてのタイプに似るが、概して腰が張り、暗文の数に比べて高台が比較的しっかりしている傾向がみられる。

- (4) 土佐神社に43面，大川村井野川字森一番地の地主神社に約40面，大川村南野山の春日神社に約100面など多数存在する。また，窪川町羽衣神社付近出土の和鏡などがある。(岡本健児『土佐の神道考古学』高知県神社庁1987年による。)
- (5) 日本で作られた日本的な意匠をもつ鏡で，平安時代後期，中でも11世紀末から12世紀初頭に成立した松・山吹・薄・菊などに尾長鶏・鶴・雀などの日本の自然風物に鏡の意匠に使用したものを言う。
- (6) 京都国立博物館主任研究官 久保智康氏の御教示による。
- (7) 『光永・岡ノ下遺跡』 - 土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 - 高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター 平成12年11月
- (8) 高知県教育委員会『田村遺跡群 - 高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』第10分冊 1986年
- (9) 廣田佳久「第 章 考察」『岩井口遺跡，二ノ部遺跡・城跡 - 佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 - 』佐川町教育委員会 1995年，廣田佳久「第 章 考察」『岩井口遺跡 - 県道本郷・斗賀野停車場線改良事業に伴う発掘調査報告書 - 』佐川町教育委員会 1995年など
- (10) 平成13年度に今回の調査地区と県道39号線を挟んだ東側(第 調査地区)の調査を実施し，瓦溜めや建物の復元までには至らなかったが礎石とみられる石列を検出している。隣接部を平成14年度以降調査することになっており，寺院跡が確認される可能性がある。

参考文献

佐藤虎雄『和鏡』一條書房 1944年

『日本の鏡コレクション - 和鏡 - 』館蔵資料15 大阪市立博物館 1988年

『鏡の美』 - 第6回企画展讃岐出土・伝来の和鏡を中心として - 高松市歴史資料館 1995年

久保智康 『日本の美術3 No.394 中世・近世の鏡』 至文堂 1999年

圖 版

主な撮影機材

1. 現場作業

Nikon F3 high-eyepoint × 2

Zoom-Nikkor 28 ~ 85mm F3.5 ~ F4.5S

Micro-Nikkor 55mm F2.8S

Mamiya 645 PRO

Mamiya-SEKOR MACRO 80mm F4

Mamiya-SEKOR Zoom 55 ~ 110mm F4.5

2. 整理作業

Nikon F4S

Micro-Nikkor 55mm F2.8S

Micro-Nikkor 105mm F2.8S

Mamiya RZ67 PRO

Mamiya-SEKOR M140mm F4.5m/L-A

Mamiya-SEKOR Z180mm F4.5W-N

オート中間リングRZ(No.1)

TOYO WEIGHT STAND81

COMET CX-124T

COMET CX-25 H × 2(ウェーハー・バンク付)



調査前風景(西より)



調査前風景(東より)

PL.2



調査区西部遺構検出状態(西より)



調査区西部遺構検出状態(東より)



調査区西部遺構完掘状態(西より)



調査区西部遺構完掘状態(東より)

PL.4



調査区東部遺構検出状態(西より)



調査区東部遺構検出状態(東より)



調査区東部遺構完掘状態(西より)



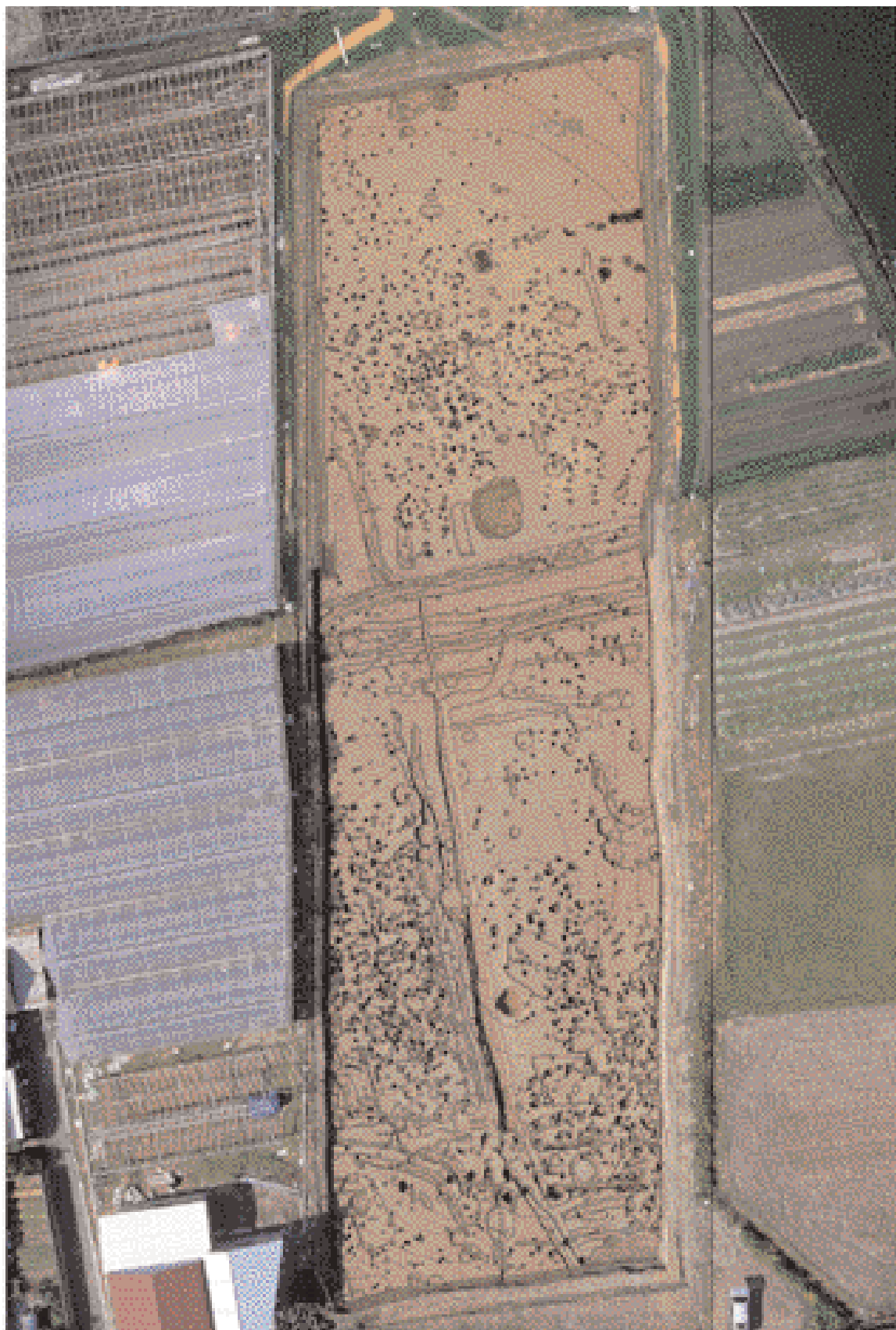
調査区東部遺構完掘状態(東より)



調査区西部遺構完掘状態(北上空より)



調査区東部遺構完掘状態(北上空より)



画像平面図(S=1/600)



調査区南壁セクション1(北より)



調査区南壁セクション2(北より)



SK - 1(東より)



SK - 1和鏡出土状態(北東より)

PL.10



SK - 10・11(南より)



SK - 14土師質土器(78・79)出土状態(西より)



SK - 17(北より)



SK - 26(東より)

PL.12



SK - 31(南より)



SK - 36集石検出状態(北より)



SD - 2(南より)



SD - 2(南より)

PL.14



SD - 3~5(南より)



SD - 8(南より)



SD - 9(西より)



SD - 9鉄製刀子(104)出土状態(西より)

PL.16



SD - 11(北より)



SD - 12(南より)



第 層瓦器(43)出土状態(南より)



SB - 2の柱穴礎板検出状態1(北より)



SB - 2の柱穴礎板検出状態2(北西より)



SB - 2の柱穴礎板検出状態3(南より)



SB - 7の柱穴礎板検出状態(東より)



SB - 36の柱穴礎板検出状態(南より)



SB - 55の柱穴礎板検出状態(南より)



SA - 10の柱穴礎板検出状態(東より)



SK - 8須恵器(75)出土状態(東より)



SK - 14土師質土器(80・81)出土状態(東より)



SD - 9瓦質土器(98)出土状態(北より)



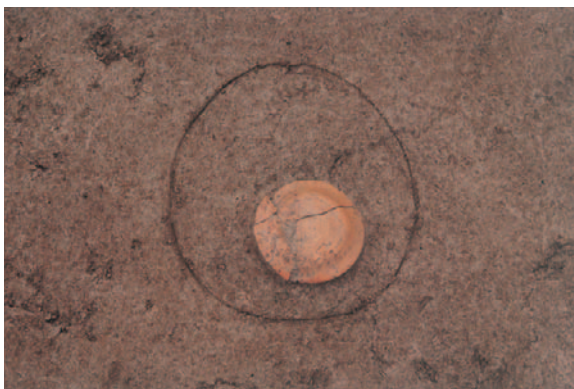
SD - 11土師質土器(112)出土状態(東より)



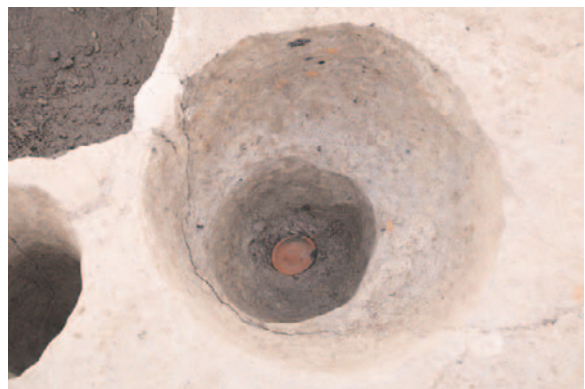
SD - 11土師質土器(114)出土状態(北より)



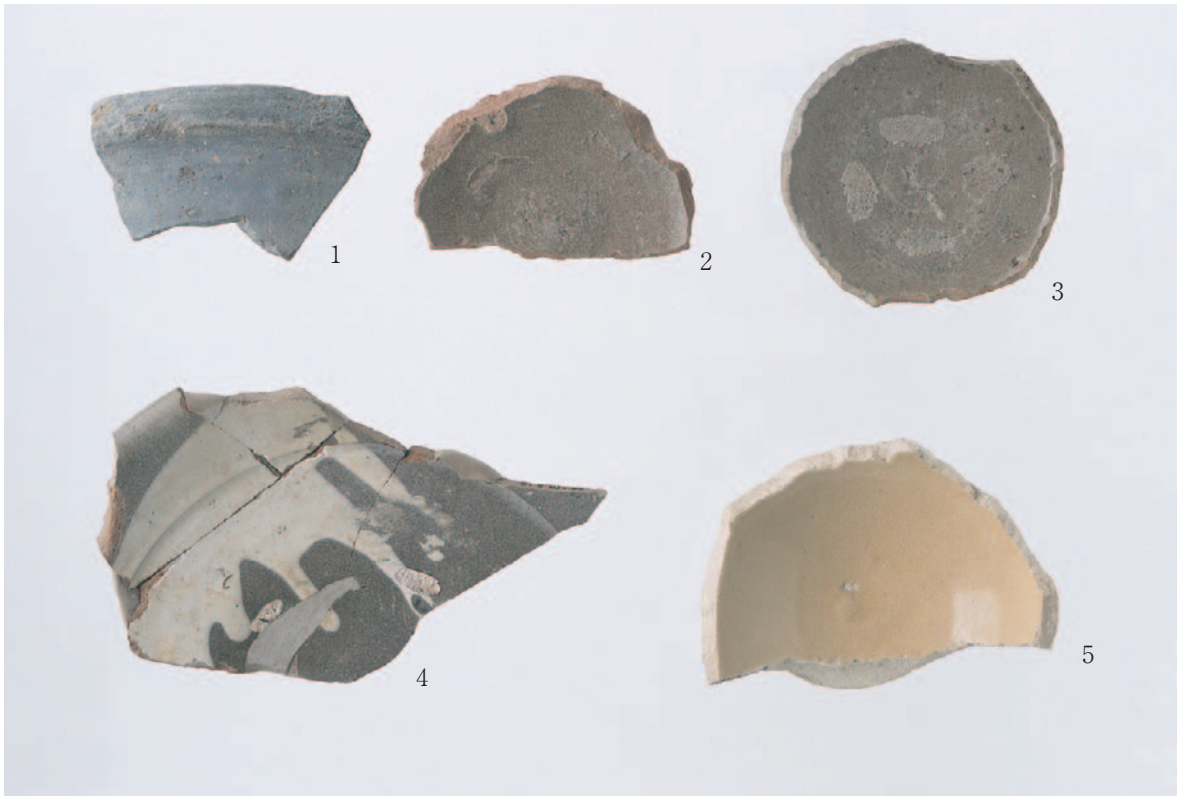
P - 7土師質土器(127)出土状態(南より)



P - 8土師質土器(128)出土状態(東より)



P - 12土師質土器(132)出土状態(北より)



東播系須恵器(片口鉢),肥前系陶器(碗・皿),瀬戸・美濃系陶器(碗)



須恵器(杯身・高杯・長頸壺・広口壺)



11

須恵器(甕)



75

須恵器(甕)



土師質土器(羽釜・鍋)



東播系須恵器(片口鉢), 備前焼(搗鉢), 瓦質土器(搗鉢・鍋)



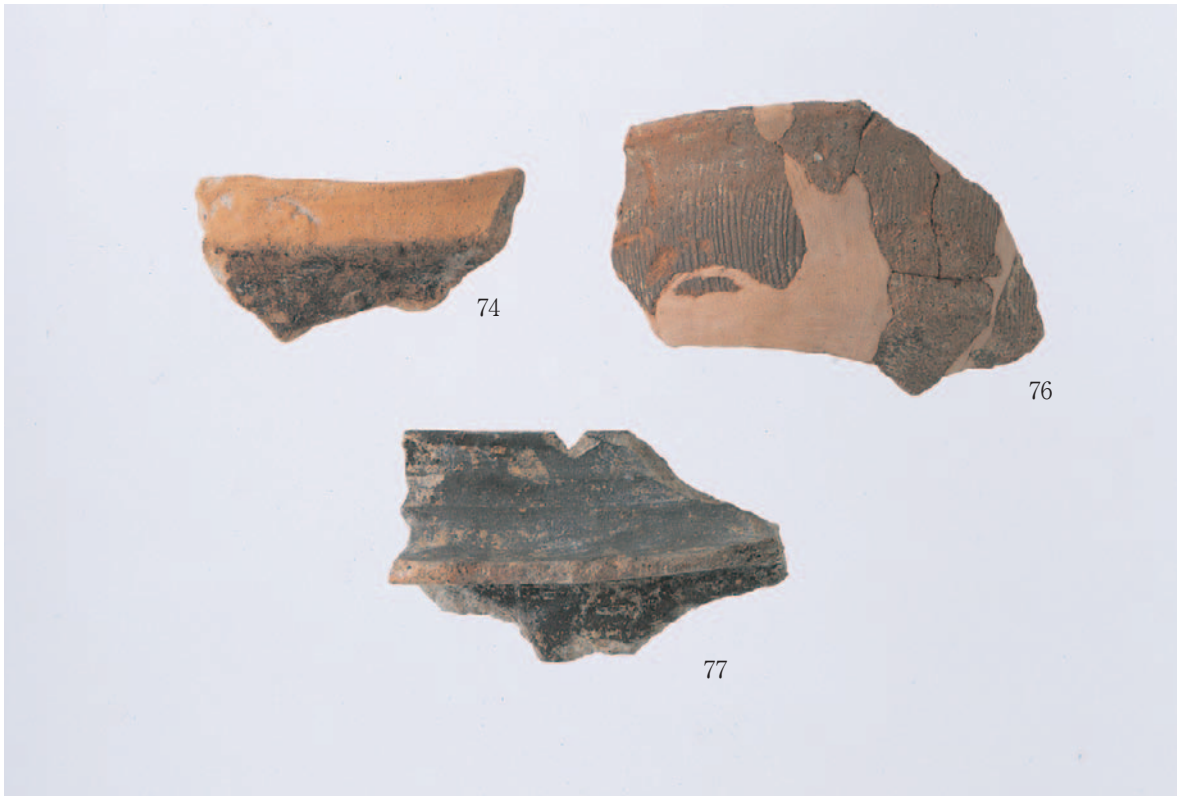
71

和鏡(保存処理前)



71

和鏡(保存処理後)



土師器(甕),土師質土器(羽釜),瓦質土器(羽釜)



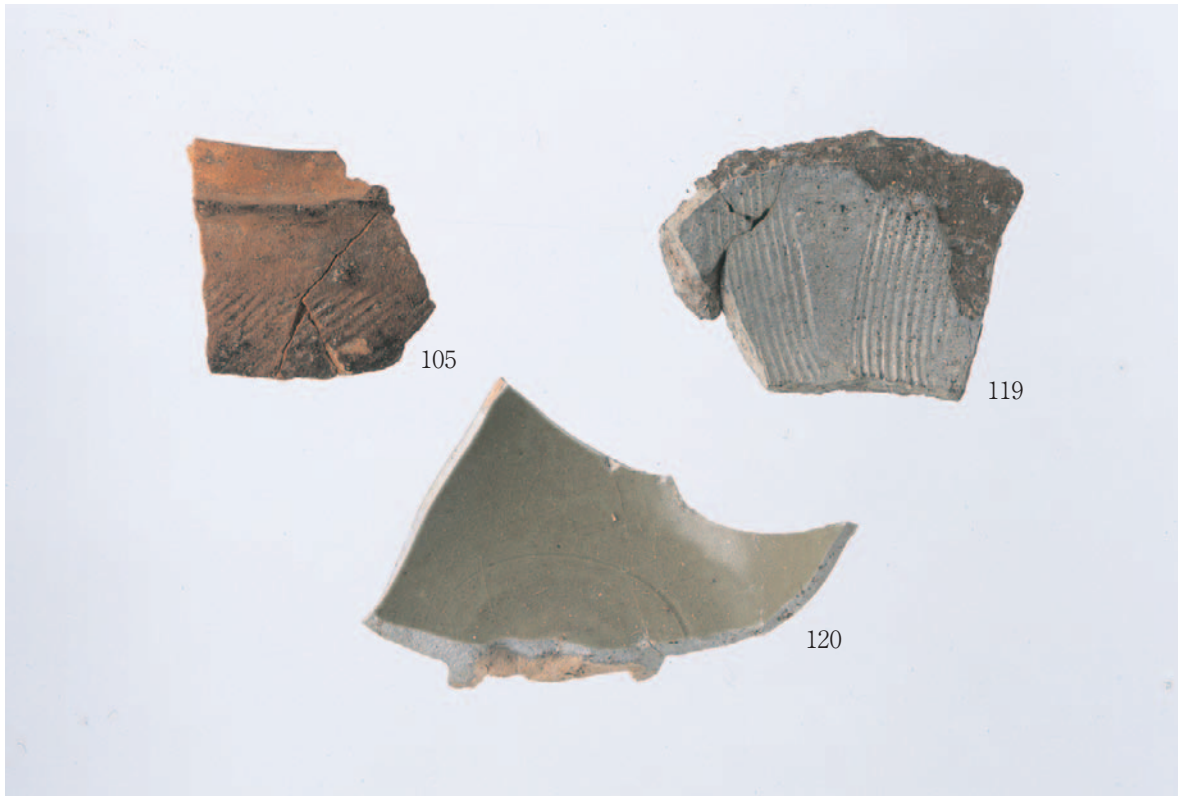
須惠器(杯蓋),東播系須惠器(片口鉢),土師質土器(鍋),常滑焼(甕),備前焼(搥鉢)



備前焼(擂鉢)内面



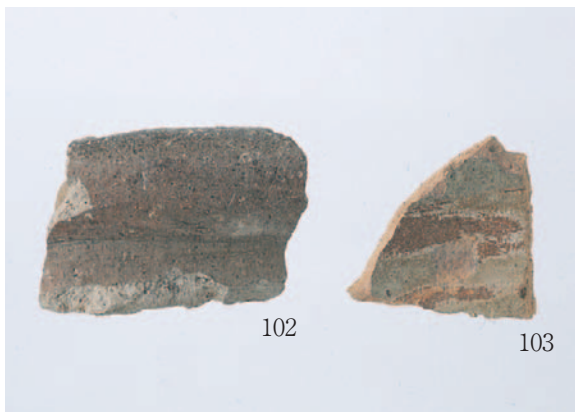
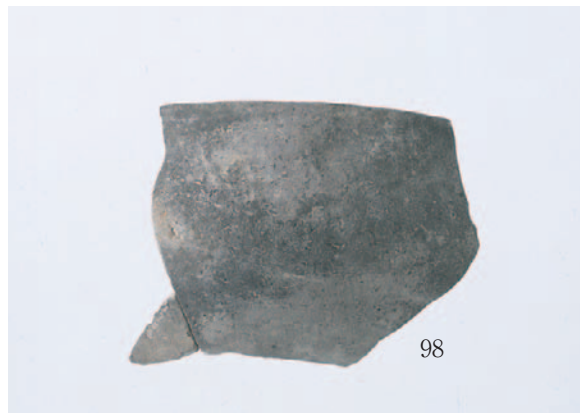
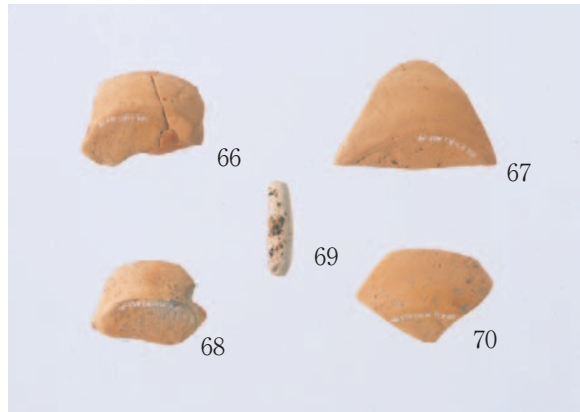
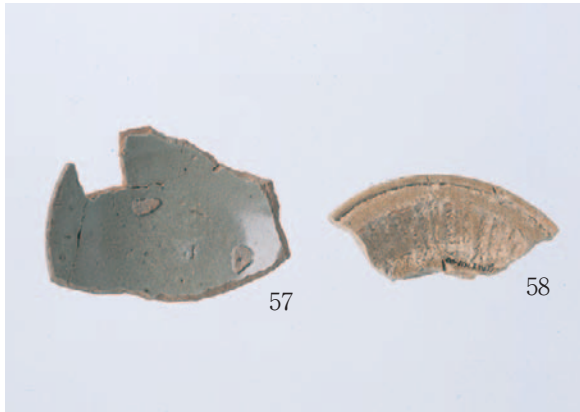
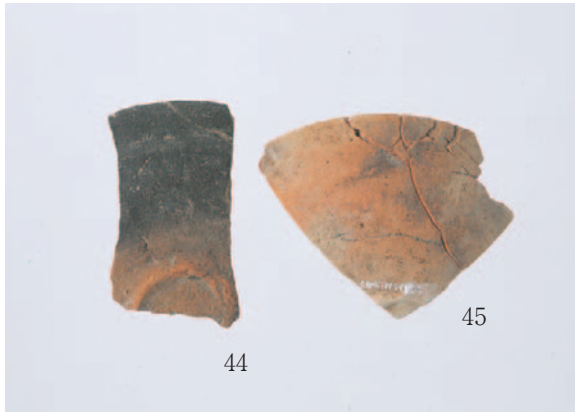
備前焼(擂鉢)外面



土師質土器(羽釜),備前焼(擂鉢),青磁(碗)



瓦器(椀),東播系須惠器(片口鉢),土師質土器(羽釜),瓦質土器(鍋),白磁(皿),青磁(杯)



瓦器(椀), 土師質土器(小杯・小皿・羽釜), 備前焼(甕・擂鉢), 瓦質土器(鍋), 肥前系陶器(鉢・皿), 瀬戸・美濃系陶器(菊皿), 土製品(土錘), 鉄製品(毛抜き), 石製品(紡錘車・磨製石斧), 古銭



土師質土器(杯), 瀬戸・美濃系陶器(輪花皿)



土師質土器(杯・小皿)



瓦器(碗),東播系須惠器(片口鉢),土師質土器(杯・小皿),土製品(土錘)



80



81



82



83



84



85



93



94



95



96

土師質土器(杯・小皿),備前焼(小壺),古銭



緑釉陶器(碗),土師質土器(杯・小皿),鉄製品(刀子)



瓦器(小皿),土師質土器(小皿),肥前系陶器(皿),鉄製品(刀子),古銭

報告書抄録

ふりがな	のだいせきいち							
書名	野田遺跡 I							
副書名	土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	V							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第73集							
編著者名	廣田佳久・岩本繁樹							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
のだいせき 野田遺跡	こうちけん 高知県 とさし 土佐市 たかおかちょう 高岡町	39205	050019	33° 29' 59"	133° 25' 52"	20000515 ∩ 20000714 20000724 ∩ 20001113	2,831	土佐市 バイパス 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
野田遺跡	集落	中世		掘立柱建物跡 54棟	堀	土師質土器 瓦器 東播系須恵器 瓦質土器 備前焼 常滑焼 白磁 青磁 和鏡	溝で区画された3つの屋敷跡を確認し、54棟にも及ぶ掘立柱建物跡を復元した。また、屋敷墓とみられる土坑墓から和鏡の山水及鳥鏡が副葬された状態で出土した。	
		近世		掘立柱建物跡 2棟	堀	肥前系陶器 瀬戸・美濃系陶器 近世陶磁器	また、今回の調査地区はホノギに「土居」の名が残っており、検出された屋敷跡との関連が注目される。	

本書作成データ

本書の作成には、MacOS9.1と以下のハードとソフト及びフォントを使用した。

まず、基礎作業はPowerBookG3/400とiBookSE、編集作業ではPowerMacintoshG4/733を使用し、原稿執筆とデータ処理にはJedit(PPC)1.08bとExcel2001を用いた。編集はすべてQuarkXpress4.1r2Jを使用した。

なお、表組はExcel2001で作成したものをタブ変換しIllustrator9.02にFlexTableを介して取り込み編集しEPSデータとし、挿図のうち掘立柱建物跡及び自然科学分析の挿図は本図をスキャンした上でIllustrator9.02でトレースし、EPSデータとした。

フォントはすべてNewCIDフォントで、和文フォントにモリサワリュウミンL-KL・太ミンA101・中ゴシックBBB・太ゴシックB101・見出ミンMA31、欧文フォントにピブロスRmAlpha、TimeItalic、Helvetica、外字にエヌフォー外字DXを使用した。なお、字詰めはDr.カーニングを併用した。

また、入稿までの編集・校正作業はCOLOR LASER SHOT LBP-2260PSで印刷したもので行った。

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第73集

野田遺跡

土佐市バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・

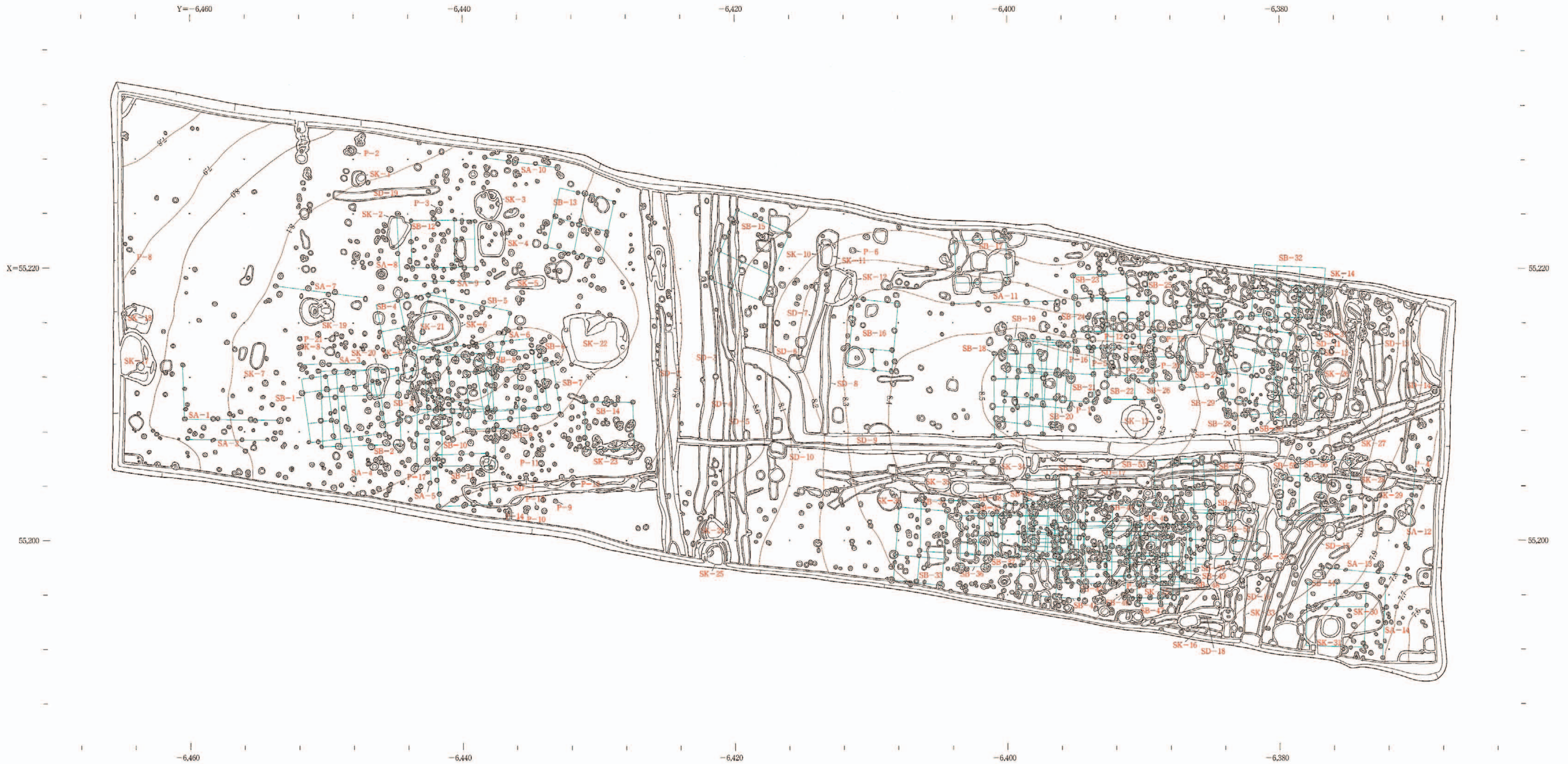
2002年3月29日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437 - 1

Tel. 088-864-0671

印刷 (株)飛鳥



付図1 野田遺跡第I調査地区遺構平面図(S=1/200)